

# 川柳塔

創刊大正十三年一月  
通卷八六九号



白川協加盟

No. 869

平成十一年度六賞発表

十月号

# 第5回 川柳塔まつり

## <役員会>

と き 10月9日(土) 午後1時-2時半

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒  
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

## <同人総会>

と き 同日 午後3時-4時半

ところ 同会場

議 事 平成10年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告  
平成11年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

## <記念句会>

と き 10月10日(日) 午前10時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F葛城

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・澎湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

兼 題 「つかむ」 (和歌山) 川 上 大 輪 選  
「時 計」 (広 島) 森 井 菁 居 選  
「人 柄」 (青 森) 小 寺 花 峯 選  
「おかしい」 (島 根) 原 章 峰 選  
「五」 (大 阪) 高 杉 鬼 遊 選  
「追 う」 (事前投句) 橋 高 薫 風 選

◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定

会 費 1000円(当日いただきます)

## <懇親宴>

と き 同日午後5時-8時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛

懇親宴会費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは締め切りました。

記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

# 句碑まつり

橘高 薫風

岡山県芸術祭参加、麻生路郎句碑建立50周年記念、第51回西日本川柳大会（九月四日・五日）に参加した。

NHK文化センター川柳教室の仲間を主に二十名ほどが前日から行動を共にしたのだが、路郎先生の五女西村梨里さんの同行は今回特筆すべきことで、主催の弓削川柳社にも喜んでいただけた。

それに先生の生まれ故郷の尾道市からも路郎顕彰キャンペーンに積極的にご支援下さる島本実旺氏（元市会議員）をはじめ四名の方のご来駕あり、私には感慨深いものであった。

当日には小林由多香氏（鳥取市同人）たち八名の句碑除幕式があつて、句碑の総数は二百三十一基となった。

昭和二十五年九月、

俺に似よ俺に似るなと子と思ひ

の句碑がJR駅前建つてから、この数に至るまでの経緯にはさまざまな地元の

ご尽力、特に管理のご苦勞を思わずにはおられない。しかし、句の力も絶大な効果あつてのことと私には思えるのだ。

先生の門下の一人後藤梅志氏は、この句に接し、「路郎先生はこの一句を創るためにこの世に生まれてきたと思える」と仰つていた。路郎先生ご自身は

寝転べば畳一帖ぶさぐのみ

が一番好ましいと言ひ、葎乃先生は

子よ妻よばらばらになれば浄土なりの句が好きだと言われていた。

それぞれに好みは違ふが、弓削川柳社は「俺に似よ」を選んで句碑にされた。

当時四人で発足した川柳社だが、町民の方たちが朝夕に見るこの句に親しみを覚え、何という温かい親心であろう、川柳とは何とやさしい文芸であろうと心を動かし、これなら私たちも親しんでみよう」と川柳愛好家が増え、句碑を建てて人が出来て近隣に広がつて行き、果ては北海道など遠隔の地に至るまでになった。

私はいはこれと言霊の力だと思ふ。

万葉集の千五百年ほど前の歌が残るのも言霊の力だが、句碑の建立にも句の魂

が呼びかけるに違ひなく、その支援と尽力を惜しまぬ町当局や町民皆さんの力が相俟つての成果でありましょう。

午後四時過ぎからはじまつた句碑の前での川柳まつりは、地元銘酒の鏡割りにはじめ、献茶の儀も行われた。

町長さんらに酒を掛けて貰つた先生はまことに満悦であつたろうが、初のこととて献茶には驚かれたに違ひない。

一服を拝しての梨里さんは、挨拶にも涙涙であつた。

「何もかも投げ捨てて川柳一筋に生きた父でしたが、たつた十七音字の詩に魅入られた人生だつたと思います」という言葉ではじまり、先生の語録「川柳は人間陶冶の詩である」を強調、多くの川柳人の励みとなられた源泉、弓削川柳社の五十年のご苦勞に深い感謝の意を述べられ、また、苦闘を続けた父を尊敬していまずと結ばれた。

あとは模擬店が出て賑やかな二時間、銭太鼓の妙技に酔ひ、ユニークな楽団の演奏とカラオケに我を忘れて時を過した。弓削川柳社の皆さんに深謝です。



座右の句

桐一葉猫も坐禪の向うむき

(薰風)

私の句

マイウエー我がモットーは真似をせず 井上 信子

## 川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 句碑まつり	橋高薰風	:(1)
国民文化祭・とつとり2002	小林由多香	:(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薰風選	:(4)
佳句感想	橋高薰風	:(54)
自選集		:(55)
川柳の群像 奥室数市	東野大八	:(58)
誹風柳多留二四篇研究 10		:(60)
水煙抄	河内天笑選	:(64)
大空のころ (105)	橋高薰風	:(101)
平成十一年度 路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞		:(88)
苗香の花賞・一路賞・各地柳壇賞		:(62)
秀句鑑賞 同人吟	菱田満秋	:(62)
水煙抄	黒田能子	:(109)

### 国民文化祭・とつとり2002

小林 由多香



今のわたしに、書く機会、しゃべる機会を与えられればもう一も二もなく、平成十四年に鳥取県で開かれる国民文化祭のことを書き、

しゃべることしか頭にない。

鳥取県での開催が内定という形で決まったのは平成七年であった。

以来準備段階として次々発足する県の各種連合会、協議会、委員会等へ、川柳界を代表して参画するようになり、わたしの川柳活動は国民文化祭を絡めてのものとなった。

折角、書く機会をいただいたここでも、おこがましく国民文化祭のことに触れさせてもらうこととした。

予て基本構想検討委員会でまとめられていた国民文化祭基本構想案が、七月六日開かれた国の国民文化祭実行委員会(平山郁夫会長)で正式に承認された。これを受けて近く準備や運営の主体となる県実行委員会を組織発足させて、開催に向け本格的な準備を始めることになった。

名称は、「第十七回国民文化祭・とつとり2002」、テーマ、「ふるさとふれあい夢

渺湖抄

八木千代選 …… (78)

茴香の花

宮西弥生選 …… (102)

「西」

森 茜選 …… (104)

一路集「住む」

山田高夫選 …… (104)

「無理」

早川盛夫選 …… (105)

初歩教室「パワー」

吐田公一 …… (106)

■句文集紹介『ペンシル』

安藤寿美子 …… (108)

九月本社句会

…… (110)

麻生路郎師句碑建立50年記念句碑まつり

西村梨里・小林周信 …… (114)

第51回 西日本川柳大会

…… (114)

エッセー 元氣印は負けなかった!!

西田柳宏子 …… (116)

柳界展望

…… (117)

各地柳壇(佳句地十選/都倉求芽)

…… (118)

十月各地句会案内

…… (135)

■編集後記

みつ子・楓葉 …… (136)

座右の句

うまく書けたと始末書を褒められる (俊 秀)

私の句

頂点の男難聴かも知れぬ

大谷 幸次郎

づくり」、会期が、平成十四年十月十二日から十月二十一日までで県内各地で開催されることになっている。

まだ七年先のことを考えていたが、もう三年後にまで迫ってきた。特に急がれるのが何日にどこで何をやるのかであり、会場が決まらなければ準備の進めようがない。

先日、直接事業を行なう文化団体側と、会場を受け持つ各市町村側両者が集まり、初めての意見交換会が開かれた。

事前に提出していたそれぞれの希望調査の集計が発表された。予想されていたが良い施設、会場には希望が集中しており、これに対して会場を持つ市町村側は、賑やかに大勢の人が集まる事業を望んでいる。当然のことではあるが、これではうまく収まるはずがない。これからその調整に入る段階である。

大会の成功は全国から一人でも多くの柳人に参加してもらうことである。良い会場を準備して、喜んで来てもらえる環境づくりに汗を流してゆきたい。

来年の広島大会には大挙して勉強に行く予定、再来年はプレ大会の開催、そして群馬大会へ引き継ぎを受けに行くことになる。

「国民文化祭・とっとり2002」に対してみな様の絶大なご支援とご協力をお願いし、鳥取県柳人一同でご来県を心からお待ちしています。

# 川柳塔

## 橘 高 薫 風 選

京都市 都 倉 求 芽

浮き草は沈みはせぬがさりながら

もうあとは退化するしかないヒト科

靴の紐解けているのにまだ背伸び

のほほんを命を使う終戦後(八月十五日)

君が代は歌わなくても国憂う

もう一度ポロポロになろうなあ日本

堺市 桑 原 道 夫

空蟬やわが身の穴を思うなり

電柱の陰に三十年前の僕

妻のにぎりこぶしを久しぶりに見る

電気カミソリが最も嫉妬深し

閉店後すぐくちびるを掃き集め

明日できることは明日せよ夏蜜柑

和歌山市 牛 尾 緑 良

袂まだ終えぬか雨が降りつづく

ターナーの青へ若さが甦る

一年の十分の一透析中

振りかえりざまに命を落としたり

藁をまた掴みそこねて日が暮れる

自画像を描くには少し若すぎる

枚方市 海老池

両の手で戴く重い紙ひとつ

貧しかったが遅れなかった縄電車

どやどやと来ないで欲しい禅の庭

旅の目にのどかに浮かぶ海女の桶

文化の違い出ている妻と嫁の味

甘い夢ゆらゆら赤い観覧車

八尾市 内 海 幸 生

朝積んだ形のまんま夜帰る

幾人を待つ公道の落し穴

浮雲を眺めて飽きず考えず

月並みな言葉ばかりの昏よ  
結局はひとり自分の箸洗う

陽が昇る希望を持ってと陽が燃える

下関市 石川 侃流洞

空豆の塩ゆで地ビール美味すぎる

人間がかかりあわてた蜘蛛の糸

慎重審議法案骨を抜く気だな

そんな魚釣れる筈ない父の魚籠

大胆なキセルが座る食堂車

鬼だつてわかるさ相談してみなよ

和歌山市 桜井 千秀

はめられた鋳型通りの演技する

盗み聞きしている影が動かない

化野の風は許しを乞うばかり

どうにでもなるから担ぎあげられる

仏像の横顔 亡き子生き写し

一本気避けて通れぬ向かい風

和歌山市 木本 朱夏

汗で顔洗う八月十五日

父の忌の我を鞭打つ蟬しぐれ

昼顔に醜重たきおんな居て

合歓の花ふわりとおとこ匿いぬ

聖書売り黒いリボンを髪に付け

献血車止まり草木の蒼ざめる

十年が早いと言った芸の虫

十五夜を富士山頂で見てみたい

十傑に成って碁石が重くなる

十代を思い浮かべるにぎり飯

十二支のどれも弱点持っている

十八番また始まったフラダンス

枚方市 栗林 光夫

この花を へくそかずらと呼ばないで

かわいそう螢の字から火を取って

富士山に裏表などありません

お日さまが五十も百もシャボン玉

七十路で七十らしい句が出来る

抜けがらに蟬の魂見えている

箕面市 唐住 実

趣味の欄 飲み歩きとも書きにくく

叱るほどでもない点をとって来る

遺伝子を組み換えてます冷奴

かき上げて宇野重吉の髪形

きっかけの拍手たのまれ会に出る

荒縄に豆腐をくくる故郷自慢

箕面市 岩津 ようじ

あやまちはくり返します原子力

あんたきつと長生きやでと脅される

その人のいる輪に入る盆踊り

飼主とペアのセーター・ベット君

炎天下病院へ行くバスを待つ

弾丸よりも骨箱用意した戦

芦屋市

黒田能子

泳ぎ疲れてマンボウは空に浮く

手のひらの砂さらさらと忘れ去る

公園の仲間はずれの影法師

ひぐらしのふるりの夏終る頃

一言を詫びることなく秋深む

はだか木に蕾をつけているいのち

鳥取市

上田宣子

汗だくのピエロの鼻が剥けてゆく

慈しむ青春ありてハーブティー

落ち鮎にわたしの影を見てしまう

のど飴の溶け切るまでを死んだふり

百枚の扉のお陰さまであり

露座大仏やがて互角の息づかい

倉吉市

野口節子

透け透けに腹が見えたら生きられぬ

ナンセンス一人相撲を取っていた

あの日から目がものを言う仲になり

成り行きで手中に落ちたさくらんぼ

曲る樹の心の叫び聞いてやる

四捨五入の四が地団駄を踏んでいる

母九十歳との別れ

鳥取県 さえき や え

おかあさん死んだらいけん言うたのに

のどぼとけ拾い母との別れかな

母のよに生きたやすべてならいたや

生者必滅しかと心にうけとめる

よく生きた母 万歳でおくり出す

温かい手だな 仏になる手だな

偶然がまだありそうな八月忌

悲しいとも美しいとも川灯ろう

飯の世に消すに消されぬ走馬灯

ほほえみを返そう 祈り終えてから

酒が入りそこやそこやの話し合い

田に生まれ田に育てられアキアカネ

寝屋川市 堀江光子

世紀末スターウオーズというロマン

それとないそうめんつゆの一家言

別れゆく茶髪後ろを振り向かず

棚からのぼた餅少々芯があり

述懐の後は静かな酒となり

しんと咲く菊一輪を胸に持ち

堺市 志田千代

この人も主役になれず冷奴

豆腐一丁薬味に気合い入れられる

湯豆腐をせかせかせかと食う男

お金持ちだろお豆腐ばかり食べている

今日も豆腐 大僧正になれませず

一日を湯豆腐でしめくりたり

鳥取市 徳田 ひろこ

逃げることばかりの癖を慈しむ

互角への焦りが汗になつてゐる

一途な話ばかり輝いてくる

残り時間を慈しむ午前二時

センサーのおかげあなたと直ぐ判り

わたくしを織りなす風になりながら

鳥取県 乾 隆 風

うわごととは捕虜生活の夢だった

好きな絵を描いて頭を遊ばせる

にんげんの仲間にとどけ鐘の音

裁量という腹芸は止めるべし

浄土には手ぶらで移住するつもり

日の丸をふた度汚してはならぬ

出雲市 石倉 芙佐子

精いっぱい吾が身を染める茜色

一片の愛さえ無くし紅葉谷

千尋の谷になくした児はひとり

散るもよし止まるもよし風の中

そこはかに秋の女は暮れなすむ

女とやら長い髪して通り抜け

ねぶた笛習う瞳が澄んでいる

風鈴の北には北の音があり

立佞武多来る日本一の鬼が来る

走り穂も見事期待のゆめあかり

りんご樹の巢から生まれた小鳥です

花火師が逝つて寂しくなる夜空

弘前市 小寺 花 峯

底をつくボトルに愚痴を詰め替える

パーゲンの指輪が似合う妻の顔

正直に生きろよちちの二言目

女三人飲めば一人になる銚子

短めの夏に狂っているネプタ

二次会へはつぼつ疼く足の裏

弘前市 須 郷 井 蛙

台風が護岸工事を試しに来

宿題が往復してる長電話

「ハイどつぞ」胸を預ける健診日

三浪に耐えた努力は母の鞭

淋しくて模様は赤い色をとく

病院食陶器に盛ればうまいのに

八王子市 播 本 充 子

飛び込んでみれば優しい人ばかり

札状に札状が来る良い出会い

黙々と今が私の成長期

水中の涙に誰も気付かない

実力が下の私が有利です

駆け上る花火は焼夷弾の音

横浜市 菱田満秋

一品を買って詳しく道を訊く

手を繋ぎ歩いてほしい妻の夢

元気が老人会をもめさせる

腰曲がりはじめ頑固が強くなる

うちあけて疑い深い人にする

あついあつい言うてるうちに秋が来る

富士宮市 渥美弧秀

登山道避けてリュックに風を入れ

信号を睨みつけてる車椅子

腰痛の老妻の心が汲みきれず

「新子座」を読む銀行は別世界

心友が急死の森は佗し過ぎ

晩年へ愛の証の詩とピアノ

静岡県 菌田 猿 杏

言い勝った女が泣いたカウンタ―

紫陽花も変った僕も変らねば

我が心見ているような霧の中

君が代で今更何でもめている

一着もピリも一生懸命だ

夕電車降りかなかなに迎えられ

大正の残党ばかり日向ぼこ

エステサロンから誘われている余生

願わくば観音菩薩に召され度し

句読点打ち損なつた雲走る

万灯流ししんがり行くは母だろか

阿呆鳥に突つかれているカラス

大阪市 本間 満津子

岐阜提灯みどりゆらゆら浅い夢

欲一つ天寿全う尊厳死

八十路指一本にも有る歴史

はいハイハイで総て済むなら楽なこと

お早うお帰り寄り道するなどはちがう

涼しい朝ふと胸に触れ去つた風

大阪市 井上 白 峰

激辛のジョークが胸に突き刺さる

百出の議論に詰まる節の目

待つたなし時間は後へ戻らない

百論を宥め賺してあみだくじ

さりげなく妻は急所に釘を刺す

石橋を叩く男に夢がない

大阪市 大塚 節 子

身辺多忙いろけもうけは抜きでつせ

新築のビルまたお月さん隠しやる

重陽は父の忌菊の甘酢漬

富山市 舟 渡 杏 花

祖父の頼煙草をやめた菊の露

むちうつても老いと暑さに勝てません

秋立てば込み合つてます大病院

堺市 柿花 紀美女

子の画布に父の塗りた彩がある

古手紙焼いて煙の行方見る

また螺子を巻いていくさへ月曜日

波乗りが下手で頑固に生きる父

盆供養僧も子も去り香の中

大皿へ山盛りにした家族の和

堺市 山本 半銭

盆の月去年のメモを頼りにし

夏休みわたしも粘土捻つて見

時々小遣い帳を睨み付け

原風景消える事ない戦の火

何もない草っ原から拾う夢

車椅子のダンスとっても良い笑顔

岸和田市 高須賀 金太

おばちゃん荷物で座席占拠する

おばちゃんの声でかいから恥ずかしい

おばちゃん口を挟ませてはくれぬ

おばちゃんがにっこりすると恐ろしい

おばちゃんが座つてばくが宙に浮く

天才はアルツハイマーかも知れず

八尾市 村上 ミツ子

初盆へ義兄の好物持つていく

芸術品の野菜ばかりが店頭

曲がつてる胡瓜シヤキシヤキ味は良し

見舞いにいくとすぐに泣きだす弟よ

泣きながら言うから話通じない

弟の麻痺の手足よ甦れ

松原市 玉置 重人

人形になれぬ男の向う傷

だけどだけどと手の内を讀んでいる

大正に理解ができぬ髪カタチ

天皇の背なの丸みにある安堵

病院とお寺にコネをつけておく

均等法寿命は女性上位です

羽曳野市 榎本 吐来

騒がれてノムさん浮いたり沈んだり

ありありと底意が顔を出す誘い

お薬を貰うのどかな事務と事務

ワンカップ何処かで妻の目が光る

夫唱婦随がまだまだ生きている先湯

ポーナスへ皆リストラに頷いて

羽曳野市 吉川 寿美

考えあぐねロダンの背になつている

走り続けた人生だつたどっこいしょ

袈裟斬りにされた刃跡よりストラよ

美辞麗句あくび一つを噛み殺す

亡父の帽子が父のかたちにおいてある

胸底の深いところで水の音

東大阪市 谷 口 義

見せられるところは見せるじんましん

葬儀屋が親身になってくれている

一人ぐらい変ったのがいてあたりまえ

人生一度指を鳴らして立ち上がる

兄嫁はここという時涙ぐみ

ようわかるわかると言うは他人様

茨木市 井 上 森 生

空蟬や仕事に生きた形の跡

余生には歳で温める深い知恵

甲子園燃えるカンナの夏の宴

炎帝に応えて強く滝の音

まほろばは平城京の朱雀門

八月の祈念見守る蓮の花

寝屋川市 岸 野 あやめ

水を得た魚のような孫の恋

ロンドンの水では生きぬ上煎茶

一応は素直な老母のふりをする

リストラへ妻子老親ローンあり

右顧左眄 裸にされてゆく日本

ケイタイがふたり同時に鳴る電車

寝屋川市 籠 島 恵 子

揺れているわたしに気付かないあなた

真珠婚あなたの彩にまだ遠い

青臭いわたしを責める世間体

ふるさとはリズムで招く阿波踊り

前略の後は見事な簡条書き

秋ガキテモ木々ノ個性ニ負ケテイル

寝屋川市 太 田 とし子

任職の齢も数える里の寺

本伏せたら赤い朝顔咲いていた

巽かけて笑いおさえるウツフツフ

お大事に気安く言える人のこと

海底に沈めておこう玉手箱

高らかに歌いましょうよさざれ石

豊中市 安 藤 寿美子

あんた地獄へ私浄土へほなさいなら

遺族年金おおきに長生きいたします

損得は考えなかつた若かつた

下手な句で下手なスピーチしめくくる

一枚のハガキの温み忘れない

孫五人神様ほんとにありがと

豊中市 湯 浅 馬 洗

ヘルパーが来るから前に掃除する

懐で温めたこぶしパーに負け

ファックスのマニアル伝授孫きびし

征きし友の日の丸返る孟蘭盆会

国旗国歌国のかたちを間違えな

日の丸君が代運動会はりトマス紙

豊中市 滝北博史

ご自慢の白桃持って友来たる

宵山は月下美人とりピングに

カサブランカ咲く夜は夢にバーグマン

姉上はデートトリッヒに負けぬ脚

誕生日は住吉大社夏祭り

長男はアメリカ暮し原爆忌

和歌山市 古久保和子

山に生き山を墓標に黒部ダム(黒部 2句)

大パノラマの山へにんげんを曝す

パンドラの箱が開いた満員電車

ケイタイ電話突然笑う炎天下

じいちゃんのくしやみはいいつもおこりんば

フェミニストの汗もやっぱり塩辛い

和歌山市 楠見章子

朝顔とひまわり庭の鼓笛隊

打ち水を何度だいいじな人を持つ

塗り替えたお寺少うし生臭い

夏草の中で耳まで遠くなる

ミステリー蒲団の中も凍りつく

政治家も僕も不埒な影を持ち

神戸市 中村 ゆきを

運不運配給でっせと阿弥陀はん

ここに居る何をバタバタふためいて

便利さの果てにちちはは捨てられて

乗り遅れどうやら人の世も解り

愛してゐるつもり毒を盛っている

パソコンを買ったがこれはパンでない

加古川市 吐田 公一

塵一つ残さず引いた妻の城

遊びから学んだことがたんとある

弥陀の掌も濟度し難い毒カレー

ヨチヨチと赤子に還る試歩の朝

定年の夜空佗びしい遠花火

夢のない世に夢くれる宝くじ

尼崎市 長浜 澄子

再出発しよう眼下に見る日の出

ちっぽけな私を恥じる異国にて (フリスベン)

音や空気も此の世のものか十字星 (ポルトタグラス)

都島に五年住んだと言うガイド (ケアンズ)

サントワ マミーはんなり今を生きている

迎え火を焚く三年という月日

伊丹市 山崎 君子

待ち合せ夜スイレンの咲くところ

月下美人真夜中になるしまい風呂

読みさしの本一三冊娘の寢息

雨やんでよさこいの町盛りあがる

熱帯夜お寺の鐘はやわらかい

立秋も猛暑の風にさらわれる

西宮市 林 はつ 絵

雑踏の中で命を確かめる

倒けてみて先輩のいたことを知る

雑音に奥がまだある死なれない

老姉妹あの川の名を思い出す

飛ぶ時を待っている間の薄明り

潔く一段下がり身構える

西宮市 山本 義子

机上より北アルプスの幾何模様

佐渡の海 荒れてるほうが唄になる

夕日赫し今日は大名旅である

忙しいにコーヒータム含みます

終章まで原稿用紙買いだめる

本屋で待つ早目に行つて満ちている

西宮市 井上 松煙

坪庭に花や野菜も欲張つて

自分だけ自分に拍手よしとする

体調を爪で占う私流

郷愁の田楽食べに古里へ

入道雲話しかけたい顔になる

兄が逝き冷え冷えとする真夏日に

大掃除亡父に見せたいものが出る

当節は鬼を笑わすことばかり

タイガス火花のようにあと静か

わが家でローンでないは家内だけ

生爪を剥がしたような色を塗り

仲人さんクーリングオフ出来ますか

鳥取市 武田 帆雀

読みが浅かった冷たい駅の椅子

一票のために招待状が来る

在宅と言つてしまった髭を剃る

身の上を語らぬ女の舞扇

新聞の詰め碁を解いて一人旅

新聞を昼読む菊が忙しい

鳥取市 近藤 佳子

美しく生れて人が信じれず

出発も終着駅も母の胸

愛ひとつ育てられずに捨てられず

墓洗う母の肩こりほぐすよに

貧乏性安物ばかりよく似合う

忍の字が人生と知る歳になる

米子市 政岡 日枝子

同じ根を持つて互い庇い合う

筆談で値段の交渉までして

常識派らしい隣の離婚劇

西宮市 長谷川 淳

弟は重いつづらを手放した  
合格の机を少し労ろう  
冷や奴料理作った顔でいる

米子市 青戸田鶴

太宰 寺山 逢えそう北の汽車に乗る  
なりゆきにまかすしかない百日紅  
芝居したつもり母には見通しだ  
ひまわりの後ろ姿は見えないもの  
トサ金の雅び水まで華やいで  
いつだって隣にばかり陽が当る

倉吉市 最上和枝

花の精かすかな秘密持っている  
繚乱の舞台衣裳を値踏みする  
自転車を押す手に重い小商い  
一杯のコーヒー雨を褒めている  
連風のの一つ一つにある野心  
ピリ辛の印度カレーの虜なり

鳥取県 土橋はるお

晩酌に均等法を行使する  
戦争に敗けた話は泡にせぬ  
暑気除けに口笛吹いて見るもよし  
どん詰まりチロリン村の道の駅  
仏ごころか蚤一匹も慈しむ  
大の字に寝て虫干しをしています

華やかなときの乳房は豊満に  
家の鍵渡してからの遊び癖  
気付かない明日に夢をかけて生き  
幽霊があなた恋しと呼んでいる  
結び目をゆるめた姑の寝言きく  
美しく歳をとりたい月見草

鳥取県 土橋睦子

花は人 人は花から満たされる  
無花果が甘い誰かに恋をして  
ブランコをゆっくり漕いで秋を読む  
イヤリング揺らし熟年パワーなり  
もう少し生きたくなってレタス蒔く  
コーヒーもココアも飲んで朝寝坊

鳥取県 田村きみ子

娘をくれと言う青年の細い腕  
花嫁の父とはこんな残暑かな  
婚家での他人はお前独りだぞ  
欠点はわが子に弱い父の背な  
嫁ぐ気の子に念仏が通じない  
風呂敷に穴はないかと裏返す

鳥取県 鈴木公弘

出雲市 板垣草丘

奥さんに会ったよ何処で言いません

子供らにたしなめられて続く仲

寝泊りを小柄な人と組んでいる

地方紙を切りぬき送る親でいる

出雲市 小白金 房子

波団扇やきなす匂う老母の汗

式典の過去を引きずる夏の雲

夜露浴び梅減塩の香がしみる

石仏と一服語る夏木立

古ノート読んでまた読む子の宝

盆客の話子猫も出て座る

島根県 小砂 白汀

ピロードが咲いていましたグリアです

自家用車路をふさいで長ばなし

直線に生きて今更曲れない

捨て球に使われましたが生きてます

けんめいに走りいまでは寝ています

これもショー大事なクラブ叩きつけ

岡山県 小林 妻子

もう少し洗うて功德だと言おう

本心は話さぬ方がいい空気

女傑ではあるが菩薩には遠い

肚の内読まれてからの蚯蚓です

戦争はいや勲章が何になる

おばあさんの号令ばかり聞いている

曾孫守り 昔むかしの子守り歌

持ち合せの頭脳を責める現代語

死ぬ事を忘れて生きておりました

一枚の舌しかくれぬ母でした

止まらない時を惜しんで老いてゆく

トンボも蝶もあきた飽食の蜘蛛

竹原市 三宅 不朽

身寄りなき老いにまつわる赤とんぼ

鷹の格きじの情けを恋う枯野

灯をともしかぎりのなやみつぎざりし

汗しとどろぐ頼杖ついている

墨差しにいろはにほへとしかとあり

糖尿病語感なんとかならないか

香川県 木村 あきら

玩具屋でしきりに粘る野球帽

正論を胸に収めて宮仕え

あの世では通らぬ金を貯めている

Tシャツが街をゆく地球に明日があり

盆栽をカアちゃんよりも可愛がり

息抜きに来たのに相棒留守らしい

香川県 池内 かおり

身長体重 大きな声で言わないで

好物の桃召し上がれ仏さま

藻の情け知らず川面が澄んでいる

目を伏せただけで渦中の人となる  
我慢した足から先に老いてゆく  
宴たけなわ隅の男の目が座る

香川県 神保坊太郎

同じ名はお前しかない影法師  
老人力などとおだてが腰にくる  
歩かねば埋れ木になる砂あらし  
気のきいた事も言わずに来た卒寿  
保育器に天下取りそな顔がおり  
寝ていてもホトトギス聞く過疎に住み

唐津市 市丸晴翠

柔肌に触れず診るのは数値だけ  
日替りの痛み姑が口にする  
青春の軌跡本棚の葉  
パパママがちちははとなる面接日  
カタカナ語増えて新聞持て余す  
換気扇回してママの愚痴飛ばす

熊本市 永田俊子

虹の七色枯れた心に灯を点す  
わたしの未練知ってる虹が消え残る  
月旅行止しなさいよと月が言う  
貧樂でよし私の宝は雪 月花  
正論が言えぬよい子の成れの果て  
コンクリートが落ちる杞憂という言葉

砂川市 大橋政良  
豪快な幕引きをするポックリ死  
道草を覚え世間の裏を知り

企みも頭数では動けない  
見えそうで見えない裏を持っている  
紅のいろ赤信号に見えてくる

弘前市 福士慕情

妻入院家の仕組みが分からない  
欠席の理由がなくて出る会合  
頼まれて適当にとは何の程度  
得をした気分には卵黄味ふたつ  
鮎茶碗魚の文字を得意げに

弘前市 相馬銀波

平凡な耳目で悩む一行詩  
騙される不安が酒を手ばなせず  
手を貸した故に同罪かも知れず  
真夏日の葬はネクタイだけの僕  
農閑期メダカ捜しの靴になる

弘前市 高瀬霜石

ポケットの中でこわばる正義感  
懐にとび込んでみる肝だめし  
朝の胃にしっかり残る焚火跡  
逃げ上手運にもきつと逃げられる  
齋場へガチャンと頭切り換えて

弘前市 佐治 千加子

鳩時計沈黙深き対時かな  
真相を知ってひとつの灯消す  
鍵開けて一人の闇に包まれる  
一升酒酔えぬ男が風に酔う  
七十年の生きざままたまる古帽子

弘前市 一戸 ツネ

明日を生む何か欲しくて灯を点す  
追い駆ける世の中だから生きられる  
感謝して新世紀への下駄を買う  
生きてます袋の米も生きてます  
今は昔霧の緞帳八月忌

弘前市 蒔苗 果林

妻が逝き風二人分吹き寄せる  
難聴に嗚が見えるよう喋る  
まだ生きて居たい生甲斐夢と燃え  
登るしかない八十路坂 臙脂色  
花発表ひめこ椿守炎(祝椿守)

弘前市 岡本 花匠

開帳の幽霊になみだ応答の図  
男傘骨だけ残る罪いくつ  
愛と憎ブレンドされて来た平和  
意地悪な嫦娥見ている愛と憎  
阿呆と津保化再会の口よくしゃべる

弘前市 今 愁女

ねぶたとねぶた違いを観るに泊りがけ  
したたる汗農夫に穂波が礼返す  
祖父母のこと知らぬ世代と墓参り  
男はおとこ女おんなの阿波踊り  
不況風どこ吹く風と阿波おどり

弘前市 高橋 岳水

八月を絵にする北の火の祭り  
直ぐ踊る木偶にもなれる歳の功  
手拍子に乗れない木偶が輪を抜ける  
父として残す譜面は汗で書く  
矜持みな捨て去る仮面舞踊会

黒石市 相馬 一花

演技派と知つていながら騙される  
素顔から思いも寄らぬ言葉尻  
蝶と蛾の違いが判る水中花  
エアコンがパンクしそうな陽が沈む  
幸せをこれ見よがしの薬指

十和田市 小笠原 敏人

蟻達もあまりの暑さに夏季休暇  
暑いからお茶でも飲んで家に居る  
避暑に来た娘親子も嘆く日々  
孫が来て角が無くなる八畳間  
目で追って触って舐めて育つ孫

十和田市 阿部 進

東京都 後藤 早智

昇進のたびに冷たい目に出逢い  
役所まで催促にきたバーのママ

手を貸さずじつと見守る愛もある

夏祭りネブタ囃子で活気づく

自給自足我が人生に悔いはない

青森県 西谷 大吾

あふれ出る涙に嘘があるものか

河童にも茄子と胡瓜を分けてやる

遮断機に阻まれている福の神

本心がワイングラスに浮き沈み

柔肌の露出に視力無限大

大宮市 八田 敏

時雨ゆく下校の子らを追いかけて

浴衣よりジーパンあぐらの孫娘

鈴虫とめだか押し付け孫旅行

演歌好き詞と情けわかるから

買った墓地浄土に遠い草いきれ

町田市 竹内 紫 靖

コンピューター描く詩人の平均顔

神のマウスで辿った文科理科の軸

万歩して三十何度が当てる皮膚

投げる打つ泳ぐの機会なく長寿

映像はガムを茶の間は豆を噛む

移り住みビルの向こうに見る朝日

魂の安らぐ場所にたどり着く

ふるさとと同じ香りのする横丁

見なれない顔と言われてお買物

江戸の町生き続けている商店街

横浜市 清水 潮華

また会える別れも後ろ髪引かれ

炎熱に赤信号を突っ走り

特急に乗換えてから忙しい

エレベーター奈落の底を予見させ

百日紅 夾竹桃と夏競つ

横浜市 菊地 政勝

雑草に庭の広さを教えられ

難しく考え過ぎる旗と歌

コーラスは姿勢正して唄わせる

拘りの七輪が待つ初さんま

口下手な友の嘘なら信じたい

静岡市 安本 晃 授

他意はない暴言に酔う祭り酒

世紀末の介護保険と余命表

自惚れの明日が読めぬ花吹雪

健康へ野菜ジュースの老いの朝

褒めそやす言葉の中に針がある

富山市 酒井 輝

意地悪も一度きりならいいクスリ

年老いた海女にも若い鰭がある

強情な赤スリツバが歩かない

句読点わすれて今日が見当らぬ

老齡の穴を埋める片思い

富山市 島 ひかる

称名がとぎれとぎれに滝の音

真つ白いハンカチで逢う好きな人

新婚に貰うかわい腕時計

フルムーン黙って背中流し合う

陽炎に負けず劣らずカンナの朱

富山県 増田 紗弓

嫁さんが来るのでわたし磨いとく

植木鉢おすそ分けして花談義

聞き上手ついほどだされたボランティア

約束が花のない頃忘れられ

ご来光めざし励まし合う登山

大山市 早川 盛夫

疑われない人を怖いなと思う

不機嫌な金魚世の中逆さで見

蛙にも多少なまりがあるらしい

素晴らしい一日だった大ジョッキ

三万円からは妻の許可が要り

可児市 板山 まみ子

娘らを嫁がせてから墓のこと

立秋をよもや知るまいシクラメン

篝火にお城もゆるる鶉かい舟

川風を受けて鶉舟のよい話

金額は妻が決めますのし袋

京都市 山海 友照

この道を通つすぐ逝つた無言劇

もう夢に出てこぬあなた昼の月

ゆつぐりと父が休んでいる帽子

高台寺ねねもわたしも歩きます

わたくしは元氣秋風の中に居る

京都市 小西 未佐子

三代目京都人やと認められ

大阪で鍛えたボケを持って余す

炎天下 電工さんは蟬を抜く

堅い事言わせて欲しい時もある

芥箱で未だ咲いている七変化

京都府 稲葉 冬葉

あくせくと貯めた昔は自閉症

親離れ近代風にネジ巻いて

買い替えた方がさっぱりすると嫁

逆毛が立っている笑顔はご職業

好きだった男の人が先に逝き

大阪市 神夏磯 典子

血糖値私の腕に預けられ

知らんこと沢山あって幸せだ

救急車臓器移植のこと思う

苦勞した母には掬うアクが無い

苦しみを掬ってくれる青い天

大阪市 西出 楓 楽

香水よりお香の似合うお人柄

文学と仲のよかった結核菌

夢にも死ぬ夫何しているのやら

あやまりっぷりいいが反省していない

タイトニツクのビデオにハマる午前二時

大阪市 小林 周 信

豆腐屋の裏にゴム長干してある

末席で拍手ばかりをしてる僕

湯豆腐は奥丹ついでの南禅寺

インスタントの麻婆豆腐を褒められて

口下手で妻に感謝が難しい

大阪市 中田 あい子

リストラに残ってほしい人がやめ

送り火をみつめる星は亡母か亡子か

取引所場立ちの消えた宵天神

塀の上木蓮うかぶ星あかり

ウインクが見合わす目と目にかわる日よ

大阪市 榎本 落児

ふるさとの棚田に夕陽美しい

愛一つきつと埃にまみれる

本場に鎌倉市には栗鼠が住み

風鈴が鳴ってる今日もさわやかだ

糖衣錠僕はあるたを信じます

大阪市 田中 節子

とんぼりのピエロの眼鏡馴染む秋

雨の庭 泰山木のいと白き

シャイな人拍手の渦を全身に

卒業式拍手の中を泳ぎ出る

ひとり風呂急ぎ立てられることもなし

大阪市 町田 達子

ロマンの島巡るあちこち瀬戸の旅

世紀の橋はとっくり眺めてから渡り

石切さんに無理な願いをかけている

惨いこと印度の列車事故ニュース

川風が少し冷んやり淀川の堤

大阪市 松尾 柳右子

あくびまで可愛く見えた若い恋

店番のあくび連発猫が来る

旅空に出逢う人情生きる糧

人情の花咲かせてる裏長屋

胸張って堂々と泣く優勝旗

机上論交わせば負けぬ本の虫  
大阪市 清水絹子

床ならべ肩ひじ張らぬ寡婦同士  
梅雨晴間下弦の月のみかんいろ

三藏法師今に足音奈良文化(奈良博物館)  
もしも事故たぶんだめだろう下は川

大阪市 玉置英子

枝豆は三粒入りのを先ずつまみ

ハイジャックその日も同じ蟬の声

少な目にいい皺顔に刻みたい  
デザインは世界に誇る日章旗

よくやって下さいました中坊さん

大阪市 川端一步

宿題を終えた夢見る盂蘭盆会

吊り皮に毛ガニしつかり朝ラッシュ

文庫本持って眼鏡を忘れてる

ビッグニュースやっぱり妻が先だった

盗聴が話題になっているわが家

大阪市 板東倫子

並行線オンザロックの融ける音

役僧がちょっと人間臭い寺

株高も円安もない火の車

独り居へほほ笑みかける窓の月

姓も別お墓も別と言う夫婦

紅葉がいたわっている原爆碑  
世相にも上澄みほしい濁り酒  
夢に見た人と違うが今の幸  
苦勞の日日今は楽しい親子です  
延命茶信じて今日も吞んでます  
大阪市 鈴木トヨ子

法案が通過日の丸安堵する  
暑いからひっかけ橋で恋あさる  
冷ビール飲んでいのちをつないでま  
日本へ松茸早くからおこし  
台風が活を入れてる平和呆け  
大阪市 清水利武

秋の服露出度減ってほっとさせ  
ビール缶ガラガラ親子よう飲んだ  
土用干しみごとにしわくちやな梅に  
ここにまで年寄がいる長寿国  
それとなく張り合う兄と飲みながら  
大阪市 渡部さと美

古里の人は古里尊ばず  
艶やかな凌霄花堀の外  
百日紅蟬も止めぬ渴きよう  
秋告げに独りできたか赤トンボ  
ガラ空きの地下鉄譲り合えという  
大阪市 杉澤汀

大阪府 辻川慶子  
振り返ることを忘れたこの猛暑  
強がりには言わない昼の螢たち

娘はサラタわたしゆっくり瓜をもむ  
沙羅の花何のみれんもないように  
上り坂途中あたりで背く馬

大阪府 川久保睦子

朱の色を薄めうすめて秋のいろ  
平凡にならないように朱を入れる  
未練など捨てておしまひ夏帽子  
蟬しぐれ心音までが狂いだす  
蟻の列汗した亡夫もその中に

大阪府 津守柳伸

夏謳歌 河内音頭もリハビりに  
歯答えを好む女の揚げギョウザ  
天然の鮎と信じている貴船  
ダイオキシシしばし忘れる蟬しぐれ  
FAXで届く電話はありがたい

大阪府 河井庸佑

先走り周りに敵が増えただけ  
無理な予定自分ひとりを苦しめる  
新しい知識増やした聞き上手  
呼び掛けに答えて胸に赤い羽根  
飲み仲間誘い合わせて十三夜

大阪府 岡本久峰

メカは苦手わが老いらくの泣きどころ  
難波宮ゆく夏惜しむ蟬しぐれ  
税金のつかい棒で持ち上げる  
豪邸の主カタカナに入れ替わる  
介護保険またもやすねを齧るとは

大阪府 北勝美

灯と人で万灯供養むせかえり  
難病に心経の声届かない  
駄句もよし介護疲れが癒されば  
六地藏線香にむせる串だんご  
ステテコで僧を迎えた盆供養

大阪府 安達はじめ

病妻へこれで良いかと水加減  
箸置いたところへ貰うあずき飯  
辞める気で言った度胸を褒められる  
人災を天災にする政治論  
例えばの話で無理を言いに来る

大阪府 津村志華子

五十年苦楽を共に回る独楽  
路地裏は人の情けの吹き溜り  
病室の孤独を癒やす赤い花  
法善寺万の願いの苔不動  
病院は三食昼寝堪えている

大阪市 奥田良子

切売りの西瓜さびしく一人食む  
今日もまた昨日もきいた遠花火  
老いぐらし心の花も枯れかける  
遠会釈やせた私に気づかない  
亡夫知るや電話の歩く世にいきる

大阪市 稲本凡子

土砂降りのあと雨漏りのリズム感  
病院で老化現象うつされる  
余生ではちよつとが無理になっている  
毎日が一人舞台で忙しい  
もの忘れだろうか頭振ってみる

堺市 神原文

人生を貫いてきた愛 愛 愛  
人生に入道雲と愛の海  
平凡に思い出だけを抱く余生  
悔しいが余生というより他はなし  
減入る時啄木の歌口ずさみ

堺市 黒田真砂

お互いに年とつたねと三回忌  
衿元のほくろが語る裏の顔  
人生の卒業までは頑張ろう  
蟬の鳴き声 目覚めの朝の清々し  
盆休み娘等帰りきて賑々し

岸和田市 岩佐ダン吉

未来図の地球に消えていた緑  
リードされやつと自分をとり戻す  
みんな消えた八月六日のヒロシマ  
九条が危い声を大にする  
スランプも汗実る日を信じてる

岸和田市 原 さよ子

八月の猛暑は老いをせめたてる  
昭和史へ書き入れておく原爆忌  
通帳へ書き入れてある母のメモ  
領収書の裏に割勘書き入れる  
母の歳こえても母を恋うている

岸和田市 長谷川 呂万

起きた子と月に立つ人視た歴史  
テレビ欄時代劇選る今日の孝  
十五年閉ざした肌を今磨く  
時差合わせ終ったとたん電池切れ  
待ち合わせ恋人の頬満ち足りて

岸和田市 芳地 狸村

弁財天祭るお堂が一里塚（紀州街道へ歴史の道）  
三の丸稲荷だんじり発祥地  
格子窓なごりとどめる城下町  
街道に歴史を残す顔がある  
すかたんの英語で値切るショッピング

岸和田市 田中文時

岸和田市 藪野けい子

ことごとく敵に回して二日酔い

ガン告知で三度の手術生き返り

善政の筈が重荷となる福祉

熟年を夕繰り出して盆踊り

景色より土産の方が気に掛かり

蟬ひとつ道でバタツク炎天下

ハードルを下げて与党の軍門に

暑中お見舞に旅打ち合わせ

世知に長け遊びに長けてまとめ役

定年に同権主張挑む妻

岸和田市 原苑子

和泉市 西岡洛酔

金剛杖シャンシャン鈴は鳴りませぬ(七月富士登山)

一点を見つめ人形の生きる術

八合目暖かいお茶四百円

飽食に踏ん張り利かぬ子に育ち

あこがれた富士頂上は赤い岩石いわ

文机に今日は孤独を持って余し

雲海に身を浸し仙人となる

雑草の俺に未来は読み兼ねる

御来光荘巖の中今生きる

陽炎の向こうで世相揺れて居る

岸和田市 井齋一齋

泉佐野市 山本蛙城

すれ違う夫婦で生きた五十年

心臓を上げたい待てよ肥大かも

紙質の値打見分けるヤギの口

消費税上げよと十円玉が待ち

寝心地はタンスがいいと言ふ諭吉

海に出て派手な入り陽につまされる

わがままな犬がきめてる散歩量

蟬時雨永田町まで届く気か

切れそうで切れぬ私の余命表

憲法へ一瀉千里の国歌法

岸和田市 井伊東吉

貝塚市 池田寿美子

朝体操まじめ世代は休まない

ヨットレースふくらむ夢は風まかせ

習いごと一息入れて夏休み

階段の手摺りはいつも恋人で

図書館で過ごす私の消夏法

空想の中に拵がる好奇心

暑気見舞先を越されて出しづらい

連開くシャッターチャンス夜明けから

仏壇の供花も萎れる妻の留守

くつろいで花屋の前に立止まる

八尾市 宮崎 シマ子

その昔海の子今はクーラーの子

盆の僧知らぬ先祖の名も唱う

もういいよまあだだよあの世はトワの隠れ場所

帰る子について行きたいブランコも

電池切れそれから喋らない妻に

八尾市 宮西 弥生

休養の雨降りつづく盆流し

友達の友達が来るログハウス

熊野古道この手この足ありがとう

ため息がひとつ浄土が近くなる

友達の夏はでっかいエアメール

八尾市 高橋 夕花

古都暮色 女ひとりの風の駅

お見舞はすこし祈って三年坂

盂蘭盆会 亡母の声するねんころり

出来の悪い姑です嫁に庇われる

私の芯までほどく仕舞風呂

八尾市 高杉 千歩

トランプもパズルも四年生に負け

売り家の隣の木にも水をやり

半額セール禁を破った夏の服

食欲の秋に背を向け目刺焼く

最後の晩餐 鉄火巻頼みます

八尾市 村上 剛治

冷えたビールがちらつき帰路は急ぎ足

終着駅のない欲望という電車

世話をした汗に伝えてくれる茄子

寝かす子におとぎばなしをする団扇

トップに立つと隠した筈のぼろが出る

八尾市 神原 まさと

水害のニュース夏日が雲を割る

アウアウアウ爺と分っているのかな

一歳と三歳が泣くエネルギー

タイガース元の穴から出たがらぬ

恐がっていると病気が追いかける

八尾市 篠原 いつふみ

いづもやの前で大きく深呼吸

この暑さ脳細胞が沸いてくる

まだ生きているかと旧友が久し振り

豊かさに慣れて心を見失う

誰ももう叱ってくれる人が無い

八尾市 生嶋 ますみ

里帰り鍋光らせて去る娘

玉ねぎの精気じんじん目にしみる

金婚へがたがきてます凡夫婦

誤りを友は電話で詫びてくる

美容院いすに座ればすぐ眠り

八尾市 長谷川 春 蘭

母子手帳孫も母への第一歩

日日好日父母の歳越え八十の夏

旅に燃ゆロマン不倫と言わば言え

海へ出て海の広さで戻る蝶

争いの角は持たざるかたつむり

八尾市 吉村 一 風

血管の水入れかえる朝二杯

まないたのリズムで誰かすぐ分る

ご近所を大事にしいや嫁ぐ娘に

検尿のコップ名前を確かめる

絵日記の孫に心を洗われる

松原市 小池 しげお

空色をいつも下地に塗っている

それぞれが象を触つて来たんだな

ひたすらに勝つと信じて豆の蔓

トロフィーも額もレジャーのものばかり

幽霊が騒がしすぎて出られない

藤井寺市 高田 美代子

今のうちに逃げろと雲が味方する

秋風や少しいけずがしたくなり

女らしさを無くしおんなでございます

魚の目が怖いと泣いた男の児

居酒屋で酔いつぶれてる夏の木偶

藤井寺市 楠 昭子

暑いですねただそれだけで夏を終え

強がりと言えるも酔っている間

口軽い男の目玉よく動き

商人の腰の低さに隙がない

馬鹿になり裏の裏をば読んでいた

藤井寺市 中島 志洋

注意した母が階段踏み外し

明日の夢信じて歩く裏通り

青い目に通じぬ父の英会話

我慢することを覚えたアルバイト

あっさりとおっぴーエンドにせぬドラマ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

鳴くための樹を探し当て蟬透ける

ふざけてはいない蟬 仰向けに死ぬ

放し飼い犬には犬の庭の良さ

句碑にするちようどよいのが庭にある

傾いて影をずらすと重なれる

羽曳野市 三好 専平

竹槍を持った右手がしびれ出し

電話などかかってこない暮らしむき

お向かいの犬にしょっちゅう叱られる

月に水あつたらどないするつもり

紙芝居「あしたおっちゃんまたきてや」

羽曳野市 福田満州

被爆者を思えばぎっくり腰ぐらい  
子供の数ベットの数に負けそうな  
うちの子と言うて抱き癖つけた犬  
一喝を我慢してはる咳払い  
くよくよと思いかけたらお念仏

羽曳野市 酒井一壺

食事すみ葉いろいろ見せて飲み  
そう言えば今ごろ虹も見なくなり  
いらいらへ今日はまっ赤な服にする  
財産は本と本箱だけとなり  
マンガ本日本の歴史よくわかる

羽曳野市 徳山みつこ

世界一周君に私に風光る  
進んでも進んでもなお春の海  
ブランドへ少うし気後れあるディナー  
関西のお方と知ってからの距離  
どうぞよろしく船友となる三ヶ月

河内長野市 井上喜醉

親の恩とうに忘れて粗大ゴミ  
山一つ消えて淋しい昼の月  
大物の魅力は顔がパスポート  
酒抜きの全快ガードを妻固め  
美しく老いて浴衣の紅を引く

河内長野市 加島由一

転勤の先にもきつとうまい酒  
電話では言えぬ今から来いと言う  
飲む打つに夢中いまだに恋もする  
諦める余裕大人になりました  
転ぶ度絆を太くする二人

河内長野市 植村喜代

セピア色写真が語る平和な日  
来た頃は蛍も飛んだ橋の上  
別れたら二度と合わない貝合せ  
酒減らず毎回食事減らしてる  
余所によく気が付く人が妻泣かし

富田林市 藤田泰子

冬から春へ時の流れに感謝する  
花枯れる備前の壺に生けられて  
傍受法それから小さい声にする  
コーヒーと砂丘の夜明け待っている  
答えないことが私の答えです

富田林市 片岡智恵子

掌の中に帛紗の汗をたたみこみ  
末座にいて流しそうめんはるかより  
旅の宿寝つきの早さよ日焼けの子  
静けさの少しちがった盆の朝  
団地一棟傾くほどに干す蒲団

富田林市 松本 今日子

吹田市 古川 喜美子

初体験シルバートゥーズラれる

月蝕も花火も一人見てる闇

浮き草の浮くも沈むも自己主張

夏祭り鰻のすきな亡母であり

雨つづく充電中の六地藏

東大阪市 森下 愛 論

煩惱の軽さに秋が転げ落ち

カタカナをずらり並べて文化論

孫の酌酒が旨いぞ敬老日

自惚れをはがせば只ののんだくれ

ゆっくりと飲んでゆるやか冬迎え

東大阪市 指宿 千枝子

大阪を箱庭にして生駒山

寝坊して八月六日蟬時雨

日照りです私は魚座水恋し

寝ころんで暑さをしのぐローレライ

白桃が好き好きでした仏さま

交野市 山川 日出子

シルクロード三蔵法師ゆめ運ぶ

小四の漢字クイズに降参し

情熱のリオのサンバが神戸一

晴の日は音色ささえる古ピアノ

好きな時目で旅をする世界地図

息子の嫁に拍手をおくるお父さん  
大拍手そつと拭いたは汗じやない  
心透く日です豆腐と角正し  
衣替えて内なるものも正さばや  
養つてもらつてるのでついて行く

吹田市 山本 希久子

ひっそりと秋 夾竹桃も私も

子の未来 時どき海を見せておく

祖母ばなれ上手にできた三年生

唐突な愛に出会った立ちくらみ

高々と孫に白旗あげておく

吹田市 瀬戸 まさよ

炎天に優しく招くさるすべり

騒音の蟬に平和を噛みしめる

にこやかに悪魔も入れて酒を酌む

高い値の活け魚夫と買う市場

キャンセル料高いが後日期すホテル

吹田市 石原 靖 巳

赤シャツを着て七十を若返る

生真面目な人が疲れを置いてゆく

酔芙蓉 誰がために咲く風の盆

暑気ばらいサンマが秋を連れてくる

魔の雲を忘ればはしない夏帽子

吹田市 野下之男

赤トンボ歌と本では飛んでいる

朝顔もはよ見て欲しい初化粧

心ブラに好奇心までついでくる

生きている歓喜が爆ぜる蟬時雨

日本の景気は知らん蟬時雨

茨木市 藤井正雄

古写真カンカン帽は祖父らしい

滑走路空港の月小さく見え

嫌良い時の帽子のかぶり方

初恋が会釈をくれた盆踊り

年金が足を引っ張る立ち泳ぎ

茨木市 堀良江

地下鉄のホームで遊ぶ鳩一羽

エスカレーターの真横の出口から降りる

陽に祈り月に願いの母の日々

衣替えして夏山は美少年

さりげない白シャツ憎いほど似合い

高槻市 川島諷云児

ほんとうの声で笑える水いらす

人ごとのように傘寿が来てしま

高い堀めぐらし何が怖いのか

上ばかり見て気付かないうしろ指

禁酒禁煙仕掛け花火で終りそ

高槻市 傍島克治

脱線は妻のレールの老朽化

ノルマへと蟻がせわしく秋暑し

会費とられて古希の祝をしてもら

枝葉末節聞く身に楽し口ゲンカ

俺もその気になればと言つて五十年

高槻市 井上照子

空っぽの頭に孫が聞きに来る

あなたのた言えぬ間に夢さめる

赤ワイン相手の写真よい笑顔

制約もないがきちんと帰らねば

孫の髪黒く短く先ず安堵

守口市 結城君子

秋の雲いいな冷凍魚がとける

如才ない言葉で軽くあしらわれ

妖怪のように息子が現われる

花野への嫁の誘いこころ揺れ

それからのことは言わない影法師

枚方市 前たもつ

原爆の語り部老いて敗戦忌

君が代の君だけですかこたわりは

ぼくは頑固一生一紙と決めている

のんびりと淀川渡るモノレール

気のゆるみだろ

露草と青を競うアメリカカンブルー  
枚方市 森 本 節 子

すずめ鯛 舞うや三国の玄達瀬

ベライサキ 平目 カワハギ 水中散歩

約束の十三日は金曜日

藪からし すいすい土手の顔馴染み

枚方市 寺 川 弘 一

どの花も不幸な鼻に香らない

これ以上楽しいことはない健康

微笑んだまま人形の長い夜

神様がロックなさった変換キー

臨終にカーテンコール聞こえない

枚方市 鈴 木 政 子

獣医にも健保が欲しい愛犬家

艶やかな肢体が並ぶビーチ傘

物干でグイヤと話した夏の夜

強風の夜明けの雲は万華鏡

ご先祖より海外旅行の盆休み

枚方市 二 宮 山 久

父母達者今年も参る盆の里

頂点をさわめた男の目がきれい

遠花火初恋人を思い出す

花火どき夢みた昔を思い出す

幸せな妻だとおもう高いびき

寝屋川市 江 口 度

カサブランカうちの花だけ小さすぎ

向日葵と月見草です君と僕

トリミング パーマ代より高くつき

フクロふくろ袋もう包み方忘れそう

フライパンの中で今年の夏に逢う

寝屋川市 森

茜

尾道の坂は芙美子をいとおしみ(尾道にて)

尾道の猫と人語を分かちあい

街なかの青田に時が止っている

聞き分けの良い子をあわれとも思ふ

追憶の町で遮断機下りてくる

寝屋川市 平 松 かすみ

おいしいに嘘のなかった水蜜桃

祖母偲ぶ雷おこし食べながら

和ダンスをすっからかんにしてみたい

ばあちゃんの笑顔上手に撮ってくれ

ハムキュウリ 孫の一品舌鼓

寝屋川市 柴 田 英壬子

国道沿いこんなところにかくれ棲み(八月一日転居)

ガス計器メーターゼロと換えにくる

引越して人情の山ごみの山

ことさらに黒のブラウス白髪かな

きわめて静か樹々の合間の常夜灯

寢屋川市 富山 ルイ子

夏草の茂るに任ず駐車場

柳誌に名が見えぬと案じ ふみ電話

読みたかつた本数頁ずつ深夜

ずり落ちた面そのままに黄昏れる

知らなければ幸せだったこともある

寢屋川市 坂上 高栄

国旗国歌愛国心の抛り所

四捨五入切り捨てられたのは私

忌は巡る玉音聞いた日の無口

誕生日我が手をじっと見る無口

物忘れ増えて呆ける自尊心

寢屋川市 北岡 波留吉

しきたりを守り田舎の土となる

悔し涙拭くハンカチが見当らぬ

新妻の甘い香りが情そそる

徒らに尾を振り針路見失う

相性はどうかあれ愛はつのりゆく

寢屋川市 酒井 勇太郎

羞恥心忘れ生まれた子ら跋扈

脇役の無念 主役は関知せず

離籍した孫も参加の喜寿祝

人妻に慕われ気持だけ拝受

小市民だから安堵の日々過ごせ

豊中市 田中正坊

喜寿達者つぎのハードル傘寿だな

戦死した兄の分まで生きている

上りより下りの方があぶないぞ

暑いからしばらく休むスニーカー

時々やはり気になる子の暮らし

豊中市 吉田 あずき

国中が盆踊りとや落ちつけぬ

ロザリオの出土 祈りは朽ち果てず

コバルトのワイキキを飛ぶ鳩も白

体中の灰汁が抜けきるハワイの夜

ハワイからつかえ素足で帰宅する

豊中市 岸田 知香子

予期しない天の句涙頼伝う

夕立ちの一時虹に運かける

お互いに守りされ守りした五十年

事多く十年日誌行足らず

ナイターに仕事人間うさ晴らす

豊中市 井上 直次

失敗が肥やしになって早や傘寿

肩書を失うてから丸い人

合掌の心清しく出る山門

海征かば聞こえてきます 永田町

古日記喜怒哀楽の顔がある

豊中市 松岡久留美

曼珠沙華亡き人偲び墓詣り  
孫よりの誕生祝よく似合い  
唯一人秘密あかせる友がいる  
お互いに隠し事な楽天家  
子の寝顔今日一日のうさもはれ

箕面市 出口セツ子

夏課題親の学力試される  
一言の温みで明日へ生かされる  
テレパシー交信したい流れ星  
憎むより許せば軽い夏帽子  
星月夜素直に溢れ出す心

池田市 藤井計光

九輪草野におきそつとはぐくめよ  
金金金 目くじら立てる貧乏人  
根回しの下手な親父が大好きだ  
石楠花の植込みに立つしのび逢い  
昼下り光の刃となる夾竹桃

池田市 岡本吉太郎

いいわけをしないと決めて男去る  
核の傘いつまで当てにしてよいの  
生涯をマルクスに生きすべてパー  
農に生き毎朝見上げた空の色  
海征かば唄いし頃の純朴さ

池田市 栗田久子

一雨がいきなり秋をつれてくる  
石仏へ通じる道の吾亦紅  
ファッションも自然のままに朽ち葉色  
火を吐いて踊れとばかりまんじゅしゃげ  
耳ざとい狸寝入りにおつき合い

大阪府 米澤俣子

頑固さを粘り強さに変えて生き  
UVカット気にせぬ漁師の歯の白さ  
夏大根の辛味脳天まで抜ける  
キャミソールの次はパレオの流行る夏  
去勢した愛犬の目が優しすぎ

大阪府 榎山隆盛

エアコンを効かし午睡の終戦日  
好きな酒止めたらあんたらしくない  
新品のジーンズむきに洗ってる  
ボールペンしかめっ面に似合わない  
欲ばけの老眼鏡の度を落とす

奈良市 天正千梢

お遍路の足どり軽しお接待  
夏に酔い囃子に酔って天神社  
この家も園児いるらし笹飾り  
土用干し思いうかべて紫蘇をもみ  
手品師が帰って来ました梅雨晴れま

奈良市 米田 恭昌

ロボットを敵にまわした職人芸  
疎まれて煙草蚩が舞うテラス

ばあちゃんのへそくり孫の日に備え  
孫のわるさ叱るその目が許して

さざ波もたたぬ我が家は倦怠期

生駒市 北山 悟郎

炎天に汗の姿は美しい

汗流し身を粉にしてる男なり

優しさを側で少しも判らない

八十が情熱のかけら未だあるぞ

大器でも弱いところは秘めている

大和郡山市 坊農 柳弘

敬老会一寸お洒落に蝶ネクタイ

巾着茄子浅漬けなんとも酒うまい

赤とんぼ祭り囃しが近くなる

運動会紅勝て白も孫二人

土瓶蒸し旬のうまさよ妻の酌

大和高田市 岸本 豊平次

折詰を開けて会費で納得し

セールの顔に似合わぬ丸い声

故里の夢亡き父母の若くいる

恥ずかしい気があるうちは呆けてない

戦争が青春だった同窓会

和歌山市 福本 英子

雑草のいのち大事に水を撒く

いのちある間に愚痴のありつたけ

サグコの碑いのちの限り折つた鶴

尖らせたペンで小骨をせせりだす

隙あらば敵討つ気のボールペン

和歌山市 堀端 三男

大往生を味読している昨日今日

達磨さんが笑い出したら怖かろう

恋をしたらしい伎芸天の微笑に

二礼二拍神棚に置くジャンボくじ

感謝していますと陰で舌を出す

和歌山市 川上 大輪

ハッと気づいてから笑うのを止める

倒れないドミノ間合いを知っている

便器の蓋を男は閉めたことがない

ロボットにタッチしてから職が無い

ふる里に帰れば出来る深呼吸

和歌山市 川上 富湖

腰に手を当てて牛乳飲まないか

この道が昔線路であった頃

息苦しくないのか土の無い墓で

H B ほどの付き合いならするが

ケーキ三つあれば主張は曲げられる

和歌山市 青枝鉄治

旗色を讀むのに長けた回り椅子  
眞実を喋つてからの向かい風  
犠牲者が出てからついた歩道橋  
末席で無口の雑魚が矢を磨く  
一票の重さを知らぬ浮動票

和歌山市 細川稚代

あの人もこの人も亡し盃蘭盆  
名医とや心の内を明かそうか  
御立派な両親がいてまだ嫁かす  
年金の度に亡父さんありがとう  
饅頭と甘納豆でたる亡夫

和歌山市 岩本美智子

敗戦の炎暑は今日の比ではない  
母の芙蓉枯れて寂しい盆詣で  
秋の影青い銀杏の実を拾う  
人恋しくて街の活気を浴びにゆく  
陽炎のようにゆれてるわたしの眼

和歌山市 福井桂香

ウインクをしながら睡蓮がひらく  
雨足が伸びる広重の絵から  
南北統一むくげの歌を聞き給え  
赤ワイン西日を浴びてかぼちゃ煮る  
くすぐすやろう仁王の足の裏

和歌山市 山根めぐみ

清濁を合わせて吞もうよ月見草  
やさしさが細る心をわしづかみ  
苦勞性だつて貴男がさせている  
力泳はいらぬ余生の無重力  
いっせいに鳩が飛び立つ一大事

和歌山市 木村初子

火の章を越えて残り火抱いている  
一時の極楽新茶に桜餅  
暁に銀鱗はねる朝渚  
心機一転あしたの風を信じよう  
八十路坂輝く汗はまだ流す

和歌山市 山口三千子

梅漬けた友に枯らせぬ庭の紫蘇  
山門でみくじ交通事故注意  
立て札の通り柄杓で身を清め  
慈母観音の胎内浄土めぐりする(北陸の旅 2句)  
湖の屋形船から観る火花

和歌山市 池永正範

気取るなら表彰台に立てばよい  
草笛の遠い音色に遠い日を  
楽しみは秘湯で聞ける国訛り  
山頭火行乞なのかわが書棚  
花束でそつと涙を拭いている

和歌山市 榎原公子

ゴーギャンの裸婦と暑さは頂点に

汗かいて流す昨日や今日の灰汁

夏の陽は長し四十二日間

木槿落つラジオが不慮の死を告げる

溜息が小さく洩れて法師蟬

和歌山市 玉置当代

還暦の鯛めでたきや哀しきや

夫婦茶碗が笑いころげている厨

片道切符スリーナインにまだ乗れず

満月になると夫も吠えている

満ち足りた日々にあしたが怖くなり

和歌山市 堀畑靖子

ミミズにも助けてもらおう土づくり

見栄なんか不要と思う野良仕事

待つことも手なり治まる砂嵐

ごしごしと洗われ顔を出す本音

井の中の蛙家族がすべてです

和歌山市 田中みね

詰問へ歯の根が合わぬ被告席

歯が立たぬ相手と見せてジャンプする

来たるべき時が来たたと身上書

悔しいがはるかに若い同年

まだ話あるのに電話切れしました

海南市 三宅保州

近所では杖をつかない母である

行間に心を垣間見る句集

賞状には以下同文と書いてない

怒ってる人に言いたいハイチーズ

素っ気ないけれど頼り甲斐の辞書

海南市 谷口義男

歳月が経てば薬になる苦言

花開蝶来 ロボットに依るコンテスタ

シナリオの通りに生きる余命表

健康で糊口凌げるだけの欲

口先の親孝行でも待って居る

和歌山県 中後清史

リストラの話へそつと箸を置き

無駄金を遊び上手は使わない

小回りが利いて仲間に入れられる

たかが胡瓜されど胡瓜の河童巻

人生は迂回できるが戻れない

神戸市 木村貴代子

自己主張うすめる白を混ぜておく

車中での化粧白い目気にもせず

とりたてのトマト配って朝すがし

加減して追いかけてやるみそっかす

浴衣とも思えぬ柄よお値段よ

神戸市 池田善守

厚顔無恥好きな間は気にならず

夏が来る前に夏物パーゲンし

亭主ほめおだてることのへたな妻

朝洗いな夜また着てる一人者

世の中の騒音消し去る蟬の声

尼崎市 春城 武庫坊

知らず知らずに歴史が戻る怖い風

盗聴より怖い近所の地獄耳

手を伸ばし秋の手がかり追い求め

盆の墓地いくさを語る兵並ぶ

ペルセウスの剣の火花雲の中

尼崎市 春城 年代

美しい老女はやはり生れつき

見目かたち良くて争いごと知らず

おおかたは寿命のままに流れ着く

褒めことば過ぎててもご遠慮申し上げ

うす桃色のドラマありそう酔芙蓉

尼崎市 的場 十四郎

カラフルに水着群がる浜の青

波のりが上手で夫婦仲がよい

荒浪にのって漁船が出る平和

逆風もくじけぬ妻ときた安堵

幸せは五体すこやか立てるいま

伊丹市 小熊江美

起されて残念でした亡夫の夢

コンサート終つて余韻月も良し

バス停へ自然に駆ける癖がある

羅漢さん自然に心なごませる

夕涼み浴衣が似合う亡母だった

西宮市 秋元 てる

糸底をまさぐり昔に遊ぶ母

磯浜菊つんで高知の旅終る

五十年振りの会話エンドレステップのよう

ねじ花のねじれ二巻きして登る

帰国の娘 左利き頓にきつくなり

西宮市 門谷 たず子

椅子取りにあきて夫の眠りぐせ

三叉路でふり向く癖が直らない

退院を迎える朝の紅を引く

修羅抜きたいのちと遊ぶ子後の海

いわし雲お礼詣りが待っている

西宮市 西口 いわゑ

つまりいた石をスタート台にした

ひまわりのような高校生の群

小半日悪と結んだ楽しい日

雨しとど屋根のあるのがありがたい

古時計誰かがねじを巻きにくる

西宮市 奥田 みつ子

意のままに育たない子よまして孫  
いらだちを八月の陽に焼きつくす

さびしさのじんじん入る秋の窓

稲光天の生気をわがものに

光つてた汗がたちまち目に沁みる

西宮市 亀岡 哲子

新妻の爪うすみどり夏が来る

人工島の隙間に小さい小さい浜

タイムスリップあなたに逢いに行くお盆

ゆつくりと星よ流れよ願いごと

日足伸び待宵草はまだ蕾

西宮市 緒方 美津子

濃紫なすびのそれは庶民色

こごめ播く忘れた頃に庭雀

ドナーカード役立たぬ程生きたくて

どくだみは庭の死角で自己主張

窓際にいたから見えた梢あり

西宮市 牧 渕 富喜子

お母さん今年も少し縮んだね

炎天の大樹息して原爆忌

親馬鹿は蛇行蛇行で流れ行く

草木黙って八月を耐えている

迎え火を女三代して囲み

西宮市 刈田 泰司

地下鉄で見た外人の軽いキス  
叩き上げの先輩にして部下思い

針の山素足で登る稽古する

自慢話したくてやってくる娘

同窓会病氣自慢の花が咲く

宝塚市 嵯峨根 保子

鳩居堂 鎮静剤が効いてくる

棚経で解けたのうまくさんまだ

空蟬になれぬ姿のままで果て

涙から涙のあとと消えている

赤い羽根ことしの愛を迫られる

宝塚市 黒台 伊佐武

夏ばても知らぬ顔して蟻渡る

鮮緑 齒朶千畳の八甲田

回復の兆し嬉しき秋の空

初競りの秋刀魚一匹二千円

成功は人物 金に運も要る

川西市 松本 ただし

ガイドライン軍歌が欲しくなりました

君が代と日の丸万歳忘れてた

休耕田棚田がしらけかえってる

言い訳はせぬ大正のいぶし銀

原爆をなだめすかして盆灯籠

三田市 北野 哲男

鳥取市 倉益 一瑤

真ん中の孤独の席が去り難い  
ほどほどに育って家業継いでくれ  
晴れ男異常気象日雨にあう

陣痛に女は母の顔になる(初孫誕生)  
へその緒が切れて柏子木一つ鳴り  
産声の感動 腫ぬれてくる

くのかアフターファイブ早変わり  
背信で投げた指輪を探してる

命名を書くラブレター書くように  
この孫が嫁ぐまではと生きる欲

相生市 中塚 礎石

鳥取市 植田 一京

事務用の女の文字が気にかかる  
もう既に読みとっている無表情

笑い声あふれる窓が開けてある  
名月に灯を消して酒酌まん

朝の靴亡父に挨拶鈴一つ  
警告知生きる喜び三年目

人間よ愚か過ぎると月が冴え  
謎ひとつ解けないままに夜が白む

憂さ晴らし恨みつらみの百叩き

謎ときはまだまだ出来ぬ古い蔵

姫路市 古川 奮水

鳥取市 杉本 孝男

金賭けた眼鏡に曇る日日もある  
辛抱の固まりらしい胃潰瘍

口籠る素振り相手も見逃さぬ  
東京へ自慢の娘あり過疎守る

飛び越えた溝に片方靴落とす  
雑草に負けじと燃える彼岸花

わが城に籠った妻が出て来ない  
幸せな両手よ父母に手を引かれ

ときめきが走りルージュを捜す部屋

幸せな両手よ父母に手を引かれ

兵庫県 大谷 幸次郎

鳥取市 岸本 宏章

舌巻いて笑う幼児にうそは無し  
まだ青い稲穂に雀たわむれる

無器用に生きた男のごっつい手  
せっかちが作ったらしい改札機

盆僧の読経と競う蟬しぐれ  
光らない名前が墓で待っている

逆光に敵の弱点見せしめよう  
名が売れてハト派の仮面外せない

遺伝子を組み換えられて冷や奴

名が売れてハト派の仮面外せない

鳥取市 岸本孝子

目覚しがびったり鳴ってたたかれる  
バラバラにされる覚悟のカード書く  
気晴らしにあれやこれやと試着室  
子の名前みんな呼んでる老いた母  
若い日のキャンプレモンの味だった

鳥取市 両川洋々

万華鏡やがて悲しい死を覗く  
頂点のイスに地雷が埋めてある  
老化した脳じや移植も無理だろう  
春の絵を画く日命の色を足す  
不景気へ仁王も気落ちされたまじ

鳥取市 春木圭一郎

星マーク付けてわくわく待つ句会  
星くずを拾い集めて花束に  
流れ星見果てぬ夢を捨ててくる  
白星を重ね男の顔になる  
かたわらに星の数から選った妻

鳥取市 岩原喬水

泥舟に乗って不運な星に会い  
老骨がズキズキと泣く油切れ  
政治屋は積んだ金だけ汗をかき  
黒い腹癒す菜が見付からぬ  
星空に亡妻が生きてる天の川

鳥取市 西村黙光

晴耕雨読年金族のパラダイス  
ケチだからうちの作物無農薬  
網張って疎遠になった野鳥たち  
雑草と薬草派手な喧嘩する  
野良仕事サボった夜の酒の味

鳥取市 坂田和歌子

ペコペコと頭を下げて書く手紙  
炎天下火葬の列に黒い蝶  
バシバシと花の命を切る花屋  
湖上に月湖底にナマズ静寂  
焚火して少しストレス和らげる

鳥取市 福田登美

悪友の小気味良い風受けて立つ  
水掻きを付けた男は戻らない  
名前からはほのぼの匂う人の味  
ご先祖は黙って見てる墓の守り  
傘踊り暮色の景が町を練る

鳥取市 富山檳榔樹

次々と櫛の齒欠けた老友の盆  
花道は無情の風が吹いて掃く  
古き良い大人の仕草子が見てる  
なよなよとしてもどっこい母の肩  
キャンプする子へ自然美が息吹き出す

鳥取市

美 田 旋 風

見られたくない黒装束でかくすゴミ  
少子国を移民が占める夢をみる

エジプトへテレビで二度の旅をする

妻の名を忘れて生きる日が怖い

老夫婦時計の針は子に合わす

鳥取市

石 上 悦 子

お土産の出所聞いてくれませんか

きのうよりましな私に仕上がらぬ

平凡を重ね私の薄い本

同じ話が違った意味にとれてくる

炎天に草と野菜がかばいあう

倉吉市

淡 路 ゆり子

かすかに違う一期一会の陽を拝む

北の窓開けて仏間を涼しくす

ご先祖の山に苦肉の資産税

夫婦してテレビ観戦高校野球

したたかに生きた男の深い皺

倉吉市

山 中 康 子

初盆へ無常の友に偲び泣き

迎え火に姑よ兄よと声をかけ

民宿の汽笛おぼこの瞳が潤む

再生を希いゆったり母の駅

平静に意見まとめた時間待ち

倉吉市

山 本 玲 子

体重計が上がる期待が遠くなる  
朝月夜新聞受けの音を待つ

試着室泡を食ってる女店員

メダカとともに消えた小川の少年期

あの二人いやらしい目でみる雀

倉吉市

米 田 幸 子

一徹な父を何かが駆り立てる

遠回りしてきた父の人間味

子のために美田残して泡銭

三歳の稚魚が矢鱈と盾をつく

ドングリの列から一人背伸びする

倉吉市

松 本 よしえ

幸せだろうか昔の恋仇

野あざみが抱かれて刺を失った

消毒をしてないトマト美味しいね

消毒の過ぎたお方で味気ない

水仕事良くして男まだひとり

米子市

中 井 ゆ き

大山の名水金魚にもいます

蝶になる青虫なんだ目をつむる

背もたれの椅子をみつめてホッとする

頬だけど影にはっぱをかけられる

砂にぎり仏心でかく曼陀羅絵

夏休み鍋もやかんも忙しい

図書館の椅子に座るとホツとする

いい日かなウインクをする目玉焼き  
バーゲンが近い定価を見て回る

外孫内孫 悪いが違う胸のキユン

蛇を取る子の腕前を信じよう

しつかりと教えておこう蛇のくせ

枕の下でおとぎ話も枯れて来る

迷いながら押されて歩く地下の街  
ぼつと出の顔は見せずに心齋橋

この世には泳ぎつかれたあめんぼう

負けないよ骨の髄から出る涙

この山を越えればきつと生き返る

悲しみを逃れたいため手を合わす

かけがいが無いから責める事よそう  
米子市

都から故郷へ帰って命干す

進む道回転すれば見えるかも

役終えて仏の顔に近くなる

橋の上幼い頃の絵に出逢う

毒消しは豪傑笑いすることだ

米子市 鷲見正子

米子市 石垣花子

米子市 茂理高代

米子市 澤田千春

安らぎを胸いっぱいに里の朝

ほんのりと母の香纏う古扇

好奇心光らせ子等の夏休み

明日亡夫が帰り来るなら泣きはせぬ

子の巣立ち親を染みじみ噛みしめる

米子市 野坂なみ  
本家近くに弟妹たちの家がある

師と弟子の境界線が曲りだす

墓石を守る私も守られて

一日の讃歌 蟬はやがてを知りつくす

国境の杭は爆発ぐせをもつ

米子市 林瑞枝  
姉臥して今もう義理の仲でない

利口にも阿呆にもなれず生きている

放し飼いの柿の木に飛ぶ鶏も

然り気なく水中狙う鷺の首

わが母校の球児泪の一点差

米子市 門脇晶子  
役職を狙うカラスが居て困る

陽がのぼりまた一幕の芝居する

病む夫の明日を見舞うか夕焼が

しつかり花をたてて話そう盃蘭盆

音立てず蟬の背中にそつと立つ

米子市 永井三津子

米子市 野坂なみ

米子市 林瑞枝

米子市 門脇晶子

モノクロの母親像に諭される

米子市 木村 春枝

いつまでも虚像を追っているのかも

パーベキュー敵も味方も顔並べ

捨てる美学若い世代に指導され

裏庭に蟬の声なく秋となり

米子市 本吉 宗光

サンダルに折り目の付いたズボンはく

共白髪夢物語老い独り

恋の唄老女熱唱目のやり場

ばらまいた金の始末は来世紀

高齢者排除が本音介護法

米子市 神庭 詩郎

終電車待つてる内に酔いがさめ

マネキンが恥部むき出して衣替え

夏バテをせぬか真夏に蟻の列

記念日で風化させるな原爆忌

どんな職でもとは行かぬ学士です

米子市 白根 ふみ

冬眠の葉を慈しむ ベゴニアの

うるかから苔の化身を食うている

帰省子がひろびろ遊ぶだけが能

キヌよりも大物 魚籠が小さくなる

喜怒哀樂をあじ三味に漬けている

一番先に笑った女を好きになる

鳥取県 土橋 螢

去るものは追わず空には白い雲

昭和史に刻む人間魚雷とは

正直を貫くために貧乏する

信仰の負い目か布施が高くなり

鳥取県 新家 完司

声だけは高倉健に勝っている

どんな人が乗るか楽しみ次の駅

訪ねたい駅がいつぱい時刻表

死ぬおそれないことみんな小さいこと

こころ斬られて一時間ほど昼寝する

鳥取県 岩崎 みさ江

身を斜に躲して古希の向い風

この町に錨を下ろし墓地を買う

鳥渡る空には風の道しるべ

私も人も許して老いてゆく

星あかり昔を今に輝かす

鳥取県 西原 艶子

鎮魂歌聴えてきそう夏の海

気持とはうらはらだたと自問する

筋力も前頭葉も脆くなる

遺言状よりも一句を残したい

老いてなお女は女愛に死ぬ

鳥取県 西川 和子

じいちゃんど五角に理屈並べてる

嫁は嫁五角に見てはもらえない

ふたありになつて五角に興味を持つ

洗濯の泡が昨日を消してくれ

りハビりに頑張る姑を慈しむ

鳥取県 原 みさを

やつと来た桃源郷にすぐあきる

君が代は嫌いだけれど出る涙

特養の隅で女が目をさます

二学期というトンネルにまた入る

遺伝子へ神をおそれぬメス入れる

鳥取県 林 露杖

たねを蒔く結果は良と決めている

カタカナ語辞典片手に読む新聞

殺人のニュース無き日のない平和

一汁一菜三度の飯はてんこ盛り

二十本の歯で噛むスルメ一夜干し

鳥取県 奥谷 彩子

目の位置を変えてしあわせ噛みしめる

たゆとうて母の港にたどり着き

背中合わせ小さな幸を手さぐりに

福耳に濾過した話だけ拾い

犬猿の仲なごませて塩砂糖

鳥取県 乾 喜与志

口角に泡ミサイルよ飛ぶでない

オットット躓いた身に杖があり

窓開けて飲んでおりますお月さん

仰向けば北極星も淋しげな

臉から翼は飛んで行つたきり

鳥取県 橋本 多哥由

終章はパツと明るく生き伸びる

五年越しの恋は楽しく実を結ぶ

苦しくて忍忍忍を考える

海の上いさり火みつつ地酒のむ

自尊心傷つけまいと笛吹かぬ

鳥取県 上田 俊路

友の訃に古希の余生が驕りだす

冷や奴 介護保険の話する

ワンランク下げて楽しい道になる

一晚のキャンプに準備五日かけ

キャンプから孫還しくなり戻る

鳥取県 近藤 春恵

涙つぼ干して明日の米を研ぐ

虫干しをして脳味噌を入れかえる

入道雲だんだん父の顔になる

父さんが先に毒味してくれる

親の夢消えて子供がきれてくる

父の旗虫がついても耐えている  
三面鏡しあわせな秋待ち侘びる  
没句とてまんざらでもない我がいのち  
愛一途はぐれた雲が向きを変え  
大安も仏滅もなくおめでとう

鳥取県 石尾 かつ乃

お逮夜に亡夫の無窮花ムゲンバナ咲きほこる  
夫召されもう一周忌まだ一周忌  
数珠の汗亡夫の手握りしめたまま  
先読めぬ背伸びはまだまだ読ける気  
難民の味方に見える国ばかり

鳥取県 塔 寛子

何もせず生きて食だけよく弾む  
誰にでも出来る福祉を頑張ろう  
生かされて無力の老いを勞られ  
冥途への旅費にと貯めてきた老後  
真夏日はそう続くまいビール飲む

鳥取県 山本 正光

城下町昔むかしを語りつく  
河川敷老いたわむれる嬉々として  
仏縁にすがり心も凧いでくる  
とこしえに人柄しのぶ句碑あおぐ  
我が町をほこるおそばの花ざかり

鳥取県 津村 八重子

魔法びん温い言葉を詰めておく  
ツーカーの合図このごろ響かない  
幽霊は大抵美人縁がない  
クリームをあれこれ並べ垢抜けぬ  
眉唾の話片足だけ乗せる

鳥取県 石谷 美恵子

こげくさい臭いに喋る声が消え  
貸借が帳消しできぬくされ縁  
メークした黒い目と会い目を伏せる  
古傷にさわらぬ話題これも愛  
落ち蟬が命の薄さ感じさせ

鳥取県 村上 信子

雑草と互角になろう昨日今日  
互角だと何時も負けてるあせりあり  
泡いっぱい孫の笑顔が映り飛ぶ  
大輪の牡丹咲かせる息子待ち  
青柿の落ちる音聞き朝になり

鳥取県 國森 武子

しまなみの美観心のためにおく  
赤チンをつけて用心深くする  
雲海の中でキャンプの夜が明ける  
白髪なる恩師囲んで子にもどる  
一歩家出れば年頃他人めき

鳥取県 権代 康女

鳥取県 黒田 くに子

望郷の小川でははが菜を洗う  
粗食でも母の器はあつたかい  
器が小さくてこぼれてゆく愛よ  
まむし酒貰いしやつくり止まらない  
産気づく縁起かついでいられない

鳥取県 太田 幸枝

嫁が来て男世帯が華やいで  
棒グラフ互角に競い無二の友  
背伸びしてアキレスケンが切れちゃった  
バラバラと火花が散って恋終る  
モシモシの声がはずんで平和なり

松江市 舟木 与根一

向日葵にも異端者らしいのが混じり  
ガイドラインもう神風を信じない  
シャッター下りて防犯灯のつづく街  
減反が無いさつま芋よく太り  
趣味という美味しい珈琲飲ます店

松江市 川本 畔

幸せな色になるまで卵とじ  
湖の色まとまりそうにない話  
立秋のクシャミ統率力に欠ける  
少し傾き傘は気遣っている  
いさかいの雲 他人行儀に夕焼ける

松江市 佐野木 みえ

函館の夜景眼下の大パノラマ  
時計台十時の鐘が鳴りひびく  
五稜郭展望台より星の形  
有珠山の煙たなびくロープウエー  
小樽にてワイングラスを二つ買う

松江市 安食 友子

ときめきを想い出させるハイウエー  
周辺でごちゃごちゃしだす売り言葉  
意地はつて向かい風まで敵にする  
夕焼けに吸われつくしていく血の氣  
去って行くわたの分身か細いね

松江市 浦辺 静江

のぼる太陽じつと見つめて手を合わす  
時世でしようか女性の多い繩のれん  
父親は金魚すくいに余念なし  
テレビよりラジオの歌を覚えよう  
腰痛をふきとばそうと動いている

出雲市 吉岡 きみえ

熱帯夜話し相手は窓の月  
仏飯を食べて無力を生きている  
蓮座からいそいそ帰る仏様  
指定席ひとつ空いているわが家  
遺されて重荷が肩にとつとくる

人許すのに青い空蒼い海

出雲市 竹 治 ちかし

まだ郷に染まず祭の外に居る

妻と酒 喜怒哀樂を共にする

キングより強いエースに顔がない

名の出ない顔が最近多くなり

出雲市 板 垣 夢 醉

夏祭り障子の影が飲んでいる

いい酔をしてと言われる二日酔い

表現がうまく漫才聞く思い

消しゴムの良さに惚れてる誤字当て字

バーゲンが女の戦燃えており

出雲市 園 山 多賀子

卒寿なおゆとりは紫煙の輪に託す

目立たないよう眉を引く未だ女

伸び切った輪ゴム私も意地を持つ

考える葦は沼から脱けられぬ

過去はもう繰り返さない合歡の花

出雲市 富 田 蘭 水

根性をたたき直したこの座禪

ラベンダー香水に変わり私呼ぶ

シルバーの言葉を生かす世の功罪

まめなかと肩をたたかれぬくい駅

友の会酒ではじめて燃えあがる

出雲市 久 谷 まこと

ワープロの変換キーがよく振く

声かけて後へも引けぬあみだクジ

会者定離空席目立つクラス会

家計簿をどうつくろうか旅行好き

あり余るご時世不足言えますか

出雲市 岸 桂 子

自販機を押しても夏の音がする

夏最中善人またも一人減る

次の世は何に生まれんカタツムリ

会者定離友の訃を聞く夜の雨

路地消えて冷たい顔の街になる

出雲市 小 玉 満 江

渚では人恋しくて砂が鳴く

お便所も暑いうちわが置いてある

お祭りが終って広場は風が吹く

早々と花火上がった隣町

夏祭り一緒に踊ろう車椅子

島根県 堀 江 正 朗

幸せに慣れてついつい我がままに

大蛇出た川で子供にかえりたい

靖国の友もお盆で里帰り

梟が涼しさ寂しさ呼んでます

蟻でさえ目を持つてるぞ偉いなあ

島根県 堀江芳子

あかんべえ目のある方でやって見せ  
うとうとの寝息聞いている点字板

くるくると何時まで輪描く水すまし

元氣出る薬川柳あればこそ

見えていた頃繰り返し長いお茶

島根県 西村早苗

ウオルサムなおまだ動いてる遺品

静寂と書いて独りの部屋も秋

まかせておくと文句のない料理

ボランティア右左のない軍手

白足袋の白さが乾く秋日和

島根県 森茂美

刈り残す花一輪や老妻の鎌

こんな日は言わずもがなの冷奴

絵の中にいつしか入っていた心

老人ホーム茶髪も集う夏まつり

君が代を無理矢理通す狭いみち

島根県 松本文子

蟬時雨みんな黙って墓洗う

通天閣よ再会を果さねば

スイミング ピアノ 孫どののお供

生き易い方へと枝は伸びていく

カナカナを聞く倅せと別れた日

島根県 榊原秀子

夾竹桃今年も赤く寺の庭

ガラスの風鈴思い出ほしく買いました

ゴキブリ団子つくる背中へ盆近い

道草をして野の花とする話

わけもなく文通何故かとぎれがち

島根県 伊藤寿美

Eメール地球の裏からアイラブユー

地続きの隣家の土蔵売りに来る

赤い花手折り怪我した顛末記

八月の孫と火垂るの墓を見る

好きなもの先に食う孫と後の孫と

岡山市 井上柳五郎

一寸耳貸せと噂を吹きこまれ

うちの犬毛艶見知らぬ人が褒め

無器用な男にしてはうまい嘘

口下手の反論疲労困憊す

また一人鬼籍旅立つ蟬しぐれ

倉敷市 田辺灸六

ひとやすみしているうちに呆け始め

約束を守って夫婦共白髪

暖かい積りの世話が要らぬ世話

定年を迎え人生二度勝負

不器用な男おんなにもてません

倉敷市 井上富子

無宗教それでもまるく生きている

老妻に腰痛と言う肩叩き

その昔あなたと撮った写真館

年金の膝に子猫がじゃれている

家庭教育消えて崩壊する家族

岡山県 矢内 寿恵子

余生かな忘れ上手も生き上手

人生の余得祈りで埋めよう

生者必滅惜しみつけない風の中

安からぬ命昭和史に捧げ

遠い日の中に身をおく二度童子

岡山県 大石 あすなろ

朱の絵の具 女きれいに過去うめる

大胆不敵わたしの前を影が行く

割り勘にすればコーヒーよくしゃべる

愛された記憶しつかり貯めてます

少年に草笛吹いた山河あり

岡山県 山本 玉恵

曲り角で悲しみ一つ脱ぎ捨てる

しなやかに男をつつむ恋衣

うかつにも風があばいた裏表

つぶやきの聞こゆるあたり椿落つ

鳩尾に愛を囲うてひそと住む

岡山県 二宗 吟平

寝転んだ途端アイデアふつと浮き

出吟に杖はいらない背が伸びる

亡娘との墓で乾杯気が軽い

老人会ラジウム泉の湯が溢れ

内緒するように隣の町花火

岡山県 荻野 鮫虎狼

わくわくの期待外れて旅終る

出発を見送り女は湯に浸り

均等法食物を選ぶ男の目

夏を待つ準備多忙な蟻の列

不景気な風に日本の雨続き

岡山県 福原 悦子

力んでも夫婦ゆつくり歩が揃う

まだ峰の高さは知らぬ子を送る

残飯をさらえた中にあるいくさ

大器晩成こんな未来を子に託す

真実の盲点をつく咳払い

竹原市 小島 蘭幸

あるがままが一番美しい夕陽

人間を好きになってはならぬ朱鷺

温泉旅行にも川柳がついて来る

父の墓前へ古い井戸から水を汲む

山下りた猿の生きねばならぬ眼だ

年金暮らしにマナープランも無いもんだ  
ノーマイクで居れるも若い内だろう  
六十路とやいつか和風が口に合う  
診察カード以外は妻が持ち歩き  
思い出の弁当箱が捨て切れぬ

竹原市 森井菁居  
古谷節夫

直線を走り続けた青春譜

青春をドラマにしたい日記練る

青春の風は迷路が好きと言う

職人のこだわり鑿の研ぎ加減

縄電車孫はブレーキばかり踏み

竹原市 時広一路

マジックのように大地からみどり

デッサンの海にはいつも島が有る

まだ負けぬ積りではいて歳頭

ペンだこは消えたが鉛筆離さない

何となく点けたテレビを見て眠る

竹原市 石原淑子

線香を焚きしめ母を迎え盆

もう少し私の時を時計草

九十一 円く老いる難しさ

流星群 地球の平和祈ります

クーラーの部屋で団扇をはなさない

野も山も百花繚乱日和傘

金婚の近い夫婦の笑い皺

一蓮托生妻よ林を抜け出そう

朝刊が届けば起きる齢になる

水引きの表豪華であるけれど

広島県 藤解静風

平和行進被爆手帳が汗をかか

八月の雲に火傷の跡がある

目薬が落ちる瞬間亡母よぎる

中道を歩く左右が敵になる

ほっといていいのか日本語のみだれ

宇部市 平田実男

抜擢の椅子で戸惑う尾髄骨

職業は夢職と書いて五七五

血統書付きの鳶です子も孫も

崩れそも無いが魅力もない積木

あなたなら軽いつづらを取りますか

柳井市 弘津柳慶

炎天が続き出不精にして終い

だまりこく愛一筋に噴火する

失恋のそれから女強くなり

離婚話それぞれ意見すれ違い

かん声が上昇サッカー応援団

呉市 横田英詩

美祿市 安平次 弘道

一枚の辞令に夢を奪われる  
血縁にユダがいるとは気がつかず  
しみついた銭の匂いが消えていた  
潮流に流され神を見失い  
烙印を押されて暗い街に出る

香川県 工藤 吟笑

土の香が肌に染み入る父の詩  
天国と地獄の狭間に私の座  
半年のご苦労 南極越冬隊  
コシヒカリ食べても農家嫁がこず  
回り道してもやまらぬコップ酒

香川県 川崎 ひかり

私に川柳と言う宝物  
朝晩にひばりの唄を聞きあきず  
愛さめてみてもやっぱいいい人だ  
憂うつな朝だ真つ赤な服を着る  
ゴキブリに好きで生まれた訳でない

香川県 成重 放任

世の中で怖いのは女房一人です  
蜜蜂税金払って小さくなり  
妻の持つ鎖の太さ思い知り  
心地よく話すがいまだ名が聞けず  
同じ姓ずらりと並ぶ電話帳

香川県 山地 マツエ

やっと山越えて一息つく夜明け  
氷スイカ涼風が吹く口の中  
古希過ぎてまだ新しい夢を追う  
言い過ぎて夜のしじまを深くする  
場違いな画廊で涼しい風に逢う

松山市 丹下 美津子

忌が巡る父母に哀しい面河川  
カボチャの匂いかぐのも嫌と父還る  
泥かぶる覚悟仲間と手を握る  
束の間の安らぎ母のレモンティー  
しきたりは田舎に祖父母いるかぎり

松山市 宮尾 みのり

赤味噌と白味噌からの離婚沙汰  
しきたりをたのしむゆとりある我が世  
旗色を読まねば四捨のテリトリ  
助けてはくれぬ涙が出ないから  
ほんやりと我が家の前を通りすぎ

今治市 越智 一水

欲捨てて仏の道が見えてくる  
手を合わす顔へ光が差してくる  
世の仕組み怒りを月へ吠えて見る  
こだわって智にはたらけば角が立ち  
蕎麦の花 山の高さへ雲走る

花街をぼんやりのぞく昼の月

今治市 野村京子

味噌薄く溶いて母似の歳時記よ

まつ黒い軍手お世辞は知らず生き

負けた日も影は私についてくる

人差し指悪が生まれる傷を生む

高知市 北川竹萌

よさこい踊り四日もえ立つ城下街

真夏日を炎えて踊りの三世代

踊り舞う粋艶夢のよさこいだ

久しぶり帰省よさこい見ようとて

息子の帰省アメリカ芙蓉咲き迎え

高知市 赤川菊野

ひな段にかざっておきたい出島関

決めてますラストダンスはあの人と

外国に行けば私も外人で

子育てを説くサッチーの裏の顔

親子の絆お金だけとは哀しいね

高知県 小澤幸泉

六十歳に届く手足がまた燃える

老人力などと世間におだてられ

溶け合った夫婦の色彩になるのかも

夏祭りよさこいソーラン河内節

今朝もまた私の居ない死亡欄

幸運も不運も神の手遠いで

炎暑炎々夜行性へと変身す

駄目だよときっぱり腕は組んだまま

赤トンボの出番が狂う熱帯夜

明日なき世を生かされて半世紀

北九州市 梅田宣司

右に酒左に花のありて足る

ミレーの絵までには遠い野良姿

今ならばセクハラだったにやりする

球場に観る人飲む人踊る人

ヒロインは不幸の中で美しい

唐津市 田口虹汀

目が見える中に書くもの書いておく

目の手術すぐに見えると言うけれど

要点だけは抓んで鍋に入れてある

心太のお代りを言う梅雨晴れ間

手術が済んだらまた川柳と生きていく

唐津市 久保正剣

電話ベルひよいとは立てぬ老いの膝

勝利への意欲少年泥まみれ

どこまでが正直青い申告書

逃げられた未練がこびりつく胃壁

ボトル棚此処が噂の震源地

唐津市 井上勝視

左遷される痛さに較べ軽い紙  
俺だけが白い喪服になるらしい  
大黒の袋がいつも気にかかる  
携帯も過疎の安否は問うて来ぬ  
子を想う用を作って電話する

唐津市 山門幸夫

八月十五日灼きつくその日あの時よ  
八月十五日熱球飛び交う甲子園  
立秋やここをせんとと蟬が鳴く  
継ぎ剃ぎのドナーの神技夢の世よ  
旅に発つ老いの心身リフレッシュ

唐津市 山門タミ

向日葵も陽に背をむける花もあり  
沿線の田圃が狭くなってきた  
原爆忌夢のかなたへ消えぬよう  
語り部が次々逝って終戦日  
受験孫 桜が咲けば帰るだろう

唐津市 仁部四郎

校長の自信の奥の自然法  
学校で先ず教科書で学ぶべし  
学校は楽しいこともあるところ  
学校で病気になるって叱られる  
学校の神話に出世して気づく

唐津市 樋口輝夫

振り返る昭和も遠き古希時  
マネキンの首が飛んでる店じまい  
叱るママ今夜はパパに火矢を向け  
枕経見知らぬ女が哭いている  
振り分けて自転車を漕ぐ子沢山

唐津市 山口高明

三年も過ぎて気を揉む宮内庁  
四つ足を食べても鯨駄目だつて  
酸欠の街に不審火もう五件  
六人も産めば一匹ボラが出来  
八面六臂の母を女傑といはります

熊本県 高野宵草

梅雨やつと明ければ残暑見舞かな  
おにぎりを持って図書館避暑にゆく  
コーヒーはホットと決めてわが老花  
便利とはシャワー風呂ほどないゆとり  
冷房で切歯扼腕 甲子園

熊本県 岩切康子

汗ほどに庭の草取り抄らず  
買物に出れば一つじゃ納まらず  
さよならの後に昔が甦る  
子を銜え慌てる蛇に詫びている  
好きなこと都合つけては出席し

校歌練習 先輩の風吹き荒ぶ

団結に団結急かす運動会

のたうちまわる程走り走らせる

和気藹々のたうつ戦無事に終え

紳士面外し閑空旅終る

絵になるが嫁には向かぬ娘がウチに

言うてほしい大正生れに見えへんと

愚痴ためた女の空の市場籠

ギャルの靴履くと言うより乗っている

ふるりは嫁が来ないと嘆いてる

宗教の違い民族殺し合い

外国語喋れぬ癖に国際化

旅客機がPL花火見て回り

好きだけで飼ったベツトが捨てられる

お爺さん顔が緩んてかわいいな

振興券どなたにお礼言いましょ

現状を維持するための医者通い

ベルトコンベア途中下車など許されぬ

腰上げるまでが大儀なのは年か

しんどいで明けしんどいで暮れる日々

弘前市 櫻庭 順風

そばにいる人を信じる事にする

来るたびに孫が思わぬ知恵をくれ

吊橋を渡ってからの脂汗

てきばきと返せば隙を衝いてくる

贅沢と思わぬ日々に流されて

デフォルメが利きすぎ誤解されそうだ

きつちりも緩める業も難しい

大合唱畔は越えた蟬しぐれ

合掌を忘れぬ日々にあるゆたか

福耳はひとのはなしがよく聞ける

ほんまやなあ「の」がついたら愚痴になる

こつそりと鼻毛の白を抜くおんな

陽のあたる場所を歩いたことがない

持ち時間内で生きざま模索する

子に胸を貸す手荒さも父の愛

何もかも飯の世のこと雲流る

底辺の暮しに慣れて茶をすする

老いの坂越える用意をして置こう

立山の雪を見たさにバスの旅

知らぬ間に橋一つ越え蜚狩

大東市 児玉 蛙

東大阪市 安永 春

香芝市 大内 朝子

和歌山市 山田 高夫

西宮市 菊池 トミエ

念仏もアーメンもない盆踊り  
休日も二日つづけばごみにされ  
テレビ見てあちこち旅も通になる  
人生の終りの旅だちよと待て

鳥取市 前田 一枝

先祖には朱鷺の如くの美女がいた  
雪の日は暑さ恋しい身勝手さ  
薬飲みトンビがタカを産む時代  
難しい金魚すくいと人の道

鳥取県 谷口 次男

深謝するポーズままと騙される  
戦争の深い傷跡持つて生き  
お百度を踏んで飛躍を祈ります  
闇將軍影の力がきいている

鳥取県 幸家 單車

三十五度の気温に老いを苛まれ  
自嘲などして一文の得もなし  
罪深き男事なく今日も暮れ  
目的が決まり笑顔の出るゆとり

岡山県 江口 有一朗

恋という文字を百回書いている  
溜め息がいっぱい詰めてあるサイフ  
扇風機いろいろあつて夏終る  
ビール片手に今日はカーブが勝っている

竹原市 岩本 笑子

## 水煙抄 (つづき)

彫れぬとき夢に出てくる仏さま  
満月に胡弓の哀調風の盆  
岸和田市 不破 仁 緑

西瓜切る包丁に子等の眼が刺さる  
赤信号向い側でも汗を拭く  
追憶の水着と語る土用干  
初デート笑顔を探す三面鏡

尼崎市 河津 正 治

少子化に拍車をかける晩婚よ  
婿養子得意料理と金で釣り  
ブランコを揺すつて風を呼び起す  
大阪弁しゃべつて肩のこりほぐす

松江市 松浦 登志子

憎い憎い憎いあいつがこびりつく  
童貞のころ頓堀の灯に泣いた  
正確に合わすと時計狂てくる  
草の種 風の溜息期待する

出雲市 城 多 喜

愛媛県 藤山 太 朗

香川県 松村 輝 夫

福岡県 岩崎 和 女

取りあえず静養せよと言うカルテ  
朝顔の観さつ日記飛び起さる

# 佳句感想

橋 高 薫 風

の佳什がある。

立秋やこをせんとと蟬が鳴く

山門 幸夫

この句の焦点は中七であるが、先途という漢字を使われなかったのが良い。

蟬のいのちのせとぎわが表現出来た。

神のマウスで辿った文科理科の軸

竹内 紫緒

コンピュータの「神のマウス」でなぞるカールは、仏教という胎藏界、金剛界の曼陀羅さながらに文科理科の軸を識別する。

秀でた科学者の目の独自の発想が尊い。

かわいそう螢の字から火を取って

栗林 光夫

戦後略字を常用するようになり螢が螢となる。火を取られた螢はただの黒い虫に過ぎない。龜など万年も生きられないと思っている。

合歡の花ふわりとおとこ匿いぬ

木本 朱夏

「匿いぬ」の言葉が先か、合歡の花の先導か、これは作者の感慨の自然な伏流であろうと私は推察する。

私はかつて母の乳房を合歡の花になぞらえたことがあるので印象深い。昔、西施も男をこのように匿ったことであらう。

はじめに言葉ありきの句

昭和32年、私は路郎先生川柳生活五十年を記念して出版された句集『旅人』に接し、病院を抜け出して先生に会いに行き、弟子入りを懇願した。そして『旅人』の句に自分流の物差しを当てて勉強をした。その中に言葉が先ず存在して、それを芯に最大限に生かすような句作りの形に気付いた。

酒女酒で不惑に手がとどき

麻生 路郎

の「不惑」である。孔子の言葉の「四十にして惑わず」の意が最大限に生かされている。

凡聖一如元旦のころ知る

同

の凡聖一如（仏教語）もその一例である。私はいく「辞書の散歩」をはじめた。川柳に適した句語を辞書から採集して頭の引出しにインプリントする作業である。

今年二月に作句した次の句は「御御汁」

の句語に惹かれて生まれた。明治生まれの母刀目を介し、即席味噌汁の手抜きを批判した。

母刀目の在せし頃の御御汁 薫風

四面楚歌故郷は豆の花の頃 同  
という初心時代の句も一例で四字熟語は格好の対象となる。

はじめに言葉ありきと言ったが、はじめに心があつて、それに即した適切語を用い、佳句に仕立てるのが本筋で、実際の作句上でも数は多い。道筋は異なるが到る所は同じだから今回はそういう句も引用する。

浮雲を眺めて飽きず考えず

内海 幸生

この浮雲は言葉であつて言葉でない。作者と浮雲は一体なのである。とりもなおさず、亡妻と作者は融和している。「考えず」の措辞がその心域にまで踏み込んだ。

芥箱で未だ咲いている七変化

小西未佐子

七変化がこの句の芯。紫陽花の別名であるみどり、白、淡紅、藍、紫と様々に変わる花だから、捨てられてからも変化するか。

あじさゝの最後の变化枯変化

# 自選集

小西雄々

黒川紫香

シャボン玉とてもやさしい風に会さう  
鳩尾に嬉し涙は溜めとこ  
恋人にわかる合図で座をはずす  
背伸びして華麗な蝶が飛び回る  
樹が揺れて婿に渡せぬ蔵の鍵

阿萬萬的

野田素身郎

あんたそりや駄目よと妻が目知らず  
どう見ても妻に分がある口喧嘩  
スカタンやなあと笑ろてる老夫婦  
病院で出会いお互い齢でんな  
物忘れこれが丈夫な秘訣かも

藤井明朗

辻白溪子

川柳塔まつりへ医師のうれしい許可もらう  
眼鏡王国がね美人に伊達男  
母に会う楽しみ孫つれ盆帰省  
旧友に会うふる里の風やさし  
景気上向くよろこびを酌む秋祭り

水打ったあとへ夕立雲が浮く  
街角の風に帽子を盗まれる  
帰省してテレビゲームで孫遊ぶ  
あっちこっち行きたいところある京都  
顔を見ないと案じる歳になる互い  
一汁一菜だけで育ったわたし達  
古希が来て少なくなつた自前の歯  
夏休み孫が三人来て荒らし  
強引に台風 秋を連れて来る  
古里で何年ぶりの蚊に咬まれ  
極楽に着いたと妻が夢に出る  
お経読む坊さん隙のない姿  
読経の合間せわしい蟬の声  
喪服着た美人が涙ためている  
お悔みへ涙こらえている辛さ

恒松 町紅

歳のこと忘れ同席いい話  
褒める事下手かたくなな人にされ  
原稿を見ながら覇氣のない自説  
常識の欠けた他人とすれ違つ  
シャッターの錆賑わつた夢のあと

野村 太茂津

病廊を歩く素顔も笑みがない  
緩い坂上る快復するように  
ラップして皿に盛つとくありがと  
セールス退散 補聴器に礼を言う  
脆い骨何冀 老兵腕を撫し

波多野 五楽庵

コスモスの悩みを風が聞き洩らす  
依怙轟肩しているらしいヤジロペー  
こそばゆい祝辞に肩が細くなり  
酒煙草 軌道修正せまられる  
年月やむかしむかしの恋敵

松川 杜的

定型外送るたんびに値を尋ね  
のど自慢尺八の顔は写されず  
グリコの土産まだ三つ程持つている  
懐かしいもの一つに袖カバー  
隻脚の選手宣誓にある笑顔

月原 宵明

愛想は一切しない古本屋  
笑い袋妹に渡し嫁ぐ姉  
昼寝から覚めてぼんやり頬に真産  
新緑へ消えてしまった霊柩車  
胡麻を擦る男は鉢を持たされる

金井 文秋

週一度安心買いに医者へ行く  
米寿過ぎ当てにしない介護法  
天気崩れる報にひやひやすする幹事  
老人呆けにならぬ自信はある私  
ゆつたりと大きく芙蓉咲き誇る

小林 由多香

雑草もひと雨待つている喘ぎ  
胃袋が無茶だといって押しもどす  
城山の高さへビルが伸びてくる  
雨に泣き雨をよろこび実り待つ  
つまずいた石を拾つてあたためる

宮口 笛生

葬儀委員長つとめる喪服汗とおる  
霊柩車へ蟬一斉に鳴いてくれ  
告別式すんで悲しみ捨てる酒  
よっこらしよっこらしようと生きている  
自慢して川柳塔碑案内す

遠山可住

素人の目には大きい苗が売れ  
ハイ先生一番強いのはママよ  
宝くじ売場へまっすぐ行けなくて  
年輪を積む根回しが出来ている  
百歳の笑顔は恋の杖で行く

高杉鬼遊

盆帰りほとけに暑い夏だった  
扇風機あとしばらくだ頑張ろう  
壁塗りと屋根やが電話して困り  
君が代を歌うところがゆれている  
煩わしいもののひとつに夫婦なり

藤村女

悪友といい酒を飲む祭の夜  
村祭り神が通った道続く  
豊作に案山子も踊る秋祭り  
またもとの過疎にかえて祭りすみ  
綿菓子のもれも祭の灯を包む

板尾岳人

広島に  
広島街を横切る原爆忌  
火の祭 別れ話はせぬように  
うず潮よ話がしたいことがある  
ゆつくりと通り過ぎると世界一  
島と島世間ばなしをして結ぶ

正本水客

どっかりとしているようで落ち着かぬ  
心からあやまっているとは思われず  
横向いて本気に聞いていてくれる  
雨音がやんでいるのに気が付かず  
あつさりとかやまられては何も言えぬ

西田柳宏子

老妻がコンビニに馴れ手抜きする  
初志貫徹 何度書いたか唱えたか  
生きる知恵 葉裏を埋めている卵  
祖母ちゃんの根気が光っている手焼き  
減るものでない親切を出し惜しみ

八木千代

青森にて  
恐山の石 寂として狂として  
踏み入れればおどろおどろの山の貌  
正体の奥から硫黄匂いだす  
時間差でイタコさんとは逢わずじまい  
それから北の呪文に縛られる

河内天笑

三世紀跨越そうなりきんとぎん  
リストラの風 利き腕をもぎとった  
若いのに薄い男がふえている  
ご先祖はだいに祀り無信心  
タレントの東京弁が気に入らぬ

## 奥室数市

東野大八

奥室数市・語録より。

―昔、耳にした句であるが、顔ぶれが揃うという目度さの裏側に個人の情性と集団のマンネリがチラチラするとそれは教会の屋根裏の太ったねずみの寄合にすぎなくなる。

笛の名人はピシリと笛を折る。 富二

その辺の危惧を土師は充分に知っていた。そうでない、笛の音に従って踊りながらゾロゾロ川に落ちてゆくねずみの民話（ハメルンの笛吹き男）を、ねずみごとではすまされなくなる。（58年12月）

◇ 子規の「和歌も俳句も正にその死期に近づきつつある者なり」には、コンピューターに歳時記をほうり込んだ様の困惑顔が見えるが、富二の「たかが川柳」は「たかが人間」。ま

だまだ人間と川柳の生きてゆく余地がありそうだ。だから歩ける。（59年2月）

◇ さじなめているとだんだんさじの味30年間に知った句が、今にして妙に気になるのは現代川柳への喩として皮肉に捉えすぎているかららしい。

さじの味の没個性とうらさびしい光景が、現代の作品傾向と思いたくないし、胃袋を刺戟する作品を書きたいとボクを含めて誰でも思っている―に決っている。（59年8月）

◇ 放哉、山頭火は情の世間に甘え切った古い俳人であるが、その点、生（性）にこだわらつづけた一茶の日常は、かなり今目的で川柳人らしい。川柳は世捨人には決して書けない苦

だ、と自信を持つことにしよう。（59年10月）

◇ 飽食の時代には、はん・なりした川柳が流行るようだ。塩味からうす味へ、個人の嗜好に文句をつける気は更々ないが、川柳が時代に屈伏した、とだけは思いたくない。（59年11月）

◇ 「たかが川柳、されど川柳」と僕の肯定にむしろ思いの比重をかけ、溺愛のほどを示そうとする。仮に川柳をダイヤモンドに置きかえてみるとそれがよく解る。しかしダイヤヤに目をくれても、ダイヤが私たちを愛してくれとは限らない。

「人生にとつて川柳は目的でなく、あくまで手段にすぎない」と故富二さんは言っていた。肩をほぐして川柳とつきあうイミでも、ここはやっぱり「たかが川柳」。（60年6月）

「三、四回会つてらうちに数市川柳のファンになって、ある月刊漫画誌の編集長に進言して、二頁の数市川柳特集ページを作った。漫画は版画家の青木某が担当し、数市さんのプロフィールは私がかいた。

特集ページタイトルの「小さな朝・街の灯」だったのである。その頃の数市川柳をふり返つて、彼を追憶してみたい。

ハイライト下さい―朝を小さく迎え

贅沢なみみずが泳ぐ夢を見る  
貧乏をあばきに三河万歳がくる  
教会あたりの腹の空く風景

横顔から拾つと、自ら昼行灯（ひるあんど）と称した数市さんの股名は錦良雄、時津風部屋の相撲取で、三段目東方筆頭だった。

二十二年の秋場所に相撲界を引退する。その後、幾多の職業を転々とするが、晩年は「証券マン」を十三年勤めあげている。

紋付を着るとニワトリを蹴とばしたくなる  
資本論目刺しは死骸のように焼ける

自民党嫌いのニワトリは生みつつけ

時事川柳の視点を数市さんは忌避した。紋付とニワトリ、自民党と鶏の対比が痛快だ。

一党独裁の自民党をけとばしたくなるのは彼だけではあるまい。

神様に添寝をされて風邪をひき

眼鏡をはさずと貧乏が匂い

梅雨の鞆とはこぼさ歩く妻子の上

友を得る朝こつてりと飯を盛る

拍手して自分の寂しさを忘れ

優れた川柳家中村富二の後につづく数市さんだったと思う。いわば自虐的に、一面、存在する内なる伝統性を積極的に投げ出すように、富二は自ら伝統派と名乗ったのだった。

以上は石丸弥平の数市追悼記だが、まだま

だ長いが端折った。「人」46号の「奥室数市追悼号」の中の心に残る悼文であった。

「一度お目にかかったら忘れられることのない大柄な体軀、人なつこい目、ひょうひょうとしたお人柄——（中略）使いさしの紙の裏に書かれた数市さんの自選十句がここにあり。パソコンで作った短文芸芸バンクへの入力用にと送って下さった最後の句は

胃の中で暮らしの蝙蝠傘押しひろがり

とある。新年のご挨拶とaの会一泊旅行のご案内に添えて

「ワープロで入力されたコトバの組合せでそれらしい句が生れることも確か。文芸はそれらしいことを拒否することからはじまるのです」と書かれている。厳しかった」（今川乱魚悼文抄録）

「ある時の地方大会で、席題選者を指名された氏は、相変らずのジーパン・ノーネクタイだった。壇上で「こんな格好で失礼します」は単なる社交辞令である。ジーパンが選をす

るのではないから、ジーパン即若者の社会的通念を打破し、中高年のドレッサー振りをマスターしていた。背広とネクタイで決まる男が、作業着の概念を吹飛ばして彼から離すとおかしい存在にまでした。

彼は兼題の句を記した手帖も、豆辞典等は

携帯しない。辞書から引き出した借物では真の自分が映らないから必要ないのだろう。

彼の作品は脳から産地直送、市販の果物に折々見られるワックスもかけなければ、胡瓜ならイボが吸付く程新鮮である。従つて盗作の場などありようがない。（中略）O型の氏はおおらかで呑気そうにみえるが、繊細な神経の持主で、酒席など目障りなものは小まめに空袋へ捨てていた。卓をきれいに愉しく飲んだり語つたりすることに安らぎを得る彼の潔癖な一面をよく見せられた」（江口榴花悼文抄録）

「たしかaの会の懇親会のことだったと思う。数市さんから聞いた話である。数市さんは相撲取り、それも双葉山の弟子だったという。ふだん稽古の時など一切「おい」としか呼んでくれない。相撲取りとしては体の無いこの人が相撲をやめる決心としては体の無い時、双葉山が「そうか奥室、やめるのか」と言ったという。自分はこの話が好きでいつ迄も記憶に残っているというお話」（大庭紫蓬悼文）  
レントゲン僕の枯野に芭蕉は来ない 数市  
笹の蛭の一個が見てるアドバルーン  
縄の束かつぐわたしの掠奪婚  
肩車どうだ地獄が見えるかい  
〃  
〃

▼次号は「加賀美白英子」

# 誹風柳多留二四篇研究

10

佐藤 礎稿+清説でよいと思う。語源は「ぞろ引く」であろう。

65 一ツ角と一片土手で仲間われ

山田 一角は「③一分金の異称」で、一片は「④一朱銀の異称」(以上「日本国語大辞典」)。共に気取った通言。

清 博美・佐藤要人

64 大象をぞろ／＼引て馬喰町

四人りて木めんをかふるかうし町

安七松<sup>2</sup>

山田 山王祭の大象見物

「各町で出したこの祭礼の山車や練りものの中で、特筆すべきは、麴町で出した大象を中心とする唐人行列であった。大きな竹細工の象を鼠色の木綿で覆い、足には四名の人が入って歩くのである」(解釈と鑑賞「川柳・年中行事」)。

馬喰町あたりに泊っているお上りさんが、見たことのない大象に付いてぞろぞろと歩いて居る、という田舎蔑視の句。

馬喰町には商人宿が多くあり、「訴訟や商用または見物のため、地方から江戸へ出た者が」(『江戸文学地名辞典』)利用した。

さい札に天じくを出すかうし町 安四松<sup>3</sup>

小栗 よくわからず。そのまま読めば山王祭

のねり物が馬喰町へ行つたように思えるが、地理的に見て馬喰町は神田明神の方。『東都歳事記』で見ても、そんな方へはいかない。橋本 不明。小栗兄のように『東都歳事記』の記載によれば、山王祭の練物、御輿ともに馬喰町には行かず。『川柳江戸砂子』上では、馬喰町訴訟客の江戸見物の句となっている。

清 「ぞろ／＼引て」は、「ぞろ／＼引きで」とは読めないか。つまり「ぞろ引く」を複数形にした語。ぞろ／＼と大勢歩くの意と、着物

をだらしなく着る意を重ねた造語。馬喰町に泊っている田舎者が、山王祭を見物している図と思うが……。

懐に一分持っている者と、半分の二朱銀しか持っていない者。仲良く吉原の土手まで来たが、どんな相娼にしようか話し合っている内に、金のある方は上等のを望み、無い方は僻みもはいい、意見が合わず結局仲違い。一分位では所詮大したことないのだが、そこは比較の問題。

どつちらがりこうか土手でわかれたり

一四口

伊吹 賛。吉原で散財する者から見れば、僅かな金でというところだが、当人同士にとつては、大問題なのであろう。

清 それぞれの持ち金に応じて遊んだことを、仲間割れと洒落て表現したのではない。仲違いというような強い意味ではないと感じられる。

佐藤 賛。

66 傾城も月の障りハ退れ得ず

山田 傾城と雖も、毎月の障りは皆に等しく訪れ、その点では傾城も下女も全く変わらな  
い。一方、傾城にはもう一つの障りがある。  
ご存知、月の紋目。これも如何しても逃れら  
れない。

月水と紋目を掛けたのがこの句のヤマ。

月の枕詞くらうでありいす 二五二六

うかれめの月のさわりハ客にあり

安七松 1

年に二度むす子も月のさわりあり

安九天 2

清・佐藤 賛。

67 一ツけんまいらうとばちを引たくり

山田 拳は酒席の遊戯の長崎拳。三味線で盛  
り上がっているのに、芸者が踊り子かを相手  
にしよつと、撥を引つたくっている光景。野  
暮なのか通なのか。一拳には「一献参ろう」  
の利かせもあるか。

ふり袖のけん酒てのむにくらしさ

安八松 5

へばけんハなぐらふと言ふ姿なり 九一二五

居候拳ンをおしてはかられる 五二一七

橋本 賛。拳にもいろいろ種類があるようだが、長崎拳に特定された理由は？

清 長崎拳と特定しない方がよい。

佐藤 賛。

68 きらびやかなる長持をからで置き

山田 「上妓になると部屋や座敷を与えられ  
て、部屋持・座敷持と称せられた。そこには  
当然のこととして家具や調度類を置くことに  
なる。(中略)豪華な調度類を遊女たちは競  
い合うのだが、それは各獲得のための道具に  
過ぎず、虜になった客は、この豪華な道具に  
とりまかれ、身も心もとろかされ羽化登仙す  
るのである」(『川柳吉原風俗絵図』)。

でも調度類にしても、遊女と同じく、上辺  
だけの何とやら中身は空っぽ。

けいせいいたんすハ本の犬おとし 七四

衣かうにハいつばいたんす何もなし 三〇一七

明店と書いてはりたいたんす也 拾七18

清 賛。遊女の内情はかくの如し。

佐藤 賛。

69 そんなもの今来ませうと鯉売

山田 長屋のおかみさんあたりに、「百ぐら  
いにならないの？」とか言われた鯉売。「そ  
んなもの、その内来ましようよ、百日も経つ  
たらね」。胸の内では「べらぼうめ」。

初かつほ内義こわく百に付ケ 四三

ねぎつたらぶちのめしそつ初松魚 四四

いほちがわあとかつほハふりむかす

「いほ」は魚の訛。 安六札 7

清・佐藤 賛。

70 盗人ハ悴同類女房なり

山田 男親からみれば、文字通りの句。母の  
愛は息子には無辺なり。

こなた迄ぐるだと母ハしかられる 一〇一四

ちつとづ、母手つだつてどらにする 一九八

伊吹 金箱から常に金を引き出して、遊里通  
いをする息子は、父親から見れば盗人同然。

その息子を何かとくばい立てする母親である

女房は、盗人の仲間であると言っても言い過

ぎでない。

清 礎稿には、当然伊吹氏の説明が入ってい

るのでしよう。

佐藤 同。

# 秀句鑑賞

同人吟 菱田満秋

—9月号から

昨年、鹿野みか月の記念大会できやり吟社

主幹の竹本瓢太郎氏が「関東の川柳・関西の川柳」と題して講演をされ、その全文が大会報に掲載されているので読まれた方も多しと思うが、川柳塔の旗印を掲げて関東で拡販に努めている私にとって大いに参考になる一文であった。四面楚歌とも言える中で「川柳とは人間及び自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である」と言う麻生路郎先生の定義を基に勉強しているが、課題が形容詞や動詞の場合は題を詠み込まないように指導している。また、題詠、雑詠にかかわらず共に五七五の定形は守るように、特に中八や下六などは絶対に避けるようさせている。私は破調も字余りも表現力が弱いから十七音字にまとめ切れないのだろうと思っているし、一つの課題で競吟する場合は十七音字という枠内で競いあうべきではないかと思っている。たかが川柳に関東のや関西のがあつてはならないと思っている。

甲虫電池を入れるとこがない

古久保 和子

昆虫採集に熱中した少年時代を想い出させてくれたこの句、電池で動く玩具などなかった時代では出来ない。昔はブリキのが殆どでセルロイドでキューピーが出回った時は感心したものだ。それにしても今の玩具は精巧で本物と見間違ふものもある。その幸せな時代に生きる青少年がファミコンに凝って勉強をあまりしないのは便利すぎるからであらう。

にんげんは非力豪雨へ佇ちつくす

森井 菁居

八月十四日神奈川県玄倉川で起きた水難事故はいろいろと取り沙汰されているが、私も曾て遊んだことのある場所だけに「何故」と言いたい。人間は集団になると自分の力を過信するというよりは他人の力に頼る気を起こす。だから再三の避難勧告も聞き入れず、悪天候にも拘らずヘリコプターを要求したりしていたそうだ。体を浮かす水が一立方で一頓もあるとはとても思えないからつい舐める。

善人の顔で眺めている夕陽

竹治 ちかし

夕陽には何とも言えない余韻がある。だから私は夕陽が好きだ。いろいろの夕陽を詠んできたが、この句に出逢って「やられた」と思った。夕陽と対面していると何となく心が穏やかになっていくのは私だけではないと思うが、善人の顔とは言いで妙である。

一歳の孫に遊んでもらつて

西出 楓 楽

私にも一歳の孫がいて年に何回か息子が親孝行のつもりで連れてきてくれる。来訪予定日は朝から落き着かなくて、どのようにもてなすかをばかり考えている。まだ早いと思う玩具などを買って無駄遣いするなどと叱られているが、その日はバイバイするまで熱烈歓迎で全く光陰矢の如くて、楓楽さんの気持ちもよくわかる。

何気なく話したくなる秋の風

岩切 康子

残暑にうんざりしている時に少しでも冷ややかな秋の風に逢うとほっとする。やれやれという気持ちも湧きからであろが、そんな時、これで暑かった夏も終わりになるのかなという感傷から、何気なく誰にもなく話しかけたい気持ちの起こるものである。

はぐれ蛾を叩き落としてナムアマミダ

森 下 愛 論

シーズンを過ぎた蛾も人目につかぬところで露でも吸っておればよいのに、ふらふらと人の目の前に出てきたのでは仕方がない。子供の頃から蛾は害虫と教えられているから、ためらいもなく叩き落としたのであろうが、哀れを感じて南無阿弥陀と念仏するのは仏の心からでもあろうか。

快速に抜かれいよいよ眠くなる

清 水 潮 華

各駅停車に座っていると何となく眠くなるものだ。そんな時、快速や急行の通過待ちで停車時間が長くなるとさらに眠くなるのは当然のことだ。眠気を我慢しながら居眠りをした時は目的地を乗り過ごしても爽やかなものがある。

金持ちも貧乏もない手術台

三 宅 保 州

首から下の手術をするときは殆ど裸に近い格好で手術台に乗せられるようだ。どんなにお金持ちの方が手術を受けるときもキンキラキンの服を着ては出来ないはずだ。執刀医にとって手術台の上にあるのは金持ちでも貧乏人でもなく単なる傷んだ肉塊なのである。余分なものを着ていない方が術後も楽なのだ。

家計簿がびったり合ってへそくりせず

岸 本 孝 子

へそくり上手はまともに家計簿をつけない人だと思ふ。正確に家計簿をつけていれば、「へそくり」という項目を作らなければならぬから。まさか「へそくり」という項目を作って堂々とへそくる奥さんは居るまい。正確につけたつもりの家計簿の残高が合わずに残高が多かった場合、後から入金つけ落ちがあつて逆に残高不足という破目になるものだから、正直者は下手なへそくりなどしないほうがよいのです。

移植より脳死を救う方が先

岡 井 やすお

日本でも脳死認定後の臓器移植が認められるから既に数例の移植が行われたことは周知のことだが、ドナーカードを持った人が脳死に近い状態になると、関係のない第三者までが脳死に至って移植手術が出来ればと心待ちしている。ドナーの生命を救う事が先だろう。子を抱いてから公園が好きになる

播 本 充 子

子供をあやして気持ち良く遊んでもらうには公園が最高だ。孫がよちよち歩き出した時靴を買ってあげて、まず歩かせたい処は公園と決まっている。この気持ち良くわかる。

ひと口に一兆円というけれど

中 後 清 史

近頃は新聞にも、テレビのニュースにも何兆円という額が報告されている。それに慣れて私たちも何千億とか何兆円とかを口にしてはいるが、一般の人でそれがどのくらいのお金か知っている人は少ないのではないか。私は宝くじが三億円になって、もしも方が一当たつたら困るので夢を持つのは止めた。

妻のメモ通りに動き悲無し

川 上 大 輪

最近夫婦が通例である。別に尻に敷かれるわけではないが、女性のほうが身近な点に思慮深いからである。細かいことに疎い男は奥さんの指図通り動いておれば大過ないことは事実です。

掌で受ければ雨の色が消え

時 広 一 路

雨というものは降っている時はその時その場所により色彩を感じるものです。しかしどの雨も掌に受けてみるとみんな無色で大気中のゴミや有害物質を含んでいるとも思えない。すうとんと決めても覗くウインドー

原 さとよ子

人いろいろ川柳塔を読み終える

田 中 正 坊

# 水煙抄

## 河内天笑選

河内長野市 水谷正子

生き甲斐を私が貰うボランテイヤ  
時々は株転がして楽隠居

改めて宝は何と自問する

匙投げた娘にいい虫がつかました

振興券タンスに寝かすおばあちゃん

岡山市 清水金太郎

入院の妻にいろいろ指示される

付添いの私も薬きらされず

孫娘のようなナースに叱られる

三億円当らなくても平気です

誕生日自分で祝う酒を買う

今治市 塩路よしみ

コーヒーで乾杯二人だけの宴

知っていてとぼけ上手な歳になり

人間の森で燃えてる生きている

働いた汗が夜風に救われる

エキサイトしたひまわりも首をたれ

札幌市 三浦強一

レントゲン米粒ほどの小悪魔め  
単細胞鎮痛剤がすぐに利く  
結石を流すビールと言つて飲む

火気厳禁異常乾燥してる妻

今朝の収穫どんぶり鉢のプチトマト

堺市 和田つづや

とても長い日です湯上りビールまで

唾をのむ貴男が嘘を言う前に

棘のあるバラとカードをライバルに

民宿で豚の蚊遣りに出逢うたり

ネクタイを締めるとロボットになれる

大阪府 澤田和重

毎度ありがとうと言えぬ葬式屋

この先は私の領地高野山

どのペンで書いても癖字直らない

検査結果きいて強気を取り戻す

嫁が来て裸を見せぬ父となる

鳥取市 福永 ひかり

二度同じことを私も言いだした  
蜆にはゴメンと言って火にかける

人間を信じていない核兵器

封のまま賞味期限が切れている

片隅にいつも晩年おいている

鳥取市 有沢 せつ子

油断した顔スナップに盗まれる

ごみの山 毒が地球に染みている

大声で呼んでも運は振り向かぬ

みんな留守極楽気分茶をすする

公園で酸素いっぱい吸ってくる

大阪市 中澤 伽羅

水まくらしてよい夢を見るつもり

マネキンの着てるビキニを買ってみた

貧しげな顔してはるがお金持ち

どっちでもいいよと多い方をとる

枯れすすきはっかり唄ううちの孫

野田市 那賀島 雅子

白い蝶ひとつ日傘にバスを待つ

思うこといっ気いのべて悔いている

噴水の虹見つめてる午後の汗

空白を埋める言葉をさがしてる

政治論西瓜の種子を吐きちらし

貝塚市 吉道 時子

人の倍努力をしてるガラス玉  
半額セール嬉しくなって二枚買う  
期待はしない気分転換するエステ

失敗も許してしまふ笑顔よし

弁解をしない男について行く

寝屋川市 岡本 勲

酒呑みの父もお酒に見放され

洗っても落ちないアカと同居です

辛せは本音ぶつける友がいる

休耕田と知らず蛙が水を待ち

ひびくこと鈍いぐらいの妻がいい

吹田市 須磨 活恵

胸底の火種を煽る罪な風

いわし雲時にはひとり物思い

蟬しぐれ母へ無沙汰の電話など

結び目も螺子もゆるめて風通し

人間の垢にじませて書く日記

綾部市 藤田 芳郎

近くへのついでが火種置いていく

ハンドルの遊びへ絶えぬかすり傷

おかしいぞ妻が知らないはずがない

雑草も妻も油断を突いてくる

のど仏びくりと動き以下余白

大阪市 榎本 日の出

ユーモアがそろそろ解る歳となり

賑やかな嫁で姑惚けられず

華やかに千円豆腐買ってみる

上げ膳も限りがあつて胃腸薬

炎天に真つ白い歯がふり返り

大阪市 奥村 五月

ダイエツト腹の虫まで道連れに

保険屋に俺の値打ちが分かるかい

肥満体鏡でそつと水着きる

決裁にわかつた顔でメクラ判

忙しげに心に響く街の蟬

大阪市 一本 勇太

一杯のかけそばに似た僕の過去

惚れつぽい財布手の鳴る方を向く

バベルの塔も父も自論は曲げはせぬ

無視の他ない反論に次元の差

結論を急かされているかき水

大阪市 立蔵 信子

決心がにぶると秋になつてくる

あつさりとした決めた夏に負けました

保津川を下つて秋を迎えます

最初からやはり反対と言おう

遠くを見るときわたしは秋の顔

大阪市 中村 叡子

日本も未だ大丈夫甲子園

プールでは痛む手足がよく動く

しみじみと娘ないのが無念なり

ほんまかいなこれで景気が上向くと

胡弓の音 幽玄流す風の盆

八尾市 與田 明

寝言にも呼んではならぬ名は一つ

添え書にほんのり温いものを見る

鵜呑みにされて困っている冗談

暑さ負け電話ですますことが増え

割り切れぬものを割り切る手切れ金

奈良県 江波 正純

地球ごと消毒液でムシ退治

浄土にもワイロとる奴いるだろう

大國のエゴが手招くいくさ雲

水やりの手許にもある虹の橋

熱の朝こころづくしの粥を食う

八尾市 井尻 民子

三〇〇キロ信号のない地平線(カナダ 2句)

多民族集う湖畔の水が澄み

願望に溺れてみたいひとり言

ほろ酔いをかくして靴をそつと脱ぐ

里帰り逢いにいこうか揺れる橋

堺市 見本 ちや子

カメラ慣れハイポーズする阿蘇の馬

ライバルは私の胸の奥に居る

バタバタと毎日早く過ぎて行く

早とちりどんどん話纏れてる

何もかも満たされているのに淋し

堺市 矢倉 五月

表札の歪み直していた亡父だ

お隣のメダカ預かる夏休み

たこ焼とビール帰省の子が所望

堂々と素顔で生きよと言う鏡

性懲りもなくまた買った宝くじ

堺市 梶本 哲平

真夏日のジャケットぼくのマタニティ

三百年ひんやり暗い天守閣

もの忘れいいから生きていられます

新聞の五倍の厚み折込紙

迎え火や十三日の金曜日

東大阪市 北村 賢子

酔いさめて夫は借りて来た猫に

スランプを吹きとばしたい赤い服

わだかまりすべて流してする介護

すんなりと添えたふたりじゃなかったに

ティーフォー ツー誘ってみたい人が居る

羽曳野市 川田 晋

三日目はまだ居るのかと思う孫

体調を崩し男も更年期

中元のハムひっかかるのど仏

双方が男を下げた口喧嘩

ドル預金にしたら上がった円為替

羽曳野市 西村 りつえ

無口だが心を掴むあの笑顔

やさしさについ気を許すところ汁

夫婦げんかシリアスにみる娘の余裕

バーゲンで夢を詰めこむカバン買う

夏ばてに食べる食べると回る寿し

松原市 和気 慶一

玉手箱開いたような同窓会

老犬と老婆阿吽の歩調とる

図書館をはしごしている本の虫

青空を戻してくれた盆休み

坂道で靴はならず膝がなる

岸和田市 村垣 鹿太郎

何事もマアマアで無事治め

舌出した気配感じる電話口

夏休み孫が来てよし去りてよし

この天気持って行きたい旅の空

まなうらに遠き漁火旅もどり

大阪狭山市 矢野 梓

病名を言えぬ笑顔が曇ってる

めくじらを立てる自分が小さく見え

生きて行く小さな嘘もつきながら

繰り返し読むほど燃えてくる手紙

折角の高校歴を無駄にする

藤井寺市 太田 扶美代

こっそりと弾んでおいたお賽銭

複雑な間柄です恋でした

私を守ってくれたサンガラス

六十の報告に行く盆の墓

平凡に暮しています冷奴

富田林市 中井 アキ

コーヒの相手が欲しいラブソング

ブランドもエステも嫌い太い指

本領を発揮している趣味の会

酒止めた男と欲のない話

石段を登り切ったらする握手

高槻市 乙倉 武史

飽食に慣れ戦中の飢餓しのぶ

鍵いらぬ田舎ぐらしに憧れる

汗だくで下手な絵手紙描いて出す

人並みに出来ぬ不甲斐のなさ思っ

無器用なわりに欺しの演技力

豊中市 みき わきみ

リストラのデッドボールで子会社へ

タレントの名を妻にききテレビ見る

親孝行必要ないと新保険

植木屋を入れず武蔵野とあるじ言う

切り売りの西瓜で足りる核家族

枚方市 二宮 紫鳳

プランコに我 幼子のごとく揺れ

ひまわりの母の笑顔に迎えられ

朝顔のつるが隣にご挨拶

明日へのやる気わかせる里帰り

ふっ切れぬことあり髪をカットする

横浜市 田中 笑子

豪快な笑いに元気づけられる

白無垢の袂に詰まる親の愛

邂逅が言葉にならず手を握り

おすそわけして故郷の自慢する

相槌を打つだけ打って客帰る

横浜市 芦田 鈴美

良い人にされてる彼もGファン

キムタクと同じ名前で人気者

熱帯夜口実にする長電話

貧血の腕もやぶ蚊は逃さない

夕刊がやぶ蚊一匹連れてくる

横浜市 鈴江純子

許そうか喜ぶ顔が見たいから  
恢復期手足待ちかね動きだす  
父さんの声は風を呼びそうだ  
政治面読むのはよそう胃に悪い  
言い訳を復唱してるドアの前

横浜市 三村八重子

大声が聞こえているが影薄い  
露分けて茗荷探して蚊を起し  
置き薬 効能書は広角度

雨やんだことを告げてる蟬時雨  
日記には友の悪事も暴いとか

横浜市 川島良子

ゴールドカード僕はペーパードライバー  
隣売るチラシが郵便受けにくる  
役員が先頭をきる盆踊り  
代替わり寺も株式会社なり

整理整頓ボクのへそくり消えました

横浜市 山梨雅子

いびきかくから仲良しと別の部屋  
緑陰へ並びタクシー昼休み  
花火より前のアベック気にかかり  
にこやかに踊れと言われても照れる  
釣人の魚籠のぞきつつする散歩

横浜市 北沢街湖

曲る角ちゃんと知ってる千鳥足  
挨拶もなく野良猫は庭を抜け  
巣立つ日へ餌は与えぬ親雀  
逝った犬ビデオの中で跳ねている  
いい年をして心臓の初なこと

横浜市 布山嘉信

槍穂高浄土の色に暮れてゆく  
梅雨の庭明るくしてる花ざくろ  
まねき猫不況の風も招くなり  
晴れ続く書齋に人の影がない  
一泊の旅に名残りの陽が落ちる

横浜市 荒井広和

ポケットの中で聖書が欠伸する  
あり余る時間を埋める趣味講座  
幻想に舞う温室の蝶の群れ  
傍目には涼しく見える紹の衣  
自画像も日々好日で呆け始め

東京都 井上つよし

冷戦を幾度越えてフルムーン  
写真より下手なスケッチよく喋り  
盆休み過ぎて静かに墓参り  
紙屑と地ベタリアンが吹き溜り  
我が子なら傍受してでも守りたい

八王子市 井上京一郎

エアコンへ揉める夫婦の温度感

倒産のビルの上にも大花火

古文書へ額いている凸レンズ

海に出てみたい河口の淡水魚

ポスターを見ればいかにもアート展

静岡市 大村正雄

売れないタレントが来る秋祭り

ご署名さんとなりて募金しています

リストラで弊履と言う字思い出す

お隣と電話で話す団地妻

SLの止ってる駅木の出口

鳥取市 谷岡清子

朝顔に生気お札に水あげる

日の丸がタンスで泣いて染みだらけ

涙腺がひからび今日は今日の風

曲ってる胡瓜すなおな顔してる

介護法当てるになるやらならぬやら

鳥取市 録沢風花

ほとばしる不満にやっと山動く

忍耐の父に明治と書いてある

竹とんぼ亡父のナイフが錆びて来た

ICU見舞いためらう体験者

小さな家で大きな朝日浴びて住む

米子市 小塩智加恵

長電話夫時どき咳ばらい

猪が収穫際を狙い撃ち

班うちに二軒新築餅が降る

遠花火東の空は夏祭り

缶けりの音賑やかに塾帰り

鳥取県 澤裕子

良妻も時と場合で魔女になる

サービスの裏に商魂見えている

暗示など通じぬ自我の強い人

幸せは小さい方に夢がある

余裕ある心で日々を歩きたい

鳥取県 西垣美知子

人として正しい心を子に植える

親しいが真ん中におく車間距離

節目から結び直して足す絆

風鈴も小休止する熱帯夜

稲作り暑さに感謝汗をふく

鳥取県 鳥羽玲子

赤ワイングラスに夢を溜めて飲む

ブランコに乗って紅葉と話す

拾い読み想像力が肥えてきた

雨の駅出迎えない連れもある

向かい合う二人の暮し飽きもせず

鳥取県 鳥羽直市  
指折って数えなければ気がすまぬ

平凡な妻の献立飽きがこぬ

あれこれと言うが日本は良い国だ

マラソンはあと半分が面白い

散髪をすれば頭もさえてくる

鳥取県 山岡久枝

よい景色 散歩の足が軽くなる

こけこつこ朝の三時は早すぎる

モロヘイヤ夏を乗切る一品に

幽霊が出たら私も化けてやる

祭にはでかい献立考える

鳥取県 加藤公子

蟬族が一番鶏に朝を告ぐ

県道を横切るツガニ案じたる

去年より三日遅れて秋の虫

これきりでよう参らんと墓掃除

花椿終えてノウゼンカズラに抱かれる

秋田県 湊 修水

八月の雲は悲しい顔をする

枝豆を出して文句を言わさない

老いの身に難所となった丸木橋

飲みすぎに注意と瓶に書いてない

賑やかにポックリ寺へバスツアー

高知県 百田幸  
飲みこんだ不満が顔をゆがませる

危ないと口より先に手を添える

やがて海わたしも流れのひとしづく

決断へ取り越し苦労ばかりする

目のいろで夫の心透けてみえ

愛媛県 宮本末子

六甲の水が茶になり酒になり

頼まれて拾う薬の枇杷の種

一服を先に吞ませて売るコブ茶

金魚屋がよく売れている男振り

炭が火になってサンマが風に乗る

今治市 野村清美

東京の大学孫が垢抜ける

顔色を見せに素顔で医者へゆく

細腕にどっしり重い広辞苑

バス停に慣らされました待ち時間

スッポンにパワーを貰う病み上がり

香川県 原 賢

正論が笑いの渦に呑みこまれ

正直に言えばいいのに軽い嘘

憎しみを捨てればきつと碧い空

雑魚なりにやるだけやって風を待つ

このままで綺麗にいたい八分咲き

島根県 武島 ちよえ

朝刊をゆっくり開く昼下がりに  
目の前の草は刈れない虫が鳴く  
満腹で晩のおかずが決まらない  
出涸らしもたまには役に立ってます  
幸せは呼び捨て出来る友を持つ

島根県 菅田 かつ子

がっしりと木にしがみつくと蟬の殻  
さやさやと風が田圃を金色に  
よれよれの枝に胡瓜がぶらさがり  
じりじりとカメラ胃の中這い回り  
善い人ねなんて言うから逆らえず

島根県 毛利 幸

古里もいつのまにやら異郷の地  
少子化で欠伸している遊園地  
健康で酒が旨いと二日酔  
低金利持たない者は蚊帳の外  
幼子がへっぴり腰で持つ花火

出雲市 佐藤 治代

磨崖仏どこかで逢ったような顔  
野仏についてお願いをして通る  
てんこ盛りのだんご供えて仏待つ  
くたびれた夫婦のごろ寝夏枕  
母さんはもめん豆腐のような人

倉吉市 大下 智子

キャンプ場 母より父が良く動く  
キャンプ地で陽気になったおちよぼ口  
横顔を見ただけで胸高鳴った  
冷や奴主食のように食べている  
太るほど肩身がせまいご飯時

岡山県 土居 ひでの

酒の勢い借りて無口の力み出し  
飽食へ優しい心の絵は画けぬ  
豊かな乳房を食べた夏の海  
健康のシナリオにあるビタミン菜  
力まずに躍るワルツの軽やかさ

宇部市 高山 清子

人気出て知らぬ遠縁寄って来る  
長生きをしたくて守る医者 の 指示  
夫も子も見えず迷った恋の道  
会えばまた想いが募る忍ぶ恋  
一目惚れしたばかりに舵取られ

尼崎市 軸丸 勝巳

今更の思いの国旗 国歌法  
戦友の弔辞 戦歴風化せず  
反省文書かされそうな戦争展  
熱帯夜朝寝はさせぬ蟬の声  
ゆがんでますね老骨を見る接骨医

尼崎市 内田美也子

精霊棚先祖がなごむ茄子の馬

フアンタジー名残つきない京五山

無花果の匂いの中に亡母と居る

とびとびの記憶をつなぐ古写真

風鈴が声をかけ合う両隣

篠山市 円増純子

相乗りで行く道中もクラス会

花々をこころの画布に描きためる

うな重を分け合うてたる老い二人

無駄話しだいに心とけてゆく

未だまだと思うことあり古希迎え

尼崎市 田辺鹿太

改札を出ると活気を取りもどす

あいまいな返事がかえる暑さポケ

赤い血を持つているから泣く笑う

是も老いつぶやきだけが増えてくる

泳ぎには自信がないという水着

和歌山市 水田秀男

安眠を妨害してる電子音

河川工事蟹の里がまた消える

和歌山は田舎の方が道は良い

あやとりをしているような永田町

ダイオキシン避けてきたよと蟬は鳴く

和歌山市 吉村さち子

誕生日自分を祝う花を選ぶ

八月になると平和を轟かす

たましいの触れ合う音が欲しくなる

攻めてきた言葉を丸くして返す

命とはこんなに脆い骨ひろう(伯父叔母世界)

和歌山市 武本碧

都合良く記憶の糸が切れている

ねんごろに扱い過ぎた子の謀反

切り捨てた尻尾が後を付けてくる

宇宙人もちよつと寄つてくキャツシング

ヒーローは人気の秘密知っている

和歌山市 森口美羽

心底を吐き出してから四面楚歌

人生の土俵へ我慢載せている

予定外の事しゃべるから揉めている

紙一重の差が人生を狂わせる

義務であるかのようにすぐ脱いでいる

三重県 尾崎勤

人間の居る音がするキーボード

他府県のナンバーも居る通勤車

先走りもう言いたげな口になる

ストローの紙を畳んで物思い

住人が変わったらしい庭の荒れ

新潟県 高野 不二

それにしろ煙草一箱程の利子  
臓器だけなら生き残る道がある

クーラーが出来て地球が暑くなる

口先はまた会うように言う別れ

川崎市 和泉 あかり

家具の位置少しずらした風の道

横丁にカレーが匂う夏休み

街中に音のぶつかる盆おどり

物忘れと忘れ猛暑のせいにする

横浜市 秋元 和可

向日葵が咲いてゴッホになるわたし

菜園で主張曲げないへぼきゅうり

原爆忌お経をあげる蟬時雨

天職を探しつづけてフリーター

横浜市 山下 省子

罪のない噂話で盛りあがる

いい人を演じつづけて皺だらけ

都合よい理屈で自分許してる

好きと嫌いの狭間で心揺れに揺れ

横浜市 伊藤 ふみ

飽食へ仏の供物目にされず

病院出て真つ青な空仰ぎ見る

ふる里に迷路が出来て帰れない

真つ白のむくげ見ながら歯を磨く

横浜市 福田 由美子

故郷の自然が負けるゲーム熱  
同居してやわらか御飯嫁が慣れ

嫁姑 分わきまえる知恵をもつ

ご先祖に元氣さみせる墓掃除

横浜市 保田 絹子

さんざめくピアガーデンに食の月

ケーキ屋の前を黙って通れない

遺伝子のメスにロマンも砕かれる

蟬しぐれ読経の声も張り合つて

横浜市 豊田 羊子

老婚の語が生まれてる長寿国

父の再婚介護の義務は一ぬけた

結婚をしたよと過去が捨てられる

賞味期限切れた納豆食べ元氣

京都市 勝山 美千代

大文字炎を惜しむ京の夏

写経終え無の心境で今日も無事

孫たけてお供え菓子に手を出さず

俄雨少うし秋をつれてくる

京都市 高島 啓子

せつかくの会社を息子やめてくる

門構え寄附はあんまりしてくれず

強い肩見て下さいとギャル御輿

剪定のしすぎ街路樹オブリエめき

京都市 三宅満子

風鈴の音色昼寝の邪魔をする

エルニーニョ覚えた頃はラ・ニーニャに

山寺の読経にまけぬ蟬時雨

山深くコロリ観音おわします

和歌山市 前岡健三郎

雨が降りやつと人間らしくなる

懸命に自由に生きて出た答え

シンボルの大杉倒す低気圧

脇役が鬼と指切りしてました

和歌山市 上地登美代

にが瓜を毎日食べて夏を越す

か細い蔓へ立派な西瓜胡坐かく

菜園で挽いだとまとへ舌つづみ

たかがハンカチされど忘れて苦労する

和歌山市 木村親路

一息に夏を呑みこむ大ジョッキ

特攻の基地跡をみるフルムーン

成長期と言つて欲しいね反抗期

クーラーに褒美あげたい夏でした

和歌山県 村中悦男

ブカブカと喫煙室で生きている

追い越したはずの単車に追い越され

今ここに置いたと思うさがし物

飲まないで酔つたふりして本音吐く

和歌山県 坂東和代

忘れねば頭も胸もパンクする

口髭の立派な駅のホームレス

主婦と言うロボット遂に故障する

ふり向いたポニーテールは男の子

尼崎市 清水久美子

しんどいが派手なナゴヤへ嫁がせる

宿帳に若気の至り伏せてある

ぼんやりの私が掴む残り福

阿呆になる夫愛しい阿波踊り

尼崎市 尾宮弘治

観劇の妻から電話米を研ぐ

敗戦をお伽ばなしに聞く曾孫

思つたよりハワイは近し娘の華燭

紫陽花が見頃と囲碁に招かれる

尼崎市 森安夢之助

不意つかれ次の言葉が出てこない

君の一生面倒みるよベット君

階段の上を目当ての椅子がある

七人目の敵隅っこで吠えている

伊丹市 榎谷郁子

自画像を思いの儘に画いてみる

それぞれの個性が光る仲間たち

隅っこは手酌で気炎別世界

へそくりがぬくぬくと寝る文庫本

伊丹市 延寿庵 野鶴

ギラギラと噴水跳ねる炎天下  
うな井を食べて暑さを乗り越える  
藍染めののれんの隅へ蝶が舞い  
躓いた石が教える老いの腰

宝塚市 飯西 ミサヲ

花火よりはなおの痛み限界に  
超特急老化直線止まらない  
梅漬けて三日三晩の旅に出る  
呑む打つ買う出来ぬ女の淋しさよ

川西市 田中喜俊

同じ年若く見えるは羨まし  
冷房の部屋でおしゃべりよく続く  
休日の団欒さらった長電話  
辞書にない言葉みだすは現代っ子

川西市 西内朋月

二日酔浄土の妻に叱られる  
その歳でようやるなあとプロポーズ  
逝った妻ポッケに入れてひとり旅  
フラメンコ汗掛けられるかぶり付き

兵庫県 山本泰子

仏道に自分見直す寺詣で  
析る程邪念が浮ぶ凡人で  
言い訳の一つ一つが気に障る  
オーイ居るか挨拶うれしい友の声

兵庫県 黒崎 美紗子

歩くだけ森林浴と言う仲間  
雲高くみつめられてる畑仕事  
友からの変らぬなさけうけとめる  
穏やかな風がじょう舌だまらせる

兵庫県 徳平 毬子

孫一歳我が家で一番良い返事  
若草と共に萌えたい還暦後  
迷いごと線香の煙に問うてみる  
梅雨晴間心のうさも干しに出る

兵庫県 西山 八重子

仏壇の煙で今日の幕があく  
老骨にムチを打ちつつ朝が出る  
朝穫りのトマト思わずキッスする  
青田風入れて二人の昼餉どき

兵庫県 安達 厚

ありがとう言える素直な喜寿でいる  
天の川大きな祈りしたくなる  
妻の留守慣れぬ手つきの台所  
石段の苦労忘れる鐘一つ

鳥取市 松本 つね子

大ボケと中ボケ小ボケあるらしい  
高笑いせまい我が家をはみだした  
惚けぬよう亡夫に祈って助け乞う  
のど元を過ぎて平和が狂いだし

夏バテをトマトジュースで乗り切ろう  
暇つぶし駅弁買いにふらり出る  
山本 益子

年金は汗の結晶感謝する  
振興券今度限りと言わないで

鳥取市 中村 金 祥

しまい風呂お湯はぐったり冷めている

減税がラッキーだとは思えない

パワフルな神も近頃ダウン気味

勝ち栗をそっとポツケにしのばせる

鳥取県 高尾 京

此のいのち海から生まれ海に帰す

原爆忌平和への道けわしくて

確認の指さすしぐさ多くなり

頼る子も老人食に慣らされる

鳥取県 藤山 弘子

守る家肩にどっしりのしかかり

ふろしきへストレス包み温泉へ

環境へ簡易包装輪を広げ

暑い日の弁当作り四苦八苦

米子市 足立 由美子

美容院すこし美人にしてくれる

遺伝子のひとつがとでも遊び好き

いきさつはどうあれ円く修めたく  
ダイエット計画倒ればかりする

肩の荷を下ろして休む椅子がある  
冷や奴ちゃんと言義な角がある  
米子市 猪森 スミエ

キャンプ場星のロマンがすぐ其処に  
ペットボトルまた逢いまししょう変身で

出雲市 加藤 スズコ

遠くなる昭和を偲ぶみどりの日

アルバムに燃えた昭和の姿見る

嫉妬心消してつなぐ手温かい

仏飯を天こ盛りして五十年

出雲市 川島 和歌子

冗談とごまかしながら出る本音

黙り込む妻の演技に脱帽す

見た目より頑固な杉菜土を這う

正直に進めば当る向い風

安来市 原 煩惱児

夕映えに僕を曝して今日が逝く

人並に茅の輪をくぐるお賽銭

墓洗う重ねた不孝詫びながら

戻る子を待つてる盆の冷蔵庫

益田市 岡田 たけを

眠るように死にたいねえと語る夜

検診へタクシーで行くもつたいない

昔の悔い覚えて今のことわすれ  
朝の目覚め生きてたことへありがと

松江市 山根邦代

街路樹に日傘あげたい炎天下  
夏草に六十路の鎌は休みがち  
蟬しぐれあつい暑いとうったえる  
墓石を洗うひとりに蟬の声

今治市 中村好恵

逝った子の好物ばかり作ってる  
家族みな揃うと居ない子を思う  
諦めはついたらと母の涙声  
淋しくはないか遺影に聞いている

愛媛県 安野案山子

コーヒートの砂糖を抜いたダイエツト  
隣から伸びたカボチャが花を付け  
ノムさんのぼやきが続くタイガース  
国民も政治家も付く背番号

高知県 近森功

今日もまたナースの笑みに励まされ  
病床で目出度く一つ年をとり  
補聴器を外し茶の間の輪に入る  
台風を道連れにする旅プラン

北九州市 岡田幸生

泥縄の禁酒で採った尿カップ  
セールの世にお世辞にガード緩みだす  
縄文の世にも男のネックレス  
リストラのニュース出る社にいる息子

岡山県 国米きくゑ

澄みきった空にすわれる竹トンボ  
底辺に生きて笑いの絶えぬ家  
太陽の移り香貫う布団干す  
音のない手話で本音が弾み合い

倉吉市 牧野芳光

命ひとつどんなにうまく生きようと  
もともっと青い空見た埴輪の目  
逃げ口上ばかり学んでフリーター  
後列にいるそれぞれの不満顔

吹田市 三浦憩

夢のある仕組みとと思う万華鏡  
エアコンに助けられている夏日記  
発想が煌いている子供の絵  
父さんの港で暮らしまだ独り

高槻市 生田義一

幸せです妻 娘と孫の居る暮し  
生き甲斐は週に二日の宮任え  
眠られぬ夜は角壇そつとあけ  
雨宿り知らぬ同士が友となり

大阪市 伊藤博仁

Mバジヤマ昔の甲種裾を折る  
貴方から角膜だけを貰います  
蟻んこも興味をもつか半パンツ  
携帯はこんなに使えと遭難者

大阪市 熊代 美智子

川柳が私の余生元気づけ  
我が儘と知りつつ腹をたてている  
笑顔しか見せない嫁の腹の中  
特売日となりもサンマ焼くにおい

東大阪市 今岡 貞人

よく通る声直球を投げてくる  
無冠だが我が城だけは守り抜く  
勘定はうまいが金に縁がない  
敗戦のつけに時効はない模様

大阪市 中井 正秀

ぼうふらも水欲しかろうもう少し  
うとうとと昼寝楽しむ歳となる  
紫陽花と仏に会いに寺巡り  
散水器付けてあるのに枯れている

堺市 村上 靖雄

団欒に犬も座る場決まってる  
ピル解禁少子化更におし進め  
一寸見は老けて見えても歳は下  
両祖父母揃って孫の運動会

堺市 斎藤 さくら

五十路からやつと腰上げ初句会  
本心が知りたくなって嘘をつく  
八月は犬もストレス人嫌い  
毎日が祭りのように酒を飲む

堺市 荻野 正雄

連れ合いを亡くして元気出す女  
浴室で歌えばプロのような気に  
子授け祈願効いたか倅から電話  
頻尿へいらいらさせる渋滞路

八尾市 山本 宏

意気投合波長があつて酒になる  
こわいもの何ものもなし波に乗る  
冗談をまともに聞いて赤っ恥  
クラス会光った友が見当らない

八尾市 中島 春江

留守電を押ししてゆっくり昼寝する  
子の人生取り越し苦労やめておこ  
今の子は動かない虫 電池切れ  
嫁姑思い思いに午後のお茶

羽曳野市 安芸田 泰子

肉好きの亡夫つらから仏膳  
迎へ火に家中のあかりみな灯す  
独り居へ女だてらの大ジョッキ  
頂上を極めた自負のふくらはぎ

羽曳野市 森田 四三郎

厭な人傘かたむけて通り過ぎ  
音痴とも言えず美声と褒めておく  
幼児背に街頭署名断われず  
多数決で正義の主張無視される

富田林市 大橋鐘造

すんなりとサンマに決めた市場籠  
ゆきずりの花と知りつつ手を握る

善人の仮面は被ったままで逝く  
太く永く生きてコロリと逝くつもり

富田林市 山原昭水

酒呑まん男なんかと付き合えん

隣歌舞伎向かい洋画でうち花月

吟行で知った五人の隠し芸

万葉集読んでいたのはホームレス

泉佐野市 備後三代子

リボン解き孫の真心抱きしめる

孫八人何とよく食べよく喋り

親でさえ子を叱らないましてをや

雁首を揃えて鯉も午後木蔭

泉佐野市 大工静子

食卓に芋と大根箸おどる

すだれ越しには好かぬ人訪れた

明け烏笑って通る棟の上

今思う言葉の出ない娘の時代

泉佐野市 稲葉洋

兎も角も夏越しました食い気です

砂の上忘れて欲の城築く

裏窓に本音の暮らし干してある

結び目を締め直して老夫婦

岸和田市 木村正剛

慣れた頃初心者マークつけて欲し

母逝って一泊二日の盆休み

酒だけは精霊流しから外す

ねじれたり歪んだりする夫婦仲

河内長野市 大西文次

盗み酒五臓六腑にしみ渡る

外面は似合う夫婦を演じ切る

腹の虫食いしんぼうをもて余し

特急が追い抜く駅で食うおそば

東大阪市 田中美弥子

浜風に親子賑わう波止場釣り

突堤は魚より竿の数が勝ち

今のとこ彼女おらぬと言う夫

紅バラのトゲがささってから真面目

交野市 森本益弘

新緑の赤目の滝へ万歩計

姉妹には教えなかつた父の癌

昼飯は名物料理バスツアー

お土産は二人暮しに合うサイズ

門真市 矢阪英雄

水茄子を味わう幸を今年また

水茄子に冷爛問わず杯重ね

水茄子を漬けずに齧る土地の人

祭来る話の卓に水茄子

大阪府 三浦 千津子  
ひまわりに負けぬよう鰻買うて来る  
学歴の軽さ努力で詰めた椅子  
へヤーメッシュ少し勇気のいるお洒落

大阪府 尾崎 黄紅  
古釘の折れず曲って意地をみせ  
しまなみで四国結婚率あがる  
電池替えてきたらなあと歳に言う

大阪府 大川 道子  
ほどほどの距離心得て温い友  
バイキング値嵩ものから先に取り  
制服を着れば背中がしゃんとする

大阪府 榎本 舞夢  
どん底の生活おぼえ強くなる  
両輪の役目果して恙なく  
手の中に握りこんだら離さない

大阪府 星野 ひさ  
ポッペン尻と呼ばれて割れもせず  
花いっぱい終のすみかを極楽に  
見たくないものを見たさに片目閉じ

大阪府 小泉 ひさ乃  
手術室生きよと神の音がする  
独り居が洗濯干して無事を知る  
タイガース少し疲れが出たらしい

大阪府 平井 露芳  
南極へ行ってもカーナビついて来る  
日の丸はお子様ランチで知ってるよ  
リストロも投げて躲した野茂投手

高槻市 西谷 治三郎  
のどを押す昔無かった相撲わざ  
晩酌の銘柄変えた消費税  
薬タダ高くつくのは電話代

高槻市 執行 稲子  
究極の穴場は危険信号だ  
携帯がいらいらさせるティータイム  
チケットに亡母は楽しみ抱いたまま

高槻市 左右田 泰雄  
トク得の切符気ままな一人旅  
ひき逃げのテールランプを見た蛙  
往來に突き出る枝は落される

高槻市 江原 秀夫  
土壇場でうろうろしているのは男  
まあいいやの呪文男を丸くする  
後ろ指の仕業か背中重くなる

吹田市 大谷 篤子  
六十路来て世渡りいまだ下手なまま  
幽玄の世界また佳し地唄舞い  
若い僧下手な読経が胸に沁む

枚方市 大昇隆 広

酒まわるささいなお誉めもらった日

なんやかやあつたが今日の夕涼み

子育てにじっと耐えてる親御の胃

寝屋川市 井上 すみれ

この猛暑雑草めげずご繁栄

差し障りないお話で生あくび

窓に來たトンボに過ぎし日を想い

八尾市 高橋 明子

恋人に振られた時も此の川辺

刑終えて立派な紳士何処へ行く(国会議員)

安楽死願う心は皆同じ

八尾市 田中 トシエ

息抜きは百円シヨップの中でする

サヨナラの語尾玄関の戸に挟み

心ない言葉飛び出す八ツ当り

八尾市 鷺見 章

梅雨晴れて窓いっぱい陽をあびる

梅雨あけてくまなく晴れた朝の空

せみ鳴いていよいよ高き初夏の空

羽曳野市 山本 たけし

鳩胸をそつと覗いた夏の風

匂くれた従兄も齡と鎌を捨て

昭和史と静かに対話十五日

羽曳野市 永田 章司

道祖神古い家並にそつと映え

波高し世界で進む情報化

嫌味だと人に言われて歳を知り

羽曳野市 川口 信子

絵日記の鈴虫オルガン弾いている

焚きつけて走らせ上手仕掛人

足踏みそのまま迷いの中にいる

河内長野市 柏本 靖子

深い皺家族支えてきた勲章

慌て者空の財布を持って出る

良い返事くれると信じ切手貼る

河内長野市 木太久 正一

簡単に夏のスタミナうなぎ丼

ハイジャック捕えて見れば一橋

蟬取って満足してる孫三歳

河内長野市 杉谷 カズエ

夏向きのからだだと笑う肌のしわ

箸つけて無いのも多い食べ残し

効用を信じたくなるコマーシャル

河内長野市 印藤 智子

自分史を出そうせつせと貯金する

茶髪より黒ぐろとした毛が目立ち

肩は出しロングドレスの中に足

藤井寺市 岸 本 寿 代  
初盆にやつと心に落ち着きが  
夏祭り襟足きれい浴衣美人

淋しいな友の旅立ちこたえませす

和泉市 横 山 捷 也

聞き役の貝が一言いう台詞  
菜園の初収穫に孫を連れ

三日月の眉に喪服の以合う女

岸和田市 宮 野 みつ江

明日への南の風を貰う窓

すかたんな人やからこそついて行く  
大ジョッキ オーダーしたは妻の方

岸和田市 亀 井 皎 月

畑作り人生最後の鍬洗う

永久の別れだったと今にして

逝く時の遺影はちゃんと出来ている

横浜市 平 達 也

今からは旬にこだわり暮したい

泣くだけのはかない生命蟬時雨

和ませってくれる葉書絵お人柄

横浜市 長 島 亜希子

一面の花に小鳥も恋をする(尾瀬にて)

腹割って話すと友が去って行き

免許更新無事故の誓い新たななり

横浜市 福 島 かづ子  
膝痛に医者には笑って年齢と言う  
気がつけば夫唱婦随のかさのなか

立秋の風が元気をくれましたた

静岡市 増 田 扶 美

決断がついて風鈴よくひびく

晩学の充電友の知恵貰う

賞味期間気にかけてながら食べている

千葉県 大 川 晚 翠

Gパンの穴は若さの象徴か

話術とは出世コースの別れ道

鉢植えの目玉商品生きかえる

日立市 加 藤 権 悟

土となら無口な父の鍬多弁

菜園の茄子は磨ぎ汁好きらしい

コンビニの明り平和だなどと思う

浜松市 田 中 知 行

自動扉のたやすく開き外は雨

髪をきる今年の梅雨はながかった

学校へ呼び出しくらい髭を剃る

東京都 吉 田 土 風

ママアアと喧嘩の中に実力者

目に見えぬ糸を手繰って恋売り

夏の花キラキラぼくを呼んで居る

会話した父の思い出少なすぎ

飲み放題ビアガーデンは泡の花

駅名のめずらしさから客が増え

鳥取市 福島 庸二  
西尾 敬之介

朝顔の気の向くままにからみ咲く

献血に誘われしほる血一〇〇CC

一切れの残る西瓜を誰がとる

鳥取市 夏目 健一

真つ暗な方が安心して寝れる

気がつけば近くて遠い父と母

近いうち伺いますに不安増す

米子市 森 脇 麗

紫にピンクまだまだ似合います

時どきは薔薇の悩みを聞いてやる

転居してテンヤワンヤの日が続く

鳥取県 橋谷 静江

自家菜園私の汗も実ってる

贅沢に囲まれ育ち愚痴を言う

素直さにかけて頑固が幅きかす

鳥取県 西沖 彰雄

隠居まだ早いですよと役が来る

酒煙草ピタミン飲んで意気盛ん

七十の手習い口がよく動く

嫁の来るニュースで村が元気づく

さて今日は何をしようか老いの朝

年金を介護保険の波が呑む

鳥取県 平井 栄翁  
鳥根県 多々納 テル子

梅雨上がりわつと来た夏蟬時雨

狼を悪役にして孫の守り

番犬に二の足を踏む回覧板

鳥根県 福岡 博利

のぼせもんが居るからできる夏祭

ほんとうはその逆でしたと言えなくて

橋ができ隣の町へシヨッピン

出雲市 岡 あきら

閑人の淋しい余白ある日記

読むことは無いかも知れぬ日記書く

飛び入りで調子合わせる盆踊り

松江市 小川 注湖

王様をどう決めようか永田町

オールドミス出雲の神に手抜きさされ

茶髪の娘道路路工事で手旗振る

倉敷市 家守 政子

この暑さ門を閉ざして裸なり

週刊誌毛染めの間ひろい読み

赤とんぼ夕やけ空に亡母の顔

唐津市 岩崎 實

よく食べて叱られながら肥りおり

先のことわからぬままにする準備

過保護の児してもらえぬが当り前

香川県 瀧井 勝

当る筈ないと言訳しつつ買う

一日が早いスローで追いかける

鼻歌が少し反抗臭い節

香川県 向山 治 延

呆けたかと言われるようなドジを踏み

捨てないで川岸が泣くゴミ袋

峠越え子供の足に追いつけず

香川県 清川 玲 子

寡黙だが座に居るだけで光ってる

人間味溢れて少し頼りない

リストラが見えかくれして背けない

愛媛県 中居 善 信

ぼんやりへ上司が付けるバーコード

ぼんやりを笑うと妻に拗ねられる

オゾンホールは地球の返事も知れぬ

愛媛県 黒田 茂 代

秋風の中で小さな譜を拾う

ふる里にトトロ居そうな森がある

秋の夜の淋しがりやの好きな雨

今治市 渡邊 伊津志

躓いた石が知ってる明と暗

タンカーの行き交う海へ灯を流し

夏の海内緒話が得意らし

徳島県 安宅 美代子

路地裏の情け溢れる井戸つるべ

健康を信じていたい爪の色

悪友の見舞は薬にも勝り

鳴門市 八木 芳 水

悔いは無い事にしておく銅メダル

つゆくさも畑にあつて嫌われる

勉強になったと負けの捨て科白

高知県 桑名 孝 雄

粉飾をしても財布は重からず

負け犬がキャンキャン吠えるデモの列

休肝と不眠男が揺れている

倉敷市 森本 文 子

老いて行く足を叱っている帽子

夫婦味染み出す年に夫は無く

極楽を予約してから軽い靴

宇部市 中田 忠 夫

メニューにはなかった母の煮ころがし

ハワイまで行って甲羅を干して来る

その先を問われ古傷痛み出し

姫路市 服部 一典

仕方なく看ている妻に感謝され

人生の余白は妻を看る羽目に

通販を嫌い買って積んでおく

兵庫県 広瀬 房江

裸一貫父の自慢はもう聞けぬ

初生りの西瓜供える朝の幸

打たせ湯で心のコリも打ち流し

篠山市 谷田 多美子

とれとれの孫の免許でスーイスイ

産声をばあちゃんと待つ若いパパ

屋根修理出来て雨待つ晴れマーク

兵庫県 北川 とみ子

口笛を吹いて配った恋の花

口車欲の深さに火傷する

平凡を倅せとする赤い糸

和歌山市 福重 美子

突き刺さるような豪雨に起こされる

原爆を知らぬ子等継ぐ祭礼日

筆不精時機の逃げ足早いこと

和歌山県 杉山 精子

糖衣錠十一粒は多すぎる

白桃の香り香水よりすてき

古文書を開くと文字が深呼吸

和歌山県 中村 君枝

法案可決日の丸売りが戸を叩く

魂胆を見ぬかかっている間の悪さ

花だった無理頼まれていた頃は

京都府 前上 英一

ゆっくりと回る時計を持つ余生

自分史のあちこちにある崖崩れ

ふるりの駅から外すサングラス

京都市 高村 吉之助

本音吐きビクともしない歳になり

二人してビール一本喜寿八十路

花鳥の撒水歳を言わせない

奈良市 多田 美和子

ありがとうと言った母はもういない

アルバムの母はいつでも若いまま

母の手をひいて登った清水坂

滋賀県 中 宗明

パン食のリズムに馴れた新世帯

好きな娘の噂話に耳澄ます

足早に四季過ぎてゆく古希の年

三重県 佐々木 森哉

恋人と濡れたあの日へ還る雨

薔薇の棘 ハートに恋の傷がある

こころを癒す森のみどりの子守唄

鳥取市 河田のり代  
早起きも鮎に釣られて楽楽と  
出しゃばりなスクープ合戦人を裂く

鳥取市 岡田信恵

言い張って心ズズキ荒れている  
母親を無視する息子俺は俺

鳥取市 宮脇道子

山の墓命をくれた父母眠る  
聞き上手 腹におさめて頼もしい

鳥取市 竹森富久江

言伝は福も憂いも連れてくる  
頂上に登れる道を刈ってやり

鳥取市 松川行男

般若湯どんな効きめか宿坊へ  
長男に嫁ぎ仏もほっとする

島根県 松本聖子

早く早く忘れぬうちにメモせねば  
もつれては解けもつれてはの人生よ

横浜市 小野句多留

返し終え四角い顔が丸くなり  
名犬もエゴの犠牲で野良になり

横浜市 近藤道子

歳時記をきちんとこなす母がいる  
ライバルといっしょ背骨がピンとなる

(後藤志津香・不破仁緑・河津正治・松浦登志子・城多喜・藤山太郎・松村輝夫・岩崎和女八氏の句は53ページに掲載してあります)

横浜市 金森徳三  
デパートでトイレを借りて小売店  
採血は苦手静脈逃げかくれ

静岡市 中西雅

父の日はお花と線香あげるだけ  
指先のない軍手で草むしり

浜松市 岡本まち

肩すかしくって浮世の風を知り  
話し下手 頷く人の目をとらえ

檀原市 西本保夫

支払いもポンポン払う気持ちよき  
支払いが終れば誰もやって来ず

奈良市 田中賢治

御仏も手足伸ばせる大文字  
五千歩で汗を拭き拭きもう帰ろ

和歌山市 和田美寿子

老いてなおいろんなものにチャレンジを  
粗品でも もらえる時は笑顔でる

和歌山市 上地忍

大海を泣かして小鰻持ち帰る  
老犬も節つけて鳴く昼下がり

田辺市 大峠可動

天国も地獄も法華蜘蛛の糸  
蟬時雨わあわあ頭上音楽会

平成十一年度 路郎賞



和歌山市

川上富湖

プロポーズ君を終身刑に処す

ストローの穴に詰まった好奇心

コスモスになりたい刺を抜いてみる

輪の中に人数よりも多い耳

バレンタイン今日限定のコントだよ

文学の少し手前で売れている

やわらかい要塞を持つオムライス

終電車明日がソロリと降りて来る

昭和五十六年に亡父十郎が路郎賞を受賞しましたが、まさか父娘で同じ栄に浴するとは夢にも思いませんでした。先日、十二年間飼っていた愛犬を亡くし、茫然とした日々を送っておりましたので、この度の吉報は何よりの特効薬になりました。川柳の道へと導いてくれた父に改めて感謝したいと思います。有難うございました。

柳歴

昭和四十五年

川柳を始める

昭和五十三年

川柳塔賞準優秀作受賞

平成八年

川柳塔社同人

平成十年

オール川柳賞大賞受賞

川柳塔わかやま吟社同人

準優秀作

弘前市 高瀬霜石

青空が「進め」と手旗振っている

働けるこの手に感謝手を洗う

宿題が続く子の旅父の旅

くたびれた旗だが風を待っている

日本晴れよきライバルに巡り合う

老母が待つ芋の煮ころがしが待つ

いちにちに一ミリ虹を織っている

丸木橋生まれる時も死ぬ時も

準優秀作

吹田市 山本希久子

ロボットの腕に介護をされそうだ

微熱つづく未練を少し溜め過ぎた

誤解されたまま紅葉はまっさかり

仏壇の裏に答えはきつとある

人恋し女の駅に灯をともし

全身で笑ってくれる赤ちゃんよ

男と女どこまで続くかくれんぼ

切り札のエースはないが負けられぬ

平成十一年度 川柳塔賞



横浜市

和泉 あかり

歯を磨く美味しいものが食べたくて

ときどきは自分のために手を叩く

指切りをしようと土筆伸びてくる

灯を消すと厨の浅蜷はなしだす

丁寧に蜜柑を剥いて聞き上手

背くらべしたどんぐりのかすり傷

一坪の庭に見飽きぬ秋がある

仏さまになって大事にされている

この度川柳塔賞を頂き、夢のようと言うのは、こういう事かと感激しております。サラ川を読んでから始めた私は、先生の笑い皺を増やしながら勉強して参りました。いつもあたたかく接して下さる先生、諸先輩、柳友の皆様にもお礼申し上げます。これからもよろしくご指導下さいませ。心から川柳塔賞を有難うございました。

柳歴

平成八年八月

横浜あおば勉強会入会

平成九年四月

川柳塔社誌友  
横浜川柳作家賞

準優秀作 第一席

尼崎市 田 辺 鹿 太

体臭を失くした父の日向ぼこ

無駄骨と知りつつ天に吠えてみる

霊園の待合室で見る夕陽

閑居して妻と欠伸をうつし合う

栄転のたびに遠のく子との距離

飽食の裁きを受ける皮下脂肪

毒のあるアンタ毒消しや要らんかね

ブランコで身の振り方を考える

準優秀作 第二席

富田林市 大 橋 鐘 造

聞き上手腹の底まで喋らせる

真っ直ぐに歩いて風に笑われる

エレベーター互いにそっぽ向く他人

有頂天壁の厚さをまだ知らぬ

お互いにとぼけ上手で回る独楽

炎を抱いて女になっていく少女

相づちを打って相手を確かめる

遮断機の向こうも仮面つけている

# 受賞おめでとう

橘 高 薫 風

今年一賞の選考方法を変えることにしましたのは、一句一発での決定は如何にも射幸的でありますのと、中間発表までは佳句が選出されるものの、最終推薦句は質の低下が常で代々の主幹の悩みでありました。そこで時代の流れもあり、選考方法を作品群を対象にする合理的な試みを実施したのでです。

二賞の投票制は公平な結果が出ましたが、第一次選で洩れた作品に佳作がありました。

路郎賞、川柳塔賞をはじめ各賞受賞の方達おめでとうございます。ご精進の結果です。

ただ私は西出楓楽、山本希久子、奥田みつ子の編集スタッフが揃っていて、お手盛りの感のするのが気になります、お力でしょう。

川柳塔の総意を寄せて慎重審査した作品ですから、受賞作品には川柳塔色が出ています。

それらのアピールで明日への作句に資して頂きたく思っています。

受賞者の皆さん、川柳塔まつりの当日には是非ご出席下さい。

## 二賞選考経緯

選考委員長 高須賀金太

締切日の8月15日(今年の日曜日のため16日)までに事務所に到着した応募用紙を、17日に第一次選者七名中(岳人副理事長は止むを得ぬ事情で欠席)六名で、無作為に振り分け各賞を数十編に粗選りし、さらに各二〇編に絞り込みました。その際、第一次選者の応募句は選からはずしました。なお応募総数は路郎賞(川柳塔欄)二五五編、川柳塔賞(水煙抄欄)一一三編でした。

選ばれた各二〇編は、作者名を伏せて①から②③まで番号を打ってコピーをし、第一次選者(七名)と各地の第二次選者(二五名)計三二名に郵送、一位から五位まで五編の番号を同封のハガキで返送して頂きました。

集まったハガキを、一位―5点、二位―4点、三位―3点、四位―2点、五位―1点として集計、路郎賞・川柳塔賞と各準優秀作二編ずつが決定しました。

整理をしていて感じたことは、締切り後に到着したり、他人の句を8句推薦したり、六か月以上出句していないのに応募されたたり、川柳塔・水煙抄欄以外の入選句が混じっていたり、誌上に発表された句を訂正して応募さ

れた方など、規定に反する作品が見受けられたのは誠に残念なことです。

次回からは、このようなことのないようにお願いたします。なお、初めての二賞選考改定で、反省すべき点多々あり、みなさんの建設的な御意見をお待ち申し上げます。

## 二賞選考委員

第一次選者(七名)

橘高薫風 河内天笑 宮口笛生 板尾岳人  
西出楓楽 高須賀金太 奥田みつ子

第二次選者(三十二名)

本社関係 第一次選者と同じ  
地方関係 (東北) 波多野五楽庵

(関東) 菱田満秋 (北陸) 舟渡杏花  
(京都) 都倉求芽 (奈良) 中原比呂志  
(和歌山) 牛尾緑良 桜井千秀

(大阪) 神夏磯典子 川島諷云児  
高杉鬼遊 田中正坊 芳地裡村

(兵庫) 黒川紫香 遠山可住  
(岡山) 濱野奇童 (広島) 小島蘭幸

(鳥取) 小林由多香 土橋螢 林荒介  
(島根) 尼れいじ 藤井明朗

(香川) 木村あきら (愛媛) 月原宵明  
(唐津) 仁部四郎 (熊本) 永田俊子

# 二賞候補作家

(応募総数 路郎賞 255編 川柳塔賞 123編)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	広島県 藤解 静風	米子市 鷺見 正子	唐津市 仁部 四郎	島根県 松本 文子	岡山県 矢内 寿恵子	鳥取市 岸本 宏章	宇部市 平田 実男	岸和田市 田中 文時	鳥取県 新家 完司	広島市 森田 文	枚方市 海老池 洋	大山市 早川 盛夫	竹原市 小島 蘭幸	吹田市 山本 希久子	弘前市 高瀬 霜石	枚方市 前 たもつ	和歌山市 川上 富湖	堺市 桑原 道夫	富山市 酒井 輝	横浜市 菱田 満秋
川柳塔賞	尼崎市 田辺 鹿太	羽曳野市 徳山 みつこ	島根県 福岡 博利	出雲市 岡 あきら	秋田県 湊 修水	綾部市 藤田 芳郎	笑面市 唐住 実	富田林市 大橋 鐘造	羽曳野市 森田 四三郎	川崎市 和泉 あかり	岸和田市 木村 正剛	東大阪市 北村 賢子	高知県 百田 幸	堺市 矢倉 五月	横浜市 山梨 雅子	横浜市 伊藤 ふみ	横浜市 田中 笑子	八王子市 井上京一郎	羽曳野市 川口 信子	和歌山市 吉村 さち子

## 二賞選考規定 (要約)

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から8句  
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から8句  
毎年度9月号から翌年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月15日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長(2)編集長・選考委員長の七名で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席、第二席、第三席、第四席、第五席の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者 本社関係 第一次選者と同じ  
地方関係
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社

# 路 郎 賞 得 点 表

作 家 選 者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高 薫風												1	4				3	5	2	
河内 天笑		1				4						5	3				2			
宮口 笛生	5						4				3		2	1						
板尾 岳人	3	2	4											1			5			
西出 楓楽									5						4	3	1	2		
高須賀金太	5								4						3		1			2
奥田みつ子				1					5				4				3			2
波多野 五楽庵				3					5			1			2		4			
菱田 満秋						1	3							2			4		5	
舟渡 杏花					1				5				4		2		3			
都倉 求芽	3								4	5			2	1						
中原比呂志									5			1	4				3		2	
牛尾 緑良		4										1		3	2		5			
桜井 千秀		5				1	4								2		3			
神夏磯典子								2	4					3			5			1
川島颯云児											4	3		5	1		2			
高杉 鬼遊	2	5						1						4						3
田中 正坊									3	2					5		1			4
芳地 狸村					4	3	5						1	2						
黒川 紫香		1				5				3	2			4						
遠山 可住				2		1								4	5		3			
濱野 奇童					2									4	5		3		1	
小島 蘭幸				4					2			1					3	5		
小林由多香						4			1					2			5		3	
土橋 螢		4	2											1	5		3			
林 荒介	3	5								1					4		2			
尼 れいじ		2		1					4					3			5			
藤井 明朗			2											5		3	4			1
木村あきら				2	3	1						4			5					
月原 宵明					4	2	3					1								5
仁部 四郎		3						5						2	1		4			
永田 俊子					1	2								4	5		3			
計	21	32	8	13	15	24	19	8	47	11	9	18	24	51	51	6	80	12	13	18

## 川柳塔賞得点表

選者	作家																			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高 薫風	3						2	1		5								4		
河内 天笑		2						3										5	4	1
宮口 笛生		5			4					3		2								1
板尾 岳人						5		4						3					1	2
西出 楓楽						5				4						1			3	2
高須賀金太	5		2		4								3					1		
奥田みつ子	2				1	5				3								4		
波多野 五楽庵								1		3							4	2		5
菱田 満秋										5		1			3	2	4			
舟渡 杏花		4				3		2			1									5
都倉 求芽	5		1							4				3						2
中原比呂志						5				4				3			2			1
牛尾 緑良										2				1		3			5	4
桜井 千秀	4			3				5						2					1	
神夏磯典子								3		4		2			1					5
川島諷云児	2					4				3				5						1
高杉 鬼遊					5		3		4		2									1
田中 正坊	3	4				5												2		1
芳地 狸村				1				5						2	3			4		
黒川 紫香	5		3										4		1	2				
遠山 可住					1	4				5				2					3	
濱野 奇童	5				4			2		3							1			
小島 蘭幸	4									3							2	1		5
小林由多香	1				3			4		2									5	
土橋 螢		4	2							5				1				3		
林 荒介	5							2		4				3			1			
尼 れいじ	1							5		4		2							3	
藤井 明朗	3			2				5					4		1					
木村あきら								4		5	3		2							1
月原 宵明	4							3				5						1		2
仁部 四郎		5		4			2	1												3
永田 俊子	2					1								5					3	4
計	54	24	8	10	22	37	7	50	4	71	6	19	13	27	7	6	23	18	28	46

受賞作品

あきる野市 佐藤季穎



佐藤季穎

体形に似ず小心者の私が、川柳を学ぶことに気兼ねも遠慮もいらぬと心にきめて渺湖抄の部屋をノックしました。個性あふれた部屋の中で、たくさん刺激を頂き感謝の気持ちでいっぱいでございます。思いもかけぬ受賞のお知らせを頂き胸が苦しくなりました。これからもよろしくご指導をお願い申し上げます。

柳歴  
 平成三年 NHK学園川柳講座受講  
 平成四年 NHKばらばら川柳会同人  
 平成六年 川柳塔社誌友  
 平成十年 柳都川柳社同人

水仙の目線たどると海に着く  
 忍耐は真夏のガラスほどでなし  
 日常を手許において老いてゆく  
 朝顔のリズムで皿に目玉焼き  
 備忘録に私の名前かいておく

評 佐藤季穎さんの表現は練絹のように光沢があります。目線は常に高く、日常をいとしんで書かれる念が届くのです。奥田みつ子さん。編集という手の抜けない重責の中からの作品は自分の内面を抉りあげて切々と響いてきます。  
 三宅保州さん。透明な重量感には文句なく圧倒されました。  
 川本畔さんの「書き出し」の一句だけでも賞に充分だと思います。  
 小池しげおさん。いつも思うのですがシャイな感覚がいいです。  
 森 茜さんの怖いことをしめっぽくなく声のある句が好きです。  
 新井朋子さんの作品は新鮮な果実の香り。知恵のある果実です。とにかく真剣に渡り合った選でした。有難いです。(八木 千代)

準賞作品

西宮市 奥田みつ子

空は公平 一人に青いわけじゃない  
 満月に見てもらったわたしの尻尾  
 自分には見えない顔をいつも曝して

佳作

滝壺を思わず如きクリスタル  
 真実はどうあろうとも逆さ富士  
 書き出しは春を大事にする手紙  
 仰ぎ見る満天の星 そして罪  
 行間の隙間に電話してみよう  
 負け方を知った男の手の置き場  
 掌をぱつと開くとみなみ風  
 切ないよおんぶおおげが目を覚ます  
 大好きよ明日が歪んでしまうほど  
 好きか嫌いかグレイゾーンなら要らぬ

三宅 保州  
 川本 畔  
 小池 しげお  
 森 茜  
 新井 朋子

受賞作品

富田林市 藤田泰子

咲く前の庭でいちばん美しい  
欲を抱く瞳は生き生きと光ってる  
マンネリ of 回転木馬で落着ける  
耐え忍ぶそんな言葉も死語となり  
色褪せてやっと私の掌になじむ

評 選考にあたり、これまでの句を全て見直し、再評価しました。この一年間の泰子さんと富湖さんのせり合いは、選者自身も最後まではらはら続きでした。最終結果は、二カ月間迷いに迷い、考えに考えた末のことです。泰子さんの、肩に力を入れず、ころを自由に遊ばせて居られる点を評価しました。次点の富湖さんの句のセンス、特に言葉遣いの巧みさは天性のものと思います。皆様の一年間の御投句、心から感謝致します。(西出 楓葉)



藤田泰子

川柳は私の分身、この我儘な分身をおおらかに受けとめていただいた諸先生、そしてお友達、唯々感謝あるのみです。これからも晴れた日には晴れの句を、雨の日には雨の句を、「大空のころ」で育てていきたいと思っています。マイペースの私に身に余る賞をありがとうございます。とてもうれしい事でした。

柳歴  
昭和五十四年 川柳塔誌友  
平成 四年 銀河系賞受賞  
平成 九年 茴香の花準賞  
平成 十一年 全日本川柳誌上大会  
NHK会長賞受賞

準賞作品

和歌山市 川上富湖

ロスタイム下さい羽根が開きそう  
吐き出してときどき確かめる心  
少し削って私サイズの夢にする  
懸命に幸せ芝居する出窓  
毒のない男と退屈な話

米子市 政岡 日枝子

体温に合わせた今日のプログラム  
生きもののように汚れる台所

熊本市 永田 俊子

遠い日が青葉若葉の奥にある  
かくし針上手に夫立てている

受賞作品

海南市 三宅 保州

器より大きな欲を盛りたがる

評 人間の欲のきりのなさをさらりと詠まれてああ生きていられると思いました。器の容量は決まっているのにね。溢れた分はどうしましょうか。

準賞作品(一) 遠くから全景を見てこそその句。  
準賞作品(二) 最近の心もとない世相がきびしい。

(高田美代子)

自分自身どれ程の器であるかは略分っている筈なのに、もう一方では過大評価してしまう。でもそれであつてこそ進歩があり、やがて大きな器の顔になっていくものだと思います。準賞の洋さんの句、思わず頷いてしまいました。あずまさんの句、今の世相の哀感をユーモラスに表現されました。

(西口いわゑ)



三宅 保州

もう一つの人生として、川柳を続けて来て良かったとつくづく思う、望外の喜びです。一路集(課題吟)には、十数年間一回も欠かさず投句し、本社句会も仕事をサボつて?出席して来た努力が報われた思いで一杯です。これでまた、川柳がやめられなくなりました。喜びと感謝に尽きる一路賞 保州 ありがとうございます。

準賞作品

枚方市 海老池 洋

近すぎて山の姿が分からない

岐阜市 平野 あずま

連休の半ば会社を見に出かけ

候補作品

雪の白ほどの轍は望めない 小林 妻子

雛さまのざわめきがする箱の中 島 ひかる

釘の位置変えて少年変声期 土橋 螢

金屏風背に長生きをほめられる 竹治ちかし

柳 歴

昭和五十九年 川柳をはじめ

昭和六十二年 川柳塔社同人

平成三年 三幸川柳教室副主幹

平成六年 竜神村公民館川柳サ-

クル講師

受賞作品

大阪市 西出 楓 楽

古傷は何度なめてもほろ苦し

評 時の流れの中に捨てて来たはずの心の傷は決して風化するものではなかった。「ほろ苦し」の五文字に過去と現在を往復する心の動きがみごとに詠まれている。準賞、候補作品ともに鑑賞者を立ち止まらせる味わいのある句で、優秀つけ難いものであった。(川上 大輪) 句を中心に選ぶのは当然として、同人、誌友に拘らず地域的に偏らないようにと心がけました。全部の作品、いずれも平明な中にも真実味があります。特に受賞句はすらりと覚えて、口誦性もあり共感をおぼえる句。癒やされぬ古傷は誰もが持つものです。

(山本希久子)



西出 楓 楽

星の数ほどある、と言っても過言でない各地柳壇の句の中から選ばれた喜びは、筆舌に尽せません。この句は研究会として運営している「サークル檸檬」で発表したもので、うれしさも一入です。十年十二月号で佳句地十選に選んで下さった米田幸子さん、最終選者のお二人に心から感謝して、この栄を受けさせていただきます。

準賞作品

鳥取市 福 永 ひかり

縁の下言いたいことはたとある

和歌山市 水 田 秀 男

泥んこになっても守るものがある

候補作品

砂時計 余分な刻は計らない 菱田 満秋

無事な顔見れば小言が二つ三つ 安芸田 泰子

善悪を混ぜ凡人として生きる 春城 武庫坊

ノーベル賞狙ってみるか晩学で 牧野 芳光

柳 歴

昭和五十四年三月 誌友

昭和五十五年九月 同人

昭和五十九年度路郎賞準優秀作第一席

平成六年度 茴香の花賞

現在 南大阪句会 翠洋会

サークル檸檬

所属

# 沙湖抄

八木千代選

引く波の呼吸が足の裏にあり

ニアミスを避けて紙風船になる

入館料 道はずかに掃いてあり

大花火こんな出合いをして別れ

似た者を待つコンビニの自動ドア

レモンにも疵わたしにも傷 似て非なり

斜めうしろ辺りに感じとる殺気

幸不幸 仕切る扉が開いている

無言電話 風も迷っているらしい

北風を産んで漸く母となり

火が消えた人たしかめて火にくべる

カンナの花が咲くまで笛をふいている

錯覚も又よし老母と剣く白桃

愛憎へ ただ一行の蟬のうた

にんげんは哀し犬の居る家猫のいる家

凭れたい時もあろうに杉木立

いつまでの女だったか水鏡

日の丸を洗って土用干しをする

「君が代」のホネが抜けない喉仏

足の裏から根が伸びている現住所

鳥取県 上田 宣子

富田林市 池 森子

あきる野市 佐藤 季穎

鳥取県 鈴木 公弘

同

西宮市 奥田みつ子

海南市 三宅 保州

出雲市 竹治ちかし

寝屋川市 森 茜

米子市 政岡日枝子

鳥取県 新家 完司

松江市 川本 畔

西宮市 牧瀬富喜子

和歌山市 古久保和子

鳥根県 松本 文字

藤井寺市 高田美代子

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取県 乾 隆風

唐津市 樋口 輝夫

和歌山市 榎原 公子

思う壺だろうか前に置いてある  
抽き出しをぐちゃぐちゃにして生きのびる

自分を許し底の無い沼に落ち

バラ園の掟で隣と距離を置く

二人三脚 紐はいつでも解けます

虫籠のなかで死ぬ虫飼っている

いっしんに振ろうちっぽけなしっぽ

壁がだんだん汚れてなぜかほつとする

空っぽの壺が何やら叫び出す

忘れない事忘れないこと秋の中

介護保険 古い茫々とあるばかり

主役の感動がわたくしにも移る

小さな旗振っているのに気づかれず

寝返りを打って一腑をととのえる

鍋二つうどんの出汁とそばの出汁

やや左歩いた自負を持っている

父の日の一番星が父である

新聞を広げて何も読んでない

夏が来て表紙をちよつと変えてみる

ドナーにはなれぬ臓器に耐えている

入道雲 男は弱くなりました

羽化という神の魔術の幕があく

戻るものもどらなくなる崖つぶち

過疎にきてさてもカタカナ語に出逢う

その時に使う写真がまだ撮れぬ

本当の私を探す火をかざす

和歌山市 桜井 千秀

横浜市 豊田 羊子

鳥取県 岩崎みさ江

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 牛尾 緑良

和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 福井 桂香

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 川上 富湖

吹田市 山本希久子

弘前市 佐治千加子

藤井寺市 太田扶美代

横浜市 清水 潮華

米子市 白根 ふみ

唐津市 仁部 四郎

愛媛県 中居 善信

綾部市 藤田 芳郎

和歌山市 川上 大輪

米子市 鷺見 正子

唐津市 井上 勝視

松原市 小池しげお

砂川市 大橋 政良

岡山県 小林 妻子

横浜市 菱田 満秋

寝屋川市 岸野あやめ

岡山県 山本 玉恵

自由化に負けてたまるかりんご達

梯子段の真ん中程に腰据える

ひまわりの優越感に逆らわず

あんだなだ互いに言われぬように

寝たきりの涙は頬を伝わらぬ

器から溢れた欲で身を汚し

逃けたがる明日の風の証明書

一滴ずつを大事に水ぐるま

神さまも正しい答出してない

大切なひとの煙草の量が増え

振り向けば育った海が見えて来る

八月の蟬の涙を見たか君

日の丸のしわをだまってるばす祖父

自画像はすこしやつれて描いておく

愛された借りを小出しにして返す

許すのが少しおくれた置き手紙

窓際の席で喜劇がよく見える

ものけも僕もやっぱり夜が好き

トラブル守る境界線ほどのあたり

貧しさに笑顔失くせば負けになる

人も樹も節目に滲むものがたり

きれいな事ばかりですまぬ介護法

誠意には誠意で返す花の種

散ることを知らぬ造花になりたがる

夕焼けよノストラダムス茶毘に付す

噴火中の火口はのぞかないことだ

弘前市 齊藤 嘉

倉吉市 野口 節子

羽曳野市 田中 透太

西宮市 西口いわゑ

寝屋川市 太田とし子

大阪市 本間満津子

弘前市 一戸 ツネ

鳥取県 土橋はるお

大山市 早川 盛夫

鳥取県 石谷美恵子

河内長野市 植村 喜代

三重県 佐々木森哉

寝屋川市 江口 度

八尾市 高橋 夕花

西宮市 門谷たす子

横浜市 金森 徳三

富田林市 大橋 鐘造

倉吉市 米田 幸子

貝塚市 池田寿美子

米子市 茂理 高代

鳥取市 徳田ひろこ

米子市 青戸 田鶴

尼崎市 長浜 澄子

枚方市 寺川 弘一

唐津市 久保 正剣

羽曳野市 徳山みつこ

鏝広の帽子でかくしているマグマ

色鉛筆隠せる色を探して

まだやる気たくさん入れてある袋

のし袋跳ねて太郎に嫁が来る

富士登頂この脚捨てたものじゃない

大風呂敷に飾った私包んでも

人騙す言葉は知らぬ坊主

哀しみをよろこびにする盆の月

カルチャーは充電のよう放電のよう

三男が時々飛ばす紙つづ

まとも終わると一口はさむ鬼がいる

昔みた夢をみている蚊帳の中

敗北の北に馴染めぬ北の人

画廊から出ると火種は消えていた

僕に夢食われてからの高いびき

熱帯夜 今夜は何を数えよう

賞味切れ 二日位はいいだろう

ちっぽけな親切に要るエネルギー

店仕舞 九谷の色のがなし

老人力本人だけがその気です

結んで開いて指切りが熱くなる

良い耳の形で秋を待っている

すれすれのところで女に試される

笑ってる顔が映らぬ窓の闇

遺言が口癖になる独りぼち

年寄の指にスイツチ多すぎる

和歌山市 楠見 章子

大阪市 神夏磯典子

米子市 足立由美子

和歌山市 田中 みね

横浜市 川島 良子

枚方市 海老池 洋

米子市 林 瑞枝

鳥取県 土橋 螢

堺市 志田 千代

米子市 石垣 花子

尼崎市 春城武庫坊

鳥取県 さえきやえ

青森市 漆戸凡々子

美祿市 安平次弘道

兵庫県 大谷幸次郎

横浜市 田中 笑子

大和高田市 鍛原 千里

和歌山市 上地登美代

東京都 後藤 早智

大宮市 八田 敏

富田林市 中井 アキ

大阪市 川久保睦子

松原市 玉置 重人

弘前市 福士 慕情

大阪市 津守 柳伸

岡山県 矢内寿恵子

年の差が親子の鉦かけ違え  
 空っぽのだるまを埋める少しずつ  
 老い笑い子供うつろな目目目目  
 浄土からみんなお帰りお迎え火  
 お花畠 きつとありそう万歩計  
 逆玉になると信じて葱坊主  
 桃源郷のはなしになった桃の味  
 孫抱いた翁は日本一の貌  
 手の平に乗る幸せでいいのです  
 魂がぬけそうホツとする夜空  
 柁目だけ選った積木にある脆さ  
 黙して茶 夫婦喧嘩はなお続く  
 直情のグラジオラスにある想い  
 美しい明かりにユダの影無数  
 原石を磨けば光る自負がある  
 氣付かねばいつか忘れる波の音  
 幸せと言うだまし絵をかき続け  
 とび魚を法螺だと言った深海魚  
 意識して整理している身の回り  
 傘寿来て満身創痍 恥晒す  
 無花果に故郷の話ばかりする  
 あわあわと雲が流れて秋の山  
 悪い人が罰もあたらず生きている  
 棒引きにするとなにやら考える  
 どこからかかずかずか入ってきた悩み  
 整形をして整形にみつめられ

唐津市 相葉 あき  
 和歌山市 武本 碧  
 鳥取県 谷口 次男  
 和歌山市 福本 英子  
 鳥取県 田村きみ子  
 今治市 野村 京子  
 寝屋川市 籠島 恵子  
 香川県 木村あきら  
 寝屋川市 坂上 高栄  
 鳥取県 土橋 睦子  
 泉佐野市 稲葉 洋  
 鳥取市 坂田和歌子  
 和泉市 中川 楓  
 日立市 加藤 権悟  
 和歌山市 玉置 当代  
 倉吉市 牧野 芳光  
 横浜市 近藤 道子  
 倉吉市 松本よしえ  
 大阪市 北 勝美  
 高槻市 乙倉 武史  
 鳥取市 春木圭一郎  
 京都市 都倉 求芽  
 島根県 伊藤 寿美  
 香川県 松村 輝夫  
 鳥取県 西原 艶子  
 堺市 桜沢 千世

決意するまでは何度も靴を脱ぎ  
 ごめんなさい先に言われて怒れない  
 じわりじわり歪む地球儀世界地図  
 ぐちゃぐちゃと豆腐をつぶす今日の鬱  
 ドクダミ茶買ってドクダミ刈り捨てる  
 トイレには一番好きなタオル掛け  
 一か八 掴んだ薬に救われる  
 追伸にもうこれ以上書けません  
 シナリオの泣かせ所に来る笑い  
 結論は肩を叩いた手の温み  
 このところ夫が気をもむ派手作り  
 作業服と軍手が父の外出着  
 無器用な父のジョークで笑えない  
 ジャンケンでなつた会長とは言わず  
 鉦じゃんじゃん叩いてしまふ喋り過ぎ  
 洗面の音に個性のある家族  
 蟬り一氣に流す通り雨  
 上田宣子さんの呼吸は足を伝わり、裏にも意識させて脳に歩めて  
 強い波を起こすのですね。名人のすり足もその呼吸を捉えて改めて  
 芸を大きく見せてくれるのですね。引く波を頭ではなく足の裏だと  
 書いて下さったことに真実を感じました。引く波には天体の意志が  
 あります。池森子さんの紙風船は自然体に見えます。ところが此の  
 風船は無軌道ではなく流されることも逆らう事もあります。頼む  
 のは自力のみです。自分を見失わないで紙風船に委身する術を身に  
 つけたいとの願いとみました。佐藤季頼さんの入館料は重いですね。  
 「道が掃いてあり」と相乗作用して普通のことばなのに置き場所を  
 選ぶことで、えもいわれぬほど香り立ってきます。

弘前市 相馬 銀波  
 貝塚市 吉道 時子  
 莒面市 岩津ようじ  
 枚方市 前 たもつ  
 黒石市 相馬 一花  
 八王子市 播本 充子  
 和歌山市 青枝 鉄治  
 尼崎市 田辺 鹿太  
 岸和田市 宮野みつ江  
 川西市 松本ただし  
 鳥取市 岸本 孝子  
 唐津市 市丸 晴翠  
 札幌市 三浦 強一  
 宇部市 平田 実男  
 弘前市 蒔苗 果林  
 和歌山県 村中 悦男  
 横浜市 保田 絹子

刑法学者としても、古川柳研究者としても一代の権威であった三面子岡田朝太郎博士が昭和十一年十一月十三日、相州葉山の自邸に於て溘焉として長逝された。行年六十有九歳、法名は法性院釋朝樂居士。

古川畑では曩に今井卯木、武笠山椒両氏を喪い、次いで西原柳雨翁に告別し、今又岡田三面子先生の訃に遇うことは、川柳を体系づける上に於ての一大痛恨事である。

殊に博士の該博なる知識と不屈不撓の研鑽に俟つところの多い柳界に於て博士の永眠は何ものにも代え難い損失と言わねばならない。日本随一の柳書の藏書家であつて、しかもこれを自他のために活用し、活用せしめられたことは川柳に生くる者の牢記して謝思すべきであらう。故西原柳雨翁の編著になる大部の柳書の素材と、これが指導は殆んど博士の川柳愛に依る好意だと言つても敢て過言ではなからう。柳雨翁の研究上の指導と補遺、柳書上梓の斡旋、生活上直接間接の後援、それ等々を思ふとき、博士の人格の如何に高潔であ

つたかは想像するに難くない。由来学者は、真理に没頭するため頭の冷徹さが自然人情味に欠陥を来たすものであるが、ひとり岡田博士に於ては人情味豊にして機宜に適した処断に出で、法の真精神を活かされた点、人間三面子の全貌に触れた感がある。

その一二の例を挙げて見よう。

孫文の中華同盟会に参加した汪兆銘が肅親王暗殺を企てて捕えられたとき、時の司法大臣はその処置について博士に相談があつた。博士は「死刑に処するよりいつそ逃がせ、処刑にすれば騒ぎが大きくなる。逃げたものは仕方がないと言ふことで済むから」と言われた。そして博士の意見が用いられ後年汪氏は政界の大立物となつた。刑法学者の博士にこの味うべき言葉のあつたことは甚だ面白い。これに反し自己に対しては厳として法の侵すべからざる精神を以てのぞまれ、法の文字以上の責任を果されている。

その例として博士は令息三男の事業失敗に依る多額の負債を敢然として引受けられ一法

律的には親は独立した息子の債務弁済の義務はないが一月々これが償還に努められた。その義理堅い道義観には博士を知る限りの人々は讚嘆して止まない。(中略)

私がこの九月の中旬に上京して真つ先に訪問したのが明大の岡田博士であつたが、既に病を得て帝大の呉内科へ入院、面会を謝絶されているのであつた。単にお見舞状にとどめ所用を果して掃阪したところ、葉書を寄せられた。このはがきの表書には、東京帝大病院 呉内科、七月廿六日 岡田三面子 とあるが、本郷局のスタンプは九月二十六日となつている。九月を七月とどうして書き違えられたものか、それは不明である。

最初は喘息で苦しんでいられたさうであるが、病名は腎臓病、肝臓病、心臓病等々併発、遂に起たれなかつたのである。

まだ少し早いと聞魔苦笑い

の句を見ても、まだ死を予期されていなかっただけにこの突然の報を知つて甚だ悼惜に耐えない。博士の逸話と追憶を書けば果てしがない。謹んで瞑福を祈る。合掌

麻生 路郎

博士の主な川柳著書は『寛政改革と柳樽』

『謡曲と川柳』、『隨筆』、『虚心観』など。

『川柳雑誌』にも幾多の玉稿を寄せられた。

## 首香の芯

宮西弥生 選

絵手紙ははみ出す元氣くれました

あらゆるいのち食べて私は生きている

負けてはない相手いちまい上だった

広い駅小さく思う夏さなか

地球からこぼれそうで這っている

都合よく雲が出て来て幕となる

ユーモアが足りない自動改札機

叱られてだんだん視野が広がる

一步後歩けば楽に生きられる

帽子替えても目線きのうとかわらない

ライブルは堪える女で崩せない

じつくりと見てもピカソは謎の中

百合のむくろの哀れをそつと地に還す

やがて冬小さな嘘と生きてゆく

クローン牛の汗も光っているだろう

恋捨てたらあかんだだの木偶になる

ひまわりのあの明るさは演技かも

隠しごとなくなり味気なくいらし

寝屋川市 平松かすみ

大阪市 本間満津子

西宮市 西口いわゑ

鳥取県 西原 艶子

米子市 石垣 花子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 川上 富湖

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 上地登美代

米子市 政岡日枝子

八尾市 高橋 夕花

倉吉市 野口 節子

西宮市 門谷たず子

吹田市 山本希久子

和歌山市 福井 桂香

大和高田市 鍛原 千里

岸和田市 宮野みつ江

和歌山市 福本 英子

愛憎のあなたを置いて逝けません  
庖丁は研いだ俎の豆腐よ

向日葵のわんさわんさも暑苦し

レジの列前の籠にもいるさんま

職業欄に小さく主婦と自信なく

ライブルの摩擦避けると眠くなる

美人かな帽子を深く足早に

スイと来たたとんぼは亡父か盆の道

人生の来し方のぞく丸い文字

リズムより破壊に酔うているライブ

靴をはく過去を鏡に閉じ込めて

北帰行訣れ上手なつばめ達

従順にみえてコスモス芯があり

カマキリが必死に怒るほど可笑し

楢山へ押しつ押しされつ行きたいな

蟻んこの命軽いともいえず

私の血は採ってはくれぬ百日紅

天国にもう人間の席は無い

夫より一日長生きしなくては

政治家の電話も傍受してみたい

夢をみる背伸びは私だけのもの

隙間家具のように都会の一戸建て

老いていてもまだ欲があり死がこわい

掃除機に吸い込む昨日のわだかまり

横浜市 保田 絹子

堺市 志田 千代

和歌山市 楠見 章子

横浜市 近藤 道子

貝塚市 吉道 時子

大阪市 稲本 凡子

富田林市 片岡智恵子

西宮市 牧淵富喜子

横浜市 三村八重子

大阪市 板東 倫子

和歌山市 木本 朱夏

富田林市 藤田 泰子

八尾市 村上ミツ子

尼崎市 長浜 澄子

横浜市 伊藤 ふみ

富田林市 中井 アキ

八尾市 宮崎シマ子

鳥取県 岩崎みさ江

大阪市 神夏穂典子

寝屋川市 岸野あやめ

鳥取県 土橋 睦子

和歌山市 古久保和子

八尾市 生嶋ますみ

羽曳野市 吉川 寿美

スリリング手のひらにのせ豆腐切る  
 完璧が好きでトマトはまっ赤っか  
 ゴキブリを仕留めて続く長電話  
 好きと嫌いの狭間で女揺らされる  
 裃で蔵をひよっこり出る先祖  
 出すぎても出すぎなくてもひとの口  
 なにゆえのサポーターやら足に胼胝  
 一生涯座ったことのない案山子  
 善人の顔で待ってる交差点  
 朝顔もわたしも支柱さがして  
 モロヘイヤの粘り美人になるような  
 濡れ衣へ深目にかぶる冬帽子  
 透明になりカルチャーがせわしない  
 宝物でてていますプランター  
 凡夫婦歩幅のちがいがにせせず  
 入道雲みたくに良く怒る母  
 原稿の升目に埋めてある律儀  
 年齢記載二十歳以上と書いておく  
 成功へのプロセス逆転考える  
 逃げ道は用意してある蟹の穴  
 さよならが上手に言えた橋の上  
 向日葵の笑顔うしろはふり向かず  
 堪えながら無為と孤独にCDを聴く  
 針一本見つかるまでは寝つかれず

芦屋市 黒田 能子  
 今治市 野村 京子  
 横浜市 芦田 鈴美  
 横浜市 山下 省子  
 米子市 林 瑞枝  
 香芝市 大内 朝子  
 寝屋川市 森 茜  
 寝屋川市 太田とし子  
 鳥取市 福田 登美  
 枚方市 森本 節子  
 今治市 塩路よしみ  
 徳島県 安宅美代子  
 大阪市 津守 柳伸  
 藤井寺市 太田扶美代  
 兵庫県 北川とみ子  
 鳥取市 坂田和歌子  
 和歌山市 桜井 千秀  
 米子市 鷺見 正子  
 出雲市 園山多賀子  
 和歌山市 武本 碧  
 鳥取市 植田 一京  
 横浜市 秋元 和可  
 貝塚市 池田寿美子  
 寝屋川市 堀江 光子

巡礼の鈴は哀しい音で揺れ  
 のんびりと暮らせと医師は無理を言う  
 日本画の松は男の立ち姿  
 中傷に揺れる修行がまだ足りぬ  
 いい群れの後を必死に追っている  
 ゆっくりと舞えばゆっくり秋になる  
 エプロンを替えて中華に凝っている  
 行方不明シャボン玉にもあつた夢  
 まだ少し無理がききます百日紅  
 現役の尾っぽが切れてないとかげ  
 朝の径急ぐかの如く蟬しぐれ  
 この孫といつか話が出来るかも  
 良い返事できるはずない昼寝中  
 たっぷりと太陽吸った熟トマト

和歌山県 杉山 精子  
 和歌山市 山口三千子  
 交野市 山川日出子  
 和歌山市 吉村さち子  
 松江市 川本 晔  
 富田林市 前田 登子  
 横浜市 川島 良子  
 寝屋川市 籠島 恵子  
 羽曳野市 徳山みつこ  
 和歌山市 榎原 公子  
 大阪市 川久保睦子  
 河内長野市 植村 喜代  
 尼崎市 春城 年代  
 東大阪市 北村 賢子

かすみさんの句一格別に暑い今年の夏、かすみさんの絵手紙  
 で一層元気をもらった気がする。どんな絵手紙か見たいもの。  
 ビタミン剤として有難くいただきました。満津子さんの句「あ  
 らゆるいのち」をたべている作者の表現に力強いエネルギーを  
 感じる。生命を存続するため人間を含めてハンターとならざる  
 を得ない。自然の摂理。作者の前向きな御健吟に拍手する。い  
 わねさんの句「先を読みとった作者のストレートな素直な表現。  
 何と深いことだろう。しかし「負けではない」と自分にもエー  
 ルを贈っているところが憎い。艶子さんの句「この句をいただ  
 いた時、夏だなあ、汗がたらたら。暑さをとても上手に表現  
 している。幾万人の群衆を呑み込みはき出す大きな駅を汗が小  
 さく、小さく見せる。本当に日本の夏は暑いです。」

西

森 茜選



関西のお方と知ったアクセント  
西日だけやっとなって植木鉢  
西側にしあわせの木を植えておく  
西側へ視線集めて居る世界  
西日射す部屋で歌った神田川  
陽は西にネオンの街が活気づく  
新婚は西日の当る一間から  
西へ行くお遍路朝市通り抜け  
古い二人西陽は薄い方がよい  
追伸は書かない西へ出す手紙  
ままならぬノルマ西日がきつすぎる  
西国巡りついでに母校寄ってみる  
西暦がなじめぬ自分史の序章  
東から西へ入道雲動く  
負け犬の視野を西日が墮ちてゆく  
西高東低わたしの冬はまだ続く  
いい便り偏西風に乗ってくる  
陽は西に今日の足跡消しながら  
西の空お天気を読む勸がある  
西洋で通用しないカタカナ語  
西空があしたの鎌を研げと言っ  
西空に瞬く星は亡母だろう

東西南北どこにも友がいる強味  
大好きな人と眺めている西日  
ブランコが西日にゆれて行く西陽  
ゆっくりと明日へ落ちて行く西陽  
西も東も分かれぬ子等の塾通い  
日は西に沈む道理で妥協する  
西東のわかれはじめて迷い知る  
西域の仏の道にあるロマン  
隠れんぼ鬼に西陽の長い影  
西方へ行くのに急ぐ事もなし  
西方へ行く舟ばかり盆の海  
主義主張いつでも西を向いている  
あなた逝き浄土身近に思えます  
天気予報どうあれ西の空を見る  
荷を下ろし下ろし西へと父の貨車

シマ子 ひかる 朝子 美代子 妻子 正雄 弘一 剛治 章久 善信 久仁於 和歌子 あやめ 保州 洋

住む

山田 高夫 選



ふんわりと住んで見たいな雲の上  
住み慣れた家で平和な日が暮れる  
近く住み本家分家の遠い距離  
たまに世辞ませて和をもつ一つ屋根  
大阪のチベットの能勢に住む余生  
私を一番叱る人と住む  
魂の安住の地が見付からぬ  
本籍地背負い転勤族は住む  
水を得た魚のようにここに住む  
三代で住めば杜宅が出身地  
地ビールの美味左遷地の住み心地  
居住権返せと跳ねるむつごろう  
一人住む老母は古里出たがらぬ  
ダイオキシンのやがては地球にも住めぬ  
住みたたくと姑と住んでる訳じゃない  
風呂敷の広さに母が住んでいる  
同居して互いに瘦せた嫁姑  
排気ガス汚れた街に住み慣れる  
住み慣れた古郷捨てた裏事情  
住所録横線ばかり目立ちだす  
ご近所の声ありがたくひとり住み  
雪月花心の隅に亡母が住む

順風 さち子 久仁於 めぐみ 正雄 ちかし 省子 日枝子 扶美代 四郎 正剣 晴翠 周信 典子 正雄 勇太 みね 政良 武史 英子 美也子 たず子

路 集

髪染めて別の世界に住む息子  
住めば都窓から墓地がよく見える  
塩壺に女の性が住んでいる  
合掌のころは住んでいる仏  
本籍の島には住んだことがない  
リレーして二代で払う家に住む  
ちちははの住む浄土とはどんなところ  
老人がふたり住むには広すぎ  
家中の灯り点してひとり住む  
不便でも朝日夕日がある住まい  
波立せず金魚ゆったり鉢に住む  
Uターン一緒に住んで継ぐと言う  
住む人でこんなに違う窓明かり  
どんな人住んでいるのか高い堺  
北に住みいつも南に憧れる

佳

住む人にだんだん家の貌が似る  
無一文で浄土に移住するつもり  
地蔵の花替えてこの路地好きで住む  
住所不定の男へ貢ぐ炎の女  
大阪で天神さんも知らず住み

人

マイホーム福祉に厚い町を選ぶ  
川下に住んで川上うたがわす

天

シブシーの神を信じて野に眠る  
中山 雅城

軸

安住の地を得て深く亡父眠る

無 理

早川盛夫選



嫁ぐ娘のダンスに無理が詰めてある  
無理言ってくるのはいつも三男坊  
無理矢理に順位をつけるコンテスト  
人生をやり直しする夢を見る  
火の車なのに通わずピアノ塾  
プザー鳴るエレベーターで睨まれる  
追い越しは無理だったなあ六十路坂  
辞めさせる算段出来ぬ仕事させ  
無理強いをされたのが瓜今ととりこ  
客の無理上手にさばく年の功  
無理のないひらがなで来る母の文  
無理強いはセクハラとなる酒の席  
無い袖も振らねばならぬのし袋  
無理をした事は言わない祝い膳  
無理聞いてもらう見返り覚悟する  
二度迄は黙って聴いた友の無理  
無理だとは思いたくない絵馬を掛け  
無理矢理にさせた見合いで幸福に  
無理しても友の信用つなぎとめ  
少々の無理は聞かねばならぬ義理  
無理をして取った休暇に雨が降り  
父さんの真似せず出世しろと言う

佳

生真面目な夫にウソをつけと言う  
一本の追加で妻の無理を聞く  
三分で済むと割り込むスケジュール  
母さんが無理した分を父が呑む  
お迎えがやがてくるので無理しない

人

無理しなや無理をしなやと酒を酌ぐ  
誰のため無理してるのか終電車  
どう化けてみても若さは戻らない

天

川上大輪

軸

これ以上齢をとらねば天国さ

無理なこと言うて困らすのも愛か  
お人好し無理な仕事を背負わされ  
無理をしてかく汗やがて光り出す  
無理をした傷口または疼き出す  
美しく老いるなどは絵空ごと  
無理しても買ってやりた親ごころ  
偏差値で親子が悩む志望校  
しぶちんも可愛い顔の無理は聞く  
無理やりに剥がした傷が治らない  
点滴だ酸素だ無理に生かされる  
年金でついていけないお付き合  
一匙の愛では足りません介護  
ウエストに無理して貰う夏スボン  
矢印を外れて無理な道選ぶ

朝子 一壺 旋風 時弘 さち子 徳三 志洋 高栄 美也子 緑良 まさと 日枝子  
鉄治 一風 岳水 清史 晋 満秋 凡々子 美津子 潮華 よしみ 啓子 美代子 勇太 周信 四郎 英子 宵草 庸佑 弘一

# 初歩教室

題一 パワー

吐田公一

野村太茂津先生がその著書『点滴』（法岸寺竜太著）で、川柳の添削について「添削はあくまで主体性は作者にある。作者の真意を生かし、無駄を省き足りぬところを引き出して加える作業。作者の心になって川柳作品の歪みを直すことである。親切心からつい出しやばり過ぎて、手を入れ過ぎることを慎しまねばならない」と書いておられる。

いつもながら添削のあり方については反省の繰り返して、太茂津師が言っておられるようにゆかないのが凡夫。これからも試行錯誤の添削になるかも知れないが、少しでも初めての方のお力添えになればと頑張ります。

## 添削句

○ゴミ問題主婦のパワーに頼る町 智加恵  
原句もいいが、今問題にされているダイオキシンを採り上げると

▽ダイオキシン主婦のパワーに市も動く

○紅さして夢ふくりますパワーのゆめ タツエ  
一句の中に夢が二つも出ているし、下六で語呂も悪い。

▽残り火を燃やすパワーの紅をさす

○回転のパワー不足がひげを咬む 山平  
着想は面白い。上五を

▽充電のパワー不足がヒゲを咬む

○庭の草毎日育つこのパワー よし子  
句の中に人間を詠んで欲しい。

▽雑草のパワーが欲しい塾通い

○往年のパワーも委む六十路かな 勲  
下五が安易に流れた。

▽往年のパワーも委む足のなえ

○パワー秘め無口の彼が持つ自信 宏  
単に自信を持つというより、仕事の中の一事象（舞台装置）を捉えること

▽無口だがパワーを秘めて会議室

○雑草のパワーに負けた草むしり トキ  
雑草・草むしりとストレートすぎた。腰とすれば草むしりの意も含まれる。

▽雑草のパワーに負けた老いの腰

○妻病んで古希のパワー全開で看る 一典  
五七五の基調を外しすぎ。参考句も上七だが最近はその句には多少の字余りは許されているよ

▽パワー全開妻の病を古稀が看る

○太陽のパワーに負けそう喰う (柳) 信子  
川柳は下五が大事

▽太陽のパワーに負けぬ海の子等

○パワーアップ目指してジムで鍛える 靖雄  
パワーアップ目指すことは鍛えること

▽パワーアップ目指して老いのジム通い

○組変えは表示すべきと主婦パワー 方子  
すべきを省き明確にすれば

▽遣伝子の組変え表示へ主婦パワー

○自自公で連立組めばパワー付く 晩翠  
今の政界では連立といえは自自公。余分な言葉を省くこと

▽薄水の連立パワーでもつ政治

○雑草に生きる力を学ぶなり 篤子  
下五がしやちこばった表現

▽雑草に生きる力を教えられ

○バーゲンへウーマンパワー吐きに行く 正雄  
下五が不適切。ウーマンパワーのすごさを詠めばいい。

▽バーゲンへウーマンパワーの目がひかる

○余生まだバラ色にするパワー産む 賢  
何がパワーを産むのか具体的に

▽余生まだバラ色にする趣味パワー

○森林浴パワー一杯の深呼吸 輝夫  
中八を中七になるように工夫を凝らす。

▽森林浴パワーをもらう深呼吸

○古い忘れ命をつなぐ盆おどり 美也子

中七の句意は分るがオーバー気味。要は老いのパワーと盆おどりを生かすとすれば

▽盆おどり老いのパワーがリードする

○無理せずにパワー小出しにして使う 梓

中七の措辞はいい。惜しむらくは上五にパワー不足が感じられる。

▽老夫婦パワー小出しにして使う

○八十のパワーに押しされ道を掃く 幽雅子

▽八十のパワーに負けず道を掃く

○補聴器と眼鏡を借りてパワー出す

下八音字を少し変えてみると 春江

▽補聴器と眼鏡私のパワー生む

○あわのパワー気力爽快ビール党 トシエ

もう少し内容が欲しかった。

▽成功のジョッキ一気乾すパワー

○深夜迄高音を撒く軽二輪 賢治

説明句に終っている。

▽高音で若いパワーを吐くバイク

○ざわめきに若いパワーの入社式 志重

これから社会へ飛び出す姿を詠めば

▽張り切った若いパワーの入社式

○どん底に妻は力を発揮する

「てにをは」が大切な例

▽どん底で妻は力を発揮する

ひさ乃

▽晩酌でパワーをつける旅の宿

○食卓で読む妻にあるパワー 君江

スパイスを効かせて欲しかった。読む書くだけでパワーを浮び上がらせるのは無理ではなからうか。

▽食卓の家族へ母のパワー盛る

○バスタブ女性パワーがはち切れそう

下六を「切れる」と下五に

▽特訓に耐えてパワーと技磨く 徳三

小道具が必要

▽特訓のパワー社長に認められ

○六十五再婚の卦にパワーが出

下五が不安定 朋月

▽再婚の八卦に老いのパワー燃え

○日に万歩残るパワーを鍛えつつ

中七を推敲して欲しかった。 肋骨

▽万歩計余生のパワー燃やしつつ

○石段をかけ抜く若さ祭り山車 茂代

山車や御輿といえは祭。冗句は省く。

▽山車を曳く若さ夏夏の陽も負ける

○パワーもつストレス趣味ではね返す 禮子

上下を入れ代えてみると

▽ストレスをパワーで弾く趣味の会

○晩酌の盃に満つパワー源 章司

晩酌はパワー源では味気ない。ドラマ性を

持たせるように

▽晩酌でパワーをつける旅の宿

### 佳句

パワー生むと聞けばなんでもやってみる

夏休みパワー全開孫を待つ

照りつけるパワーが蟬に乗り移り

合格の通知にパワー更に湧き

雑草のパワーで生きた父と母

パワー全開球湯沸かす変化球

バーゲンへおはさんパワーフル回転

熟年のパワーはじける趣味の会

若者のパワーが欲しく海に行く

一瞬のパワーで決まる大相撲

献血で私のパワーお裾分け

阿波踊りパワー土産に持ち帰る

原色のパワー漲る夏の浜

子の笑顔パワー充電してくれる

アスファルト割ってパワーが顔のぞき

明日生きたるパワー頂く茜雲

(下五の見付けがいい)

ライバルのパワーを浴びて闘志湧く

(中七の措辞がいい)

席蹴ったパワーしぼんでくる夜明け

席蹴ったパワーしぼんでくる夜明け

(ドラマ性豊か)

もう古稀かいえまだ古稀ジャズダンス

(ユーモアが素晴らしい)

### 私の句

自自公のパワーの翳り待つ野党

宗明

純子

洋子

羊子

てる代

泰雄

美弥子

てる子

舞夢

五月

八重子

トヨ子

美子

セツ子

邦昭

要子

■ 句文集紹介

『ペンシル』

田中 正坊 著

安藤 寿美子

で居る。今なんとか続いている。「もくせい川柳会」の句報第一号は富子さんのおつれ合い隆さんの手書きであったし、その後暫くは正坊さんが横書きしかできぬワープロでちゃんと縦書きに打つという離れ業で仕上げた。これら「もくせい」初期の句報は私には宝物であり大切にしている。

先に『川柳カタカナ語辞典』を編集され、

『もくせい合同句集』もすべてお任せしていた月日の中で今回の『ペンシル』をお出しになったのだから、驚くほかはない。

正坊さんは本当に上手に旅をされる。これは奥様という最高の道づれがお有りになるからだと思ふ。そして旅の佳句を作って居られる。旅の句というのは、報告に過ぎなかったり、感傷過剰になったりするが、経験豊かな正坊さんの句はうまくまとめていられる。

足るを知る暮らしか包がらの老夫婦

紫電一閃 天安門を龍撃ける

兵馬俑 男はみんな戦好き

氷河湖のブルーの水に手を浸す

ガウデーの曲線やさし遊歩道

正坊さんもうわゆる、文語世代である。文語のなかの七五調と言うのは、日本人の呼吸に合っているのだとか、何かで読むか聞くかしたことが有る。日本の短詩、川柳、俳句、

短歌が七音と五音で構成されているのも、なるほどとおもうので有るが、正坊さんの句もときに文語で構成されて、きりりとした雰囲気をもつていられ、良い句になっている。

一寸の虫たらんとす多喜二の忌

はからずも妻の命日 啄木忌

問答は無用にあらず木堂忌

古希の希は稀にはあらず希望の希

石をもて我も追われき啄木忌

十年日記いくたり人と別れしか

古希の坂 見るべきほどのものは見つ

平家物語の平知盛が壇ノ浦で入水する時の台詞に「見るべき程の事をば見つ」というのがあり知盛は平家の栄耀栄華の時代から滅亡までを見てきただろうけど、ただかだか不惑を過ぎたかどうか。こういう言葉は古希の坂をすぎた正坊さんにこそふさわしい。戦前戦後昭和の荒波を乗り切り、しかも何ごともなかつたように恬淡として居られる正坊さんのお人柄は句会にも反映するのが、「もくせい」は雰囲気がいいから好きだといつて来てくださる方が有り、又正坊さんの出して下さる兼題がユニークでどんな句が出るのか楽しみだと言つて下さる方もある。正坊さんは「川柳塔社」にとつても、私たち「もくせい川柳会」にとつても、とても大切な方なのである。

橘高薫風先生が序文を、東野大八先生が跋文をお書きになって、それぞれに正坊さんの句を、お人柄をあまりす所なくご紹介されたので、私には何も言う事は残っていない。「もくせい川柳会」でお世話をかけている事と、亡き淑子夫人の母上栗原富子さんと、故戸田古方先生の川柳講座で一緒だったご縁とで私なりに「ペンシル」の句を読ませて頂こう。

ためらわず妻か仕事か妻えらぶ

こんな夫が昭和年代に居ただろうか。仕事の為には家族をかえりみない連中はかりだつたではないか。その中で正坊さんはまさに第一級の夫である。死んだつれ合いが生きてるうちに正坊さんの爪のアカでももらいにに行けばよかつたと思う。だが、その淑子夫人のご葬儀に私は会葬出来なかつた。危篤と寝たきりの父母を抱えていて時間がとれなかつたのであつたが、今でも申し訳なかつた悔やん

# 秀句鑑賞

— 9月号から

黒田能子

併せな足でしつかり今日歩く

足立 由美子

健康な足で歩けるだけでも幸せなこと。感謝しながら、しつかり生きて行きます。

おいしいごはん今日のリズムが始まった

吉道 時子

朝食が美味しいのは健康な証拠。楽しい一日が始まりそうです。朝はしっかりと美味しく食べたいものです。

父の席残したままで一周忌

横山 捷也

生前の父親の存在感が伝わってきました。またその淋しさも感じられます。

初めての出会いが人の運を決め

毛利 幸

人と人との出会いは不思議なもの。きつといい出会いだったでしょう。川柳との出会いで、素晴らしい友達が出来ました。

生きていくことが戦いならば勝て

近藤 秋星

五十代の自殺者が多いと聞きます。生きていくことは自分との戦いの部分もあり、メッセージとして受け取りました。

無雑作にさよなら言った日が最期

鳥羽 玲子

人間の寿命は分からず、はかないもの。いつものようにさよならと言ったのが、お別れだったとは……。

背伸びなどしない身軽な位置楽し

増田 扶美

身の丈に合った自分らしい生き方が一番。気軽に楽しく暮せると思います。

清らかに生きるきれいに歯を磨く

船津 とみ子

清く正しく生きたいと思いつつ難しいことです。せめてきれいに歯を磨きます。

食べるだけ食べて薬を飲んで

福永 ひかり

食養生は難しいもの。ついつい食べ過ぎて体調を崩し薬に頼ってしまいますよね。

その時はなるようになるあしたの絵

見本 ちや子

取り越し苦労は止めて、その時はその時。また考えればいい。自然な生き方です。

捨てるのに買わなきゃならぬゴミ袋

和田 美寿子

本当にそうだと思います。捨てるものを入れるゴミ袋を買って。勿体ないですよ。

満腹になって仏のような顔

山原 昭水

美味しいものをお腹いっぱい食べて怒る人はいません。仏のような、の表現が好きです。散つてなおブライド高きばらの棘

須磨 活恵

真っ赤な花びらが散つても、棘はしつかりついている。人間に当てはめてみました。

ストレスも期待も背負うランドセル

土居 ひでの

親の期待を背負うのはどの子も同じ。でもストレスまで背負うのは可哀相です。ほどの期待にしてあげたいと思います。

氷山を食べてるようなかき氷

三浦 憩

氷山を食べてるといふ表現が面白いです。そのように思っただけだと涼しいです。

締め切りがないからたまる家事仕事

越智 青園

締め切りのない日常の暮しの中で、細々とした用事は明日へ延ばしたりしてしまいます。投句の締め切りのようにしないと駄目かな。

# 本社 九月句会

九月七日(火)午後五時半

アウィーナ大坂

残暑さびしく、雨の多い九月初旬であったが、本社句会には一〇四名の参加があった。

お話は本社副理事長の西出楓楽さん。お話はとて苦手と前置きがあったが、なかなかどうして落ち着いた話し振り、ユーモアを交じえ、会場を笑わせながらの30分であった。

嫁ぎ先西出家は、先々代より真鍮の螺子を製作する家業で、昭和36年結婚当初より、身体の弱い姑を助けて大世帯の切り盛りをし、子育てと、忙しい日々であった。昭和29年から川柳をしていた姑の句会への送り迎え、会場設営を手伝い、川柳界になじんではいしたが、自身入門はせず、むしろ敬遠したと言う。54年あつてなごが世を去り、川柳の温かい絆が切れることを惜しみ、智子さんのふたば句会に出席したのをきっかけに柳歴20年という。月間賞は太田扶美代さん(藤井寺市)に輝く。

(司会)朝子(記名)いわね・澄子  
(受付)たす子・義子・文(清記)希久子

## 席題「月」

坊農柳弘選

片割れの月へ失意を問うてみる  
柿熟れてふんわり浮かぶ昼の月  
愛されることに疲れた昼の月  
酸欠の町から消えた昼の月  
満月の夜は楽しい夢を見る  
満月とたのしい話してきます  
満月に嫁がす話盛りあがり  
盃に浮く満月を一気飲み  
風吹けばにっこり笑う池の月  
ほろ酔いの女も月も美しい  
七の月過ぎて天災あちこちに  
月給をあげたい妻の台所  
色即是空月へ凡夫の手のあがき  
月々のローンが重い見栄っ張り  
月の面アポロ足跡置いてくる  
キルギスも石山寺も同じ月  
重陽の月を戦地で見た兵士に  
ときめいて真昼の月を道づれに  
産み月へ実家の母が力みだす  
ふるさとで見ればやさしいお月様  
お月さんと送られて発つ都落ち  
時が膨らむように月丸くなる  
少子化へ月の童話は遠くなる  
お月様と遊ぶ宇宙人のように  
おぼろ月昭和の記憶薄れゆく  
月影に杖ひく姿笑われる  
ひんがしに赤い大きな月の影

鹿太 節子 アキ 千里 武庫坊 いわね 冬葉 大輪 一步 諷云児 慶一 狸村 愛論 恭昌 笛生 鬼遊 ますみ 靖巳 かすみ 諷云児 定男 雅文 美子 希久子 柳宏子 天笑

名月は妻と眺めるものでなし  
盃に月を浮かべている詩人  
廃坑のボタ山に出た月が出た  
月の吐息が聞こえてふつと目が覚める  
種なしぶどうと知らず月に笑われる  
佳

月冴える明日は素直に謝ろう  
月からの使者が私に気付かない  
職人の指先弾む月あかり  
満月に祈り語らう嫁ぐ娘と  
月満ちて咲いた花にもある憂い

花いちもんめ月の砂漠も遠くなる  
満月に逢う約束をしてそれっきり  
耳鳴りは月の波音かもしれぬ  
軸

昼の月昨夜の誘い抱いたまま  
兼題「残る」 吉村一風選

さりげなく別れたものの影残る  
付きのないうたしに残り福はない  
残るのはまだ飲み足りぬ者ばかり  
わたくしの戦記が残る母子手帳  
残食がもつたいないと太る妻  
残り物食べて母さん手を合わす  
出世払いの約束がまだ果せない  
残り香を包み心の芯ほくす

楓楽 雅文 天笑 定男 勇太 富湖 弥生 伽羅 章久 恵子 三男 保州 照子 庸佑 剛治 富湖 舞夢 丹吉 楓楽 寿子

生き残る苦勞語らぬ蟻の列

子に残す地図まっ白のままがよい

傷一つ残して夏の恋終る

残照の中に見送る老母ひとり

秋の日は短い淋しさが残る

残り火の女の性に火傷する

着ないままタンスに残る亡母の香よ

残高は分かれぬがよし余命表

神だけが私の残り時間知る

残り物だけで弁当ふたつ出来

残さずに使いなさいと天の声

残つてた小さい靴で帰ります

句碑残す故郷の山のてっぺんに

神様の褒美だろうか残り福

残業を愚痴つたところが華だった

残暑見舞が汗でびっしょり濡れて着く

逆らわず残り少ない日を看護

夏の恋終り絵手紙だけ残る

残り少ない人生残すものも無く

振る鍬に残る亡父の手の温み

リストラへ去るも残るも皆地獄

青春の残像をみる茜雲

つましく年金暮して残し

残すものないので保険掛けてある

ほどほどの幸せ残しあなた逝く

残照のところどころに染みがある

亡母の残像抱いていつまで旅つづく

柳弘

重人

柳美代子

賢子

扶美代

柳弘

典子

靖巳

昭子

月子

泰子

千代

シマ子

典子

保子

希久子

周信

みつ子

笛生

洋

あやめ

かりん

文秋

重人

弘一

定男

保州

佳

ひと粒にうるさい母に躡けられ

表札は六人のままひとり住む

残すもの何にもないが子等巢立つ

ジョーカー一枚抱いて女が生き残り

子育ての愛を残した燕の巢

おやつ出るまで帰らない近所の子

子に残すうしろ姿がまだ出来ぬ

一升瓶に残った量はおぼえてる

残つてる干潟探して渡り鳥

兼題「予定」 桜井千秀選

子定の行動だったか途中下車

リストラが変える夫婦のプログラム

子定着々向い風にも怯まない

子定にはなかった嘘をついている

十代の恋に子定は立てられず

肩書が取れても詰まる予定表

ひとり旅予定が狂う雨も良し

子定外でした天狗の鼻の疵

リストラは書いてなかった予定表

建設予定地役所仕事は草が生え

工面して予定通りの式次第

あすなろの予定聞かないことにする

同居する予定はないと子に言われ

千歩

アキ

柳宏子

柳美代子

一二三

舞夢

楓

天笑

充子

充子

満津子

金太

一步

笛生

義子

萬的

金太

一二三

久峰

みつ子

義

子定立て予定通りにこない奴

子定では今頃スリムだった苦

子定狂う踵が折れたハイヒール

村おし子定もしい歌手がくる

明日のこと子定はしいキリギリス

子定変更酒には甘くなる誘い

朝の歌ひとりひとりにある予定

息切れを隠してこなす予定表

揚げ足を取られ子定が狂い出す

お誘いが無いのを嗤う予定表

子定では丸く治まる苦だった

ホームレスの手帳に書いてある予定

夫婦愛に子定の入る余地がない

天高く子定を延ばすダイエット

新世紀まで生きられるとは子定外

予定満杯余命延長してほしい

諦めの悪い予定を吊っている

新しい風も予定に入れてある

カレンダーに予定があつて妻の留守

子定から父はとくに外される

何があるんでも予定通りという頑固

言いわけを予定してある占い師

阿弥陀さん僕の予定はまだでんな

子定ばかり押し込んである冷蔵庫

子定完了あとの余生は自然体

今日の子定少しづつ溜めない症

せつかくの子定無視するパパの髭

孝美

伽羅

雅文

東雲

千里

正雄

ますみ

寿子

萬的

靖巳

露児

洋

つづや

柳弘

三男

グン吉

恵子

柳美代子

いゝゑ

たもつ

昭子

保州

武庫坊

柳美代子

倫子

ルイ子

天笑

有精卵立派な鶏になる予定

富湖

地

予定より少し多目に種を蒔く

楓楽

天

貸金庫の中へ予定を眠らせる

雅文

軸

自然の猛威予定を越えた降雨量

兼題「カクテル」 高須賀 金太選

カクテルの名前も知らず飲んで

ブルーハワイと恋の深傷を埋めている

薄すぎたカクテル彼女酔ってこぬ

口当りよいカクテルに酔わされる

カクテル光線の下でしらけた嘘をつく

カクテルのムードに鍵が外れそう

カクテルの熱い誘いは許せそう

恐ろしい名のカクテルを飲む笑顔

口当りよいカクテルに欺される

シェーカーに忍び込ませた下心

割り勘でのむカクテルが水くさい

雰囲気のにまれカクテルには酔えず

胃でカクテルのビールに酒にウイスキー

カクテルに少し理性を眠らせる

心地いい言葉カクテルからもらう

ライバルと酌むカクテルは胸で燃え

カクテルのベースに愛を伏せておく

カクテルに甘く熟していく女

伝わらぬ愛をグラスの底に追う

夕花

天

扶美代

カクテルに軽いジョークを浮かべとく

希久子

カクテルグラス小さな嘘も混ぜておく

信子

カクテルにとかず熱情持っている

剛治

舌ざわりよいカクテルに油断する

剛治

カクテルに女の嘘が混ぜてある

風云児

カクテルがそろそろ素顔見せはじめ

正一

カクテルの輪に入れない辛い酒

典子

カクテルに甘い記憶を呼びもどす

夕花

カクテルドレス蝶になり鳥になり

二三

カクテルは涙で割った苦い味

利昭

道ならぬ恋とシェーカー知っている

楓楽

魂胆がみどりの酒に浮くグラス

鹿太

うちを沈める魂胆のカクテルね

天笑

虫の音へ今日はカクテルでも作ろ

月子

マティーニを疑い深く飲む淑女

雅文

騙されてみようかカクテルが甘い

たず子

軸

マティーニは男の辛さだと思っ

兼題「目立つ」 河内 月子選

目立たぬがきつと仕事の出来る人

ベルトも靴も自惚れがよく目立つ

目立つほど活いき目下恋愛中

羅漢にも目立たぬ顔に目立つ顔

脇役が余り目立って叱られた

地味な子が目立っているぞ地蔵様

目立たない女のまんま老けてゆく

場違いの服を着て行き部屋の間

何着てもモデルのようにすぐ目立ち

素顔でも目立つ美人がいて困る

目立つたらきつと私は嫌われる

目立つては駄目だ駄目だとカエルの子

目立ちたがり屋の根性でした金メダル

突拍子もない空振りをしてやろう

目立たないが存在感のあるお方

クラスでは一番大きな娘に育ち

目立ちたがりやたいがい力知れている

葬列の雨にひとときわ赤い傘

だんじりの屋根ではおいて祭好き

控え目に黒をまごっていて目立つ

町内で一軒だけの国旗立て

先頭の小粒はうちのやんちゃくれ

目立つ気はないが図体大きくて

おばちゃんが目立つとロクなことがない

目立たないけれどよく効く母の釘

剛治

満津子

鹿太

高栄

義子

文

利武

朝子

たもつ

笛生

みつ子

定男

美子

あやめ

周信

ますみ

舞夢

寿夫

哲夫

高栄

鹿太

満津子

剛治

螢

高栄

義子

文

利武

朝子

たもつ

笛生

みつ子

定男

美子

影武者に立派な鎧着せておく  
うちのババ帽子をぬぐとよく目立つ

田圃の中にネオンキラキラパチンコ屋  
淋しさがもう目立ただす曼珠沙華

どこからも目立つ通天閣の塔  
目立つのは多分私が死んだ時

損得で駐車違反が目立つ街  
目立たずに陰で支える妻がいる

喪の色を纏って目立つ不仕合せ  
目立つてはいるが本当は淋しがり

同じ事やっても目立つ奴がいる  
反対はひとり気合いで手をあげる

目立たない服で裏方よく動く  
佳いことがあったか目立つ飲みっぷり

わたしまで目立ってしまう連れの派手  
人

どつきりと貯めてはいるが目立たない  
地

目立ちたくもないのに薔薇を持たされる  
天

運動会一度目立ってみたかった  
軸

匿名で財産みんな寄附をした  
兼題 「まるい」 橋高薫風選

削られて丸 ふくらんで丸 (徳) 千代  
鉛筆の芯の丸さに好き嫌い 弘一

丸ばかり描いて元気な孫の顔 充子

丸すぎて落ち着き場所が決らない  
丸い石お前もきつと苦勞性

我慢した数だけ丸くなった石  
彼が来たと丸い人まで角が立つ

俺の描く丸はいつでも楕円形  
丸腰でピアスは茶髪学校へ

戦前派日の丸国歌アレルギー  
薬師寺に丸くなられた仁王さま

山門をくぐる丸い風になる  
方言の丸さにとけた都落ち

流れ流れて母なる川の丸い石  
分相応爪は綺麗に丸く切る

三日月はよし満月はさらによし  
皆既食月も地球もまん丸い

黄泉に住む母と観ている丸い月  
老いて今丸い絆に囲まれる

怒れないあんまり丸い顔だから  
目を丸くして夫の嘘を聞いたげる

丸くなった夫が何故かうとまし  
丸いのと違うやる気がないのです

想像もできないう丸くなった僕  
消ゴムの丸さ何にも語らない

ただ丸う生きたら悔いが残るだろ  
丸くなり僕は勝算読んでいる

挫折して丸い石にもけつまずく  
丸い物丸く包める知恵もつく

ひらがなの丸さは老母のまるさだ  
腕一本で生きて大きな丸をか

国境線丸い地球を切り刻む

満津子

澄子

三男

勇太

遠野

セツ子

洋

いわゑ

シマ子

メ女

風云児

金太

高栄

泰子

扶美代

典子

シマ子

倫子

義

信子

大輪

義子

ダン吉

千里

瑠美子

美代子

たもつ

保州

住 方円の器に叶う水の色

丸い背な考えごとはなさらぬ

丸書いて平常心をたしかめる

秋の夜は丸い眼鏡が欲しくなる

刑いまだ終らぬ椅子がない

丸くなりやがてポツリと死んだ鬼

生き死にの話の他は丸く聞く

四方八方丸く治めている無学

丸いまるい轟夕起子忘れない

兼題 A選者 B選者

波 長江 時子 藤田 泰子

時事雑詠 柏原幻四郎 河内 月子

銀河 梶川雄次郎 河内 天笑

上方 森中恵美子 橋高 薫風

出句締切 10月15日(当日消印有効)

用紙 配付用紙またはA5用箋四枚

出句数 一題二句(右半分はA選者、

左半分はB選者と分けること)

出句料 1000円

出句先 593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

伽羅

しげお

恵子

富湖

寿子

久峰

みつ子

扶美代

# 麻生路郎師句碑建立

## 50年記念句碑まつり 第51回 西日本川柳大会

路郎師息女・西村梨里さん挨拶（要約）

何も彼も投げ捨てて川柳一筋に生きた父でした。たった十七音字の詩に魅入られた人生だったと思います。父が生涯言いつづけたことは「川柳は人間陶冶の詩である」という言葉です。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 路郎

どんなに財を積んでも、大邸宅に住んでも大の字になって寝て畳一帖です。父はいつも「有形の物はつまらない。限りある物は他人に与えれば無くなる。無形のものとは与えても与えても、増えこそすれ無くなりはない」と言っていました。お寺に嫁いだ私はこの父の言葉を支えに生きてきました。親不孝者ばかりの子供で、私も父の手を逃れたくて結婚したようなものでしたが、父の許を離れてから、特に父の死後は父に学ぶ所が多かったと思います。

婚家は四百何十年続いたお寺ですが、お寺

を継ぐということは御本山へ行って資格を取ればよいというものではない。このお寺を護り続けて下さった方々の心を継ぐことなのだ

と気付かされました。嫁いでからの私は全く川柳とは無縁となり、四十数年を過ごしましたが、父の故郷・尾道市の市制百年を機にまた川柳との縁がつながりました。父の想いは何処までも届いて、見えない糸でつながれているような気がします。

弓削が川柳の町と銘うって路郎の句碑が建立されて五十年、どれだけ多くの川柳人が育まれたことでしょうか、弓削川柳会の皆様、どうも御苦勞様でございます。

私は先に、路郎は川柳以外のものは何も彼も捨ててと申しましたが、妻子だけは捨てませんでした。それだけにどれほど苦しかったことかと思えますと涙がこぼれます。今は、そんな父を心から尊敬しておりますことを、一言申し添えておきます。



西村梨里さん

### 川柳の町 弓削

西村 梨里

弓削へ着いたのは昼過ぎで、今日は川柳公園に新しい句碑の除幕式があるので、その方達と御一緒させて頂きました。今年の八基を加えて二百三十一基になるそうです。皆さんお喜びがお顔にもお話にも溢れて本当に嬉しそうでした。川柳公園は眼下に町の全景が広がり、こんな素晴らしい所に、ゆったりとした間隔で坂道の両側に並んでいる思い思いの石の顔、そのものが芸術であり、ゆっくりと句意を味わいながら散策出来るのです。

駅前に行く句碑まつりの用意がすっかり出来ていて、男女共揃いのハッピー姿で威勢よくお世話をして下さり、賑やかな催しでした。

昨年の川柳塔まつりでの濱野奇童様の「おはなし」を思い出しました。車の増加により、駅前を広くするため句碑の移転をしたが、父の句碑だけはどうしても動かない。仕方がないので回りの木を切り、この句碑だけは残すことになったとか。何だか句碑までが父らしい頑張り方をするのだなアと思っておかしくなりました。「お父さん、よく頑張ったわね。川柳の町の象徴である句碑が駅前になく

## 有益な課外授業

小林 周 信

NHK文化センターで学ぶ有志は、恒例の秋季吟行に「麻生路郎師句碑建立五十周年記念 西日本川柳大会」への参加を決め、十三名が九月四日朝新大阪駅に集結、岩佐ダン吉山本希久子の両氏も合流、賑やかに岡山へ。日本三名園の一つ、後楽園を散策、小堀遠州流の回遊式庭園を巡り想いの一時を過し、心が洗われる。津山線に乗換え一路弓削駅へ一時間の旅。駅前広場には河童に守られて路郎師の

俺に似よ

おれに似るなと子をおもひ

二行に分ち書きの句碑と御対面。初対面に

なったら看板がないのと同じだもんネ。あの奥座敷は素晴らしけれど、お父さんはやはり駅前で弓削に降りる人を迎えてあげてね」と心の中で呟いていました。

五十年という歴史だけでは今日の成果を上げることはむずかしい。町の人々の和の精神が、この地で生きていることを強く感じました。正に川柳町の実現は、みんなで心を合わせ、力を合わせた賜物だと思います。

も拘わらず一種懐旧の念にも似た思いがしたのは私だけだろうか。人の心を揺さぶり続ける名作の所為でもあろうか。反復して「分かち書き」の息吹、リズムを確かめてみる。

程なく句碑まつりの始まり。弓削川柳社会長 濱野奇童氏他を始め、薫風主幹、西村梨里さんの御礼ご挨拶が続く。鏡開き、献茶等



句碑にもお酒を！

の後は地元美人による川柳傘踊りで、歓迎の興趣を盛り上げる。振舞酒を楽しみ、手作り品の並ぶ模擬店で素朴な味を堪能。何よりも法被を纏い汗だくで接待をされる、地元柳人の熱意あるお姿が最高の御馳走であった。

明けて五日、早々に投句を済ませお目当ての「川柳公園」へ。天然石に刻まれた二三句(平成十年十月現在)の句碑があるという。「川柳の小径」で立止っては、汗を拭き拭き名句鑑賞、とても全碑を巡ることは覚束ない

が、川柳の聖地巡礼といった趣を満喫する。川柳大会は第五十一回目。次の半世紀へ向けて第一歩の年という。「川柳による人、まちづくり」を目指す関係者の方々の思いは熱く、歴史と伝統はさすがに重い。「吟行がてら」に参加の川柳教室一同も、披露につれて真剣に入選句に聞き入り、佳句に頷きあう。まさに有益な課外授業でありました。

宿泊手配を始め種々お骨折りを頂いた弓削川柳社濱野奇童・山田ふくよ両氏他関係の皆様心に心から御礼申し上げます。

記念句会の本社同人受賞者は次のとおり。

岡山県議会議長賞

小島 蘭幸

NHK岡山放送局長賞

林 荒介

久米南商工会長賞

松本よしえ

## 元氣印は

負けなかつた!!

西田 柳宏子

最初に断り申し上げておきます。私の闘病記というか、これからの記述はあくまで私の独断と偏見に、負けてたまるか気持で切り抜けたのであって、専門的な医師や医療関係の方々のお叱りもあろうかと思いますが、ご容赦下さい。

さて本年第一弾は平成11年1月の20年来の喘息(既報で十年来とありましたが、かかりつけの医師から23年になるとの話で訂正)の完治を報告して多くの柳友の皆さんから祝福を頂き有難く感謝しています。

さて第2弾は大腸癌征伐、平成10年6月頃から痔かと思うような血混りの排便、体重も減り、人から痩せたんと噂うか?と言われる時もあり、ひよっとしたら大腸癌かと自問、内臓外科の先生に話すと一度検査しようとのこと、昨年8月24日内視鏡を入れて見ることに決められましたが、前日23日夕方電話でキ

ヤンセルしました。それは先生がポリープがあれば、その時摘み取ってやろうの言葉に私の独断と偏見が動き出したのです。ポリープを摘みとって跡に残った細胞が増殖した話、また若い30〜40歳代の癌は進行が早いが高齢者の進行は遅いという話、私はこれに賭けたのです。爾来、大腸癌の順調な成長を念じつつ、毎日の下血、体重減をじつと見守り、平成11年6月5日、先生にカメラを入れて貰い丸々太った大腸癌を見て、早速先生の紹介で鉄道病院に6月14日入院、6月18日手術、コロツとした大腸癌を何の転移もなくきれいに退治出来て経過も良好、元氣にとび歩いて抜糸・抜管もすみ、7月5日めでたく退院して、早速句会巡りをして皆様から喜んで頂きました。

所が思いがけぬ奇病、特発性血小板異常激減による紫斑病に犯され、緊急入院の指令電話が7月13日病院から入り再入院、これ許りは元氣印だけではどうにもならず、医師の指示でおとなしくする他はありませんでした。幸い大阪で最優秀と言われる鉄道病院の血液内科で適切な御処置を頂き、血小板数値も入院当初殆んど零に等しかった(超危険値)が20万を超える通常値に増加、継続治療の下に8月11日退院させて頂きました。

爾後相変らず一〜二週間置きの通院採血検

査で経過を見ながら服薬治療を続けています。未だ解明されていない部分の多い難病、紫斑病患者の認定も受けています。ともあれ病気に負けぬ八十路坂の私です。皆様方の励まし、祝福に感謝致します。

## 第20回川柳塔鹿野みか月川柳大会

とき 11月14日(日)午前9時開場

ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」

おはなし 「非文学的川柳論」

川柳瓦版の会 柏原幻四郎氏

第一部(当日出席者)各題2句・11時半締切

「声」橘高薫風選 「包」森中恵美子選

「茶」濱野奇童選 「火」西川けんじ選

「窓」木本朱夏選 「舵」熱田圭詩朗選

「爪」政岡日枝子選

会費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)

第二部(出席・欠席投句者)各題2句

「彩」永石珠子選 「根」奥山晴生選

「首」西原艶子選「雑詠」土橋はるお選

応募締切10月20日 出句料1000円

◎B5大用紙一枚に連記して左記へ

〒689-0405 鹿野町鹿野1279中原諷人方

川柳塔鹿野みか月事務局宛

前夜祭 11月13日(土)午後6時から

山紫苑・6000円・申込11月5日まで

# 柳界展望

★青森県蟹田町主催の「第七回風のまち川柳大賞」で小西雄々参与が齋藤大雄選の天位句に輝いた。

むらさきの風凍蝶を揺り起こす 小西 雄々

★平成10年度川柳塔みちのく大賞が決定した。

子に残すたつたひとつのしゃれこうべ 一戸ツネ  
なお、準優秀作には佐治千加子・田中叶・浅田隆樹の三氏が入賞した。

★8月1日、第3回川柳展望全国大会は115名の参加を得て、マリエド・クル空港で開催、本社同人の秀句は次のとおり。

小さくて産まぬ乳房を包みこむ 土橋 螢

白紙にはしてやれないが  
盆が来る 小池しげお  
ともだちが病気釘がちぎれそう 新家 完司

★8月22日、神奈川県相模原大会で本社同人の清水潮

華さんは総合点で上位入賞

遺伝子にない才能に夢を  
かけ 清水 潮華

★8月22日、第30回奈良新

聞川柳大会は奈良県文化会館で開催、出席194名

本社同人秀句は次のとおり

童話から溢れて泳ぎ出す  
河童 池 森子  
最後まで神に抱かれて生き残る 河合 茂雄

★第54回尼崎市文芸祭川柳部門の入賞者が決定、9月5日、尼崎市立中央公民館

で表彰された。本社関係の入賞は次のとおり。

（第三席）  
川島颯云児  
（第四席）

本心は妻の背中へ掌を合  
わす

どん底を歩いた母にムダ  
がない 青枝 鉄治

なお、佳作に鍛原千里・奥田みつ子・小池しげお・坂上高栄・島ひかる・住谷石舟・山口三千子・木村富美

子・山田高夫・内田美也子

松川杜の十一氏が入選。

▽出版 版△

■三宅保州理事は「川柳入門Q&A」たかが川柳されど川柳」を發刊。A5判41ページ。本書は和歌山県いきいき長寿社会センター主催「川柳入門講座」のテキストとして作製したものを、希望者が多く改めて冊子とした。価格300円・郵送料140円。申込先

〒642-0001 海南市黒江1-342 三宅保州

▽入事往來△

■8月6日、水府忌へ薫風の月原宵明様の追悼の言葉、亡き夫と共に感謝申し上げます。早速仏前に供えさせていただきました。

■8月6日、水府忌へ薫風の月原宵明様の追悼の言葉、亡き夫と共に感謝申し上げます。早速仏前に供えさせていただきました。

■8月6日、水府忌へ薫風の月原宵明様の追悼の言葉、亡き夫と共に感謝申し上げます。早速仏前に供えさせていただきました。

主幹は兼題選者、天笑理事  
長・楓楽副理事長・萬的参与、他同人多数が出席した。

主幹は兼題選者、天笑理事  
長・楓楽副理事長・萬的参与、他同人多数が出席した。

## 新同人紹介

小野 句多留  
— 薫風・満秋・政勝推薦

■8月29日、西田柳宏子相談役は新・都ホテルの京都番傘川柳会創立70年記念川柳大会に出席した。

■8月29日、八木千代参与は青森市文化会館で開催の青森県川柳大会の特別選者として青森行き。

▽同人消息△

■本本朱夏理事は北見川柳社「川柳オホーツク」八月号に「橘高薫風の内周」として薫風論を発表した。

▽おたより△

■矢野貴美さん（今治市・故矢野佳雲氏夫人）八月号

■9月号 P116（各地柳壇）下段5行目超待価↓

■9月号 P116（各地柳壇）下段5行目超待価↓

# 老いぬ

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

## 大原川柳社

## 矢内寿恵子報

面影を辿れば初恋だった君  
風鈴の音に面影しのお夜  
それぞれに面影重ね形見分け  
面影をなお引きずって風の道  
面影を追えば遠くで寺の鐘  
面影の父黒杵に生き続け  
ありし日の面影さがす一周忌  
面影が亡父に似ている血の絆  
母の教え面影重ね梅漬ける  
三十余年吾子の面影抱いて生き  
力むからそこら先を見破られ  
力むむむ的の一つが定まらぬ  
酒の勢借りて口下手力み出し  
力んでも届かぬ運を追いつづけ  
力んでも一人ぐらしの畑づくり  
負けまいと孫と力んで腕相撲  
力んでも年には勝てぬ老いの坂  
力んでるピエロ淋しい舞台裏  
責任はひとり取ると力んでる

みづえ さちこ あやこ 玉恵 辰江 妻子 悦子 貴美子 敏子 こふゆ 南花 たづ子 ひでの 昭子 静子 絹子 和子 あすなろ

力んでも妻と五分には戦えぬ  
歯医者さん肩の力を抜けと言っ  
どう力んでみても余生が短すぎ

## 三幸川柳教室

## 三宅 保州報

掃く手止め箒で道を教えられ  
吹き溜まり掃いて噂の整理する  
丸くなら丸くならうと自我を掃く  
一掃処分してから気づくりサイクル  
魂を掃き捨てた過去が時々顔を出す  
まだ青い本音で喧嘩して夫婦  
まだ抵抗あつて自転車杖代り  
親はまだ青いと思うシャボン玉  
まだ青春弾む二人の時刻表  
畳むにはまだくすぶっている五感  
まだ青いりんごの吐息聞き洩らす  
バックミラー母の振る手がまだ続く  
まだ鳴っている若き日のオルゴール  
許したおぼえないのにヒラス光ってる  
許すことおぼえ確かになる歩幅  
余命表もう寄り道は許さねぬ  
許すとは言わぬ母から岩田帯  
わたくしを知れば許せる他人の癖  
何が何でも戦争だけは許せない  
許す気の眉がやさしくなっている  
蜘蛛の糸なぜに私を通せんぼ  
編んだ糸ほどきたくなる幾何模様  
きみのためおつうになつて機を織る

清 当代 町子 和代 秀男 正一 かず子 美子 孝子 起世子 登美代 朱夏 嘉平 桂香 マリ子 めぐみ さち子 鉄治 公子 保州 碧 光男 豊太郎 章子

はじ芽 地佳平 寿恵子

忍の糸切れて一つの絆絶つ  
糸切った風から届くエアメール  
見ておれぬものに男の糸と針  
焼香の列で糸くす摘ままれる  
脳みその破れ繕う糸をよめる  
許さねば手負いの傷が癒えてこぬ

## 岸和田川柳会

## 長谷川呂万報

遺産なく借財もなく暮を閉じ  
シルクロードの匂う正倉院御物  
生きざまを遺産としたい広い肩  
つつましく暮しびっくりさす遺産  
遺産など無いからぐつすりと眠る  
井戸端がなくて噂もあくびする  
公共の電波私人の噂追つ  
番待ちの噂花咲く美容院  
大輪の花に噂がつきまとう  
ひまわりが噂話に向きを変え  
お茶だけの仲がホテルを出た噂  
あなた達の噂がひとを殺してる  
悪人をつくる噂の軽い口  
リストラが延期している入社式  
遺蹟出てマンション建築延期され  
父さんの約束かなくて無期延期  
立見席主役のにじむ汗を見る  
休暇とると大入りになる間の悪さ  
書き入れた記号気になる診断書  
父の手紙母が書き入れ二三行  
朝市の一時村は活気づく

鹿太郎 松風 甚一 金太 盛之 東吉 一齋 すみえ 辰郎 蛙城 愿 狸村 昭二 みつ江 苑子 野添 呂万 洋 信博 和歌子

みね 三千子 昇太郎 和子 栄之進 千秀

渡すメモ終りに好きと書き入れる  
終章に幸せだったと書き入れる  
うなぎ屋の書き入れ煙をあおぎ出し  
昭和史へ書き入れておく原爆忌  
書き入れた文字だけそっぽ向いている  
書き入れ時うろつく仔犬蹴飛ばされ

高槻川柳サークル卯の花 川島韻云児報

泣き砂に想いのたけを問うてみる  
白砂青松少女は初心なまま母に  
浜に佇ち有情無情を省みる  
一合で満ち足りるよう馴らされる  
満足かなどとは妻に聞かぬこと  
手をつなぎそのぬくもりで満たされる  
サクランボをつまむ満足そつな指  
一の並ぶ日付の切符捨てかねる  
ジパングに頼る定年後の旅路  
片道切符納得して生きています  
そつめんの涼しき食べている真昼  
涼しさへ老母を伴なう車椅子  
脳味噌がじわじわ渴水して困る  
じわじわと汗滲み出て梅雨が明け  
虎吠えて景氣じわじわ上を向く  
目に見えぬ老いがじわじわ身を包む  
じわじわと麻酔が切れて峠越す  
胎動の手応えじわじわ花開く  
独り芝居の背なはじわじわ寒くなる  
たつぷりの愛があなたを狂わせる  
水着きた妻を妻とは呼びにくい

倅子 路子 洞庵 さよ子 富志子 萬の志 稲子 きよえ 澄子 正坊 慶太 和子 恵美子 泰雄 節子 吉之助 スミ子 柳宏子 活恵 一笛 義一 茶の子 求芽 秀夫 晴美 あやめ 満寿蔵

稲の出来ローカル線で語り合う  
年視鏡古い前科があるらしい  
内の差を気にせず渡る夫婦橋  
ゴミの日にゴミ捨てに行く粗大ゴミ  
自墮落な男を捨てて行く川がない  
愛情の視角で白い帆をあげる  
目を閉じる未来を托せそうだから  
丸くなりすぎて個性のない真珠  
香水の涼しい風とすれ違つ

東大阪川柳同好会 森下 愛論報

感動に触れて一気走るペン  
人ひとり葬り去つた細いペン  
一本のペンが地球を騒がせる  
器より大きいことを狙うペン  
おふくろの味へ学生客がよる  
客が来て鰻の上をご相伴  
秘境の湯団体さんがやかましい  
上客が多い女将のエメラルド  
手を振るな私のことが目につかぬ  
見て見ぬ振りこの氣遣いで嫁姑  
諸行無常同行二人の鈴を振る  
返り血を浴びた男の旗を振る  
方言にだんだん慣れてきた左遷  
根回しの酒にだんだん縛られる  
不況風尚一層の金づまり  
打算のない子の眼にウソ通じない  
駄々こねてやろう身勝手な幹事  
抱いてやるだけで絆は保たれる

紫香 重人 波留吉 治三郎 靖巳 百合子 磯 かげお 諷云児 文秋 たもつ 度 雅文 賢子 千里 美弥子 シマ子 ぼっは 萬的 湖風 信治 とみを 信博 弥生 愛論

川柳塔おつぱご吟社 木村あきら報

負け犬にならずと老いて爪を研ぐ  
やんわりとネジ巻いて置く古時計  
背くなど絶対ないとの親の自負  
巧言も駄弁も要らぬ十七字  
七光り椅子がきしんでばかりいる  
温室のメロン只ただ甘いだけ  
肩書はないが器用な腕を持ち  
過ぎてゆく生きた証を書きのこす  
炎天に一糸乱れぬ蟻の列  
生き残る為どちらへも旗を振る  
年の差と口に勝てない恋女房  
酔いました貴方運転下手だから  
二人なら助け合いつつ坂も越す

佳句地十選 (9月号から)

都 倉 求 芽

踏切の向こうに赤い花が咲く  
傾けた傘で噂をやり過す  
夫婦げんかする度服が増えてゆく  
嫁ぐ日に父娘が違つ時計持つ  
花の咲く広場さよない足が向く  
何処にでも居るよな人を好きになる  
何気なく喋って敵が一人増え  
すぐ逢える距離で逢えない日がつく  
念入りに女に化ける化粧する  
捨てられた女洗濯ばかりする

房子 美智子 宏子 度 朱夏 昭二 弘直 春蘭 かつみ 寿美子

主婦の座を忘れてはしやく旅の空  
妻の座にとりし胡坐かいている  
夜の我が家座敷わらしが顔を出す  
掛声が立つも座るもおまけつき  
才能を行で磨いて揺るがぬ座

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

家系には天才はなく平凡だ  
何代も続いた家だ有り難う

家守る老いの両肩重くなり

家風など何処吹く風の核家族

茅葺屋根優雅な鶴が舞い降りる

緑談に家もちらりと見て帰る

ステテコで落ち着くわが家天国だ

家事をぞろ暇を見つけて趣味にこる

家建てる望みは捨てず共稼ぎ

バリアフリー取り入れ家を建てておく

家の主いない過疎地も四季の花

家並みへ鳩の目も知る城下町

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

ただ酒を呑んで深みにはまり出す

無料バス貰える歳になりました

いさぎよし無料おためしたまさない

無料です母を看取つてはや三年

豊かさにあぐらをかいて呆けている

くちコミでおもしろい舌がはやり出す

波風も誤解も招く舌たらず

あやまれば済むにプライド高い舌

放任

よしみ

なみ子

チカエ

くに子

智恵子

信敬

久子

豊枝

公美枝

康女

正光

和代

鈴枝

弘子

静江

雄々

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

祭り酒神楽太鼓も夢の中

夏まつり浴衣がみんな知っている

山車が来る電話で聴かす笛太鼓

肩書ははずし祭りの列に居る

綿菓子が届い思い出つてくる

ふるりのまつりが招く母の文

お盆には孫も曾孫もやって来る

賑わいを空ろに見てる爛冷まし

賑わいに花添えている大道芸

草刈のうなり賑わう日曜日

九人家族の頃を知ってる飯茶碗

賑わいの中で佳人とすれ違つ

湖上から夏を運んで風走る

湖上から鯉の大きな声がする

湖の色今日の話はうまいく

波のない湖上だ眠りたくなつた

なつかしい唄が流れている湖上

絨毯を敷いて去湖湖陽が沈む

藤の花眺め一服休みます

手を休め眺めています孫の知恵

遠望台私の影が小さすぎ

おなじ景色ばかり眺めている恋心

ほんやりと眺める窓に蝶の恋

店先の花火子供のよりどころ

雑談で花火見ている厚化粧

手花火で子を遊ばせた庭の草

注湖

邦代

茂美

ちかし

すみこ

房子

和歌子

友子

煩惱児

芳枝

太泡

日出子

義良

章峰

畔

きみ子

小鹿

与根一

みえ

米子

秀子

登志子

桂子

民子

ひふみ

静江

たけし

大花火夜空に人生模様描く

手花火に静かな遠い日を想つ

いいとこに住んで二階で見る花火

城北川柳会

神夏磯典子報

気がつけば八十路の脚になつて杖

単身赴任みれん残して昇進す

若い輪に入るも齢を忘れさせ

信じ切る彼の言葉にまだひとり

うつり香に未練が断てぬ衣紋掛

ひと息で読むには惜しい温い句碑

脳死でも体が生きている未練

子の寝顔今日一日のうさもはれ

ウインクしてコップ出したら茶を注がれ

万華鏡覗く向こうは夢世界

露天風呂暗い世相に華が咲く

ボクの運握つてるのは地味な妻

生きてこそ喜怒哀楽にあした見る

祈る声安楽に未練があるかぎり

三国志古典もマンガで大学生

彼責めてみぞおち辺りに残る悔い

人生の道草恋の鬼ごっこ

電灯を消せば未練が回り出す

梯子から立食いそばへ辿り着き

縄のれん頭で分ける夜なきそば

ウインクの妻のサインが見抜けない

未練などないわと口にする未練

モナリザもきつとウインクしたかろう

絶望の暗さを見せぬ白いバラ

多賀子

静恵

叮紅

登美子

トヨ子

一枝

ひさ乃

史風

陸子

昭子

久留美

政子

みえ

寿美子

あやめ

義江

はじめ

あい子

道子

倫子

順子

小路

ただし

典子

高栄

千里

志華子

均等化されて個性の芽が伸びず  
暗い過去みじんも見せぬ朱のキャンナ  
暗い過去風化はさせぬ八月忌  
立食になれて大阪人となり  
移り気な人へセーター編んでいる  
し残した仕事無念なデスマスク

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

私を正すわたしの緩い鞭  
緩やかに童女に還る日を重ね  
少し緩いりボンで仔猫捨てに行く  
看護婦に緩い言葉で叱られる  
緩やかな口調の裏も読みました  
オフレコにしても漏れてる緩い箍  
幸せな日よ緩みっぱなしの顔になる  
結び目が緩んで冷めた風が吹く  
一着の礼服今日は泣きに行く  
逆風は神の洗礼かもしれぬ  
最敬礼してもポリさん切符きり  
目札をするとニコツと笑みをくれ  
礼節が消えてゆきます自由主義  
いらぬとは言ったが礼の値踏みする  
目札から言葉をかかず散歩道  
戴帽の喜びを知る看護生  
ベレー帽手塚治虫の画に集う  
畦道でムギ藁帽の立ち話  
クラス会素顔見たくて会いにゆく  
B面の素顔夜叉にも善女にも  
素顔のままの私の心見てもらう

白峰 朝子 達子 とし子 千歩 公一  
裕美 稚代 萬的 和重 光代 高夫 富美子 佐代子 富湖 保州 あつむ 紫香 泰子 正博 紀美女 健三郎 君枝 己三代 美子 精子 さち子

バーゲンセール淑女の素顔見せまう  
窓際で首を磨いている素顔  
あららら化粧落としただけなのに  
老醜をさらす素顔に自己嫌悪  
神様の素顔を街で見てしまふ  
妻と子に騙しつづけた素顔です  
久々の素顔介護の手もはずむ  
袴を脱いだ素顔の人間味  
付け焼き刃だけどその日のための礼

うぶみ川柳会

上田 宣子報

天狗の鼻を弾いてみたい細い指  
古里に愚痴のこぼせる港がある  
港から見ると漁火は生きている火だ  
少しでも美女になりたく泥も塗る  
もやもやに酔ってはおれぬ陽は沈む  
塗り畔で守る棚田をボランテア  
お早うを言えばもやもやすつと消え  
リンスしてみようかもやもやの頭  
もやもやと国旗国歌の乱続く  
久々の雨に心も塗り替る  
背を向けて夫婦もやもやした朝へ  
もやもやは飲まぬ酒代払う時  
マイホーム今夜もパパが沈没だ  
もやもやを飛ばす彼女のVサイン  
泳ぎ疲れて帰る港が一つある  
もやもやの中で無色の花になる  
弾みたい気持ちに足が追いつかぬ  
絵の中の少年弾む声がする

三男 英子 大輪 吞天 射月芳 豊太 寿子 鉄治 緑良  
ひろこ 天人 葉士人 一枝 静生 ユリ子 孝男 登美枝 良雄 華子 くに お也 天恵 黙光 雅女 雄人 あつま 健一

沖雲にいつも港は身構える  
サークル檸檬  
魔の雲を忘れはしない夏帽子  
もの忘れやがて自分を忘れそう  
胸の底自分自分が渦を巻く  
ピエロの瞳のぞき淋しさ深くなる  
八月の硝子はどこかさびしげな  
八月の記憶へやまぬ蟬しぐれ  
原爆を知らぬ者には鐘空し  
缶詰のひとつ転がり終戦日  
八月は父と母の忌兄もまた  
八月の懺悔熱射の刑を受く  
吐いた唾 何れは君に振りかかる  
図書館で借りた本ならすぐ読める  
ノストラダムス不発 八月なお暑い  
八月の心へ正すものあり  
ひめゆりの無念さ想う炎天下  
八月の動物園も昼寝とき

竹原川柳会

時広 一路報

君のもとへ行こう紙ヒコキに乗って  
高校野球男らしさを感じます  
妻と僕傘はやっぱり二本ある  
長雨に傘をささない花畑  
蛇の目傘しずくを切つてから話す  
蛇の目傘男がもてば雪になり  
綱渡り傘一本で調子とる  
ひとり歩きの傘に重たい雨が降る

宣子 一夫報 靖巳 希久子 みつ子 楓 薫 智恵子 雅子 一夫 喜美子 あずき 房子 正坊 義子 いわゑ 澄子 薫風 大史子 高千枝 蘭幸 幸子 蝸牛 笑子 栄恵

好きときつぱり土砂降りの傘の中

石ひとつひとつ重ねてきた余生

庭石と玉砂利もとは同じ石

寡黙なる石仏だから信じよう

せせらぎに石の音が聞こえそう

手の平で温めば石も語りだし

路傍の石待ちくたびれた赤い靴

墓石より句碑建つ夢が一つある

未來坂勇氣の二字に励まされ

勇氣ある女離婚も簡単に

新世紀勇氣を持って進まんか

ノーと言ふ勇氣は一つ持っている

スタートに戻る勇氣を子に諭す

玄関に入るまでの勇氣でした

父ちゃんの勇氣にほっとする家族

つきつきと勇氣がひらくパラシュート

離伏十年勇氣を少しずつ貯める

いずも川柳会

佐藤 治代報

渚に立つてあの日の声を呼び寄せる

ひと夏の恋が渚で浮遊する

古里の渚に安定剤がある

渚には母と遊んだ足の跡

渚にもあるやどかりの果たし合い

泣き砂のリスム渚の人嫌い

忙中閑記念日だけは忘れない

記念日を待たずに散った花惜しむ

記念日に消した火種が燻った

肝心な記念日うつかり忘れられ

静風

房舟

笹居

一枝

美佐雄

貞子

正宏

現代

年子

夏喜

節夫

喜美子

力

不朽

一路

辛かったことは言うまい記念の日

記念日が古傷あばくように触れ

敗戦の記念日徳ぶコップ酒

罪深い両手でずがる仏さま

カナカナが鳴くと帰ってくる仏

仏様の化身か蝶が肩に来る

川を渡ればみんなきれいな仏顔

天の川逢いたい仏様ばかり

誰を待つ肌ではないが磨いどく

赤ちゃんの肌には戻れない大人

肌はまだ若いとうまい世辞を言ふ

白桃の肌にかがれる梨の花

子育てに肌の響きが伝わらぬ

いつまでも気持はピンクの肌でいる

古希むかえ遅れた愛を取り戻す

終着駅少しくおくれて着く予定

決断が遅れ女が髪を切る

流行に遅れる妻のワンピース

人生の遅れを戻す捻子を巻く

一瞬の遅れが分けた甲子園

尼崎尾浜川柳会

田辺

濃い紅に浴衣が何故か不釣り合い

年月が過ぎて也想う終戦日

一生をないて暮した蟬の殻

袷足のきれいな人に魅せられる

遠花火幼い恋の灯がともる

大海へ泳いで見たい金魚

車椅子の母に火花が遠過ぎる

好子

水煙

茂美

芳枝

文子

きみえ

ひろし

章峰

青湖

ちかし

叮紅

久子

あきら

草丘

蘭水

明子

篤子

治代

多喜

れいじ

鹿太報

和歌子

江美

鹿太

モトコ

まさ

六浦

弘治

孫等の帰省火花を買って待っている

一発にこめた老舗の三代目

浴衣掛け裾が気になるつむじ風

埋み火を甦らせた遠火花

定年になっても早起き花に水

夜鳩鳴く寺に泊った一人旅

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

ひんやりと谷はわたしをたしなめる

渓谷でみそぎする定年の垢

かくれ里谷の深きよかずら橋

谷底で受けた情けに今日の僕

さよならの裾が山越え谷を越え

谷の向こうの明り見届けてから眠る

三の谷あたりで空気に入れ替える

谷川の音をたよりに迷い道

谷底へ蹴落すわたしの猜疑心

制服のベルト少年らしくなる

中年はベルトの穴から自覚する

自分では結ぶぬ帯を解く娘

ネクタイを結びぬ職にある人気

日々好日いつもどこでも自然体

家の糞出ます自然に脱いだ靴

過疎に吹く自然の風が澄んでいる

羅漢さん自然に心なこませる

大自然などと怖そに言わないで

ふるさとの自然の味がよろこばれ

生き物がみんな元気でいる自然

夢の助

正治

満寿蔵

澄子

十四郎

紫香

いわゑ

義子

絹子

松煙

自然体で暮らしストレス溜まらない  
 他愛ない話弾んでかき氷  
 病院で会いお互い齡でんな  
 冷や奴猛暑の夏に天下取る  
 裸婦像にウインクされた美術展  
 八月が巡ると蟬が泣きさじやくる  
 母の味独り占めする帰省の子

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

すき間風あつて我が家の笑いあり  
 梅雨明けの雷どんとぶつ放す  
 土蛙早くお逃げよ蛇がいる  
 子が噛んだ菌形の痕がまだ消えぬ  
 有名になればマスコミ逃がさない  
 ベランダが満艦飾の梅雨晴れ間  
 無理のない袋に包む青い梨  
 札服のネクタイ忙し白と黒  
 ときめいてめくる塔誌や梅雨上がる  
 改心をされても息子戻らない  
 もしかしての夢が財布の紐を解く  
 路地裏の小店のフアイトいいおまけ  
 物溢れ美食の中に居て不況

京都塔の会

松川 杜的報

転んでも生んでもニュースになるスター  
 人間不信暗いニュースが多すぎる  
 定年後ニュース見るよりテレビらん  
 ケネディ家まさかまさかのニュースきく  
 折り返し点でニュースにつく尾鰭

静子 トミエ 萬的 千代子 周信 諷云児 春蘭  
 あき 實 タミ 輝夫 水笑 晴翠 久仁於 勝視 幸夫 高明 虹汀 四郎 正剣

孫からのニュース待つてるエアメール  
 ライバルの矢がゆつくりと僕に向く  
 自公が右向け右で突っ走る  
 命かけた女に刃向けられる  
 右向けと言えば右向け夫です  
 そつと発つ故郷の駅は振り向かぬ  
 風吸うてふるさとを向くハーモニカ  
 春の芽はいじめに負けず天を向く  
 原点に戻り耕目を埋める私小説  
 豊葦原瑞穂の国に休耕田  
 原っぱの凹座にうまいにぎりめし  
 海原の風を攜んだヨットの帆  
 原因を聞けば仲裁諦める  
 原発の安全神話崩れゆく  
 兵隊ごっこした原だった分譲地  
 原っぱに土管があったこの広場  
 ぞんざいな言葉の陰にテレがある  
 ぞんざいな口で何でもしてくれる  
 現場での会話ぞんざいな方が良い  
 ぞんざいな口ききたがる反抗期  
 ぞんざいな口きくと仲が良い  
 ぞんざいになつて一線とれている  
 空を向く鼻を天敵狙つてる  
 花盗人に立札立てる哀しさよ  
 主役食う脇役がいて盛り上がる

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

一度昼寝をしたいと思つている時計  
 お喋りが軒にかわる母の午後

芳子 諷云児 正坊 波留吉 庸佑 欣之 冬女 克治 満子 ただし ルイ子 巨詩 飛鳥 和歌子 輝美 紫香 豊次 福子 白溪子 典子 求芽 年代 武庫坊

まあ見事に泳いでいますひる寝の児  
 子や孫のテトラボットの役どころ  
 浮き草は波にまかせて稚魚育て  
 広重の波に富士山のみ込まれ  
 朝早く好きもの同士万歩計  
 好きな人とご飯ゆつくり食べている  
 好きなという字も嫌な字も女偏  
 酒好きの酒で磨いている命  
 コスモスの海でやさしい夢を見る  
 眼の裏にロマンが浮かぶ秋桜  
 君をすり抜け秋桜に逃げる  
 コスモスの呼吸に合やす蝶の翔  
 喧嘩やめとこごらんコスモス笑つてる  
 デリケートな振りが上手な友達  
 利き酒の名手微妙な舌の技  
 デリケートを自慢している無神経  
 満ち足りて沈む夕日へ雫する  
 竹細工の指は魔法だな  
 素面では僕は君が代歌わない  
 好きな人好きと言えないデリケート  
 ありがとう盲導犬のデリケート

川柳塔鹿野みか月

土橋 螢報

腰まげて慈しむ荷を送りだす  
 酒はまだだめかと友を慈しむ  
 長く生き呆けた寝顔を慈しむ  
 七難は我にぞありといつくしむ  
 五十年農という字を慈しむ  
 ビール酒ぶつり断てばそれもよし

保子 かつ乃 実満 初子 睦子 武子  
 三男 東雲 信博 たもつ 春蘭 欣之 千里 ますみ 半蔵門 アキラ 一風 和歌子 剛治 弘直 柳伸 太郎 ダン吉 勝美 隆盛

いい音で谷の流れが夏を呼ぶ  
 一枚の蟹で皿一杯を盛る  
 陽を呑んで風紋息を吹きかえす  
 紫陽花寺の幽霊は美しい  
 ほおかぶりした幽霊をつかまえる  
 幽霊が来たなら私も化けてやる  
 畑作を慈しんではひとりごと  
 月下美人一夜のいのち慈しむ  
 慈しみくださる太陽今日は出ぬ  
 煮詰めるほどに大きな泡になる仕上げ  
 万匹の蟹が泡吹き抗議する  
 いいチャンス一泡吹かすかくれんば  
 陽が昇る泡一瞬を輝かし  
 国歌国旗に泡を飛ばして論じ合っ  
 泡だつてやがては海を怒らせる  
 限りある泡ながらえて生きんとす  
 水槽の酸素の泡と起きている  
 海に出るまでは消えまいとする泡  
 原罪を抱えた泡のひとつなり  
 白球の戦はみんな互角なり  
 夜が明けのまで互角の綱を引ている  
 互角だと言つてもうらやば満足だ  
 産声は互角皇女もうちの子も  
 わがままを互角に通す俄雨

八重子 喜与志 幸枝 みさ子 隆風 久枝 孔美子 忠良 一京 弘子 茂 智恵子 富久江 節子 きみ子 諷人 宣子 盛桜 石花菜 和歌子 はるお 汲香 くに子 螢

川柳 さやま 酒井 靖子 報

無理するなするなへ雑草ばかりのび  
 無理するな父の言葉は一つだけ  
 雑巾を干して女の顔になる

恵美 純子 多美子

老人の愚痴が出て行く雨合羽  
 ボランティア月に一度の豆ごはん  
 お陽さまに抱かれた寝たし布団干す  
 何もかも夢だったのか雨の朝  
 土匂うモンペを干して姑の幸  
 太句に体を干して草むしり  
 本番を見ている親が落ちつかず  
 干し魚みやげ話もついてくる  
 試験すぐ本番強し自己暗示  
 干からびぬように毎日本水をのむ  
 干からびぬように毎日本水をのむ  
 おずおすとボランティアに初参加  
 ボランティア温もりそつと分ち合っ  
 さしのべた手が温かいボランティア  
 古希干せば節目節目に味がある  
 夏本番届保の糸です赤とんぼ  
 梅雨晴間ころのうさも干しに出る  
 ボランティア今日の笑顔に会いに行く  
 どの子にも期待で干した白いシャツ

かわはら川柳会 上田 俊路 報

美智子 末野 八重子 とみ子 かほ子 つや子 かず子 美紗子 泰子 房江 美緒子 君代 富美 ヒサ子 毬子 可住 靖子

楽しみは年中行事遍路旅  
 プレゼント開く楽しみ明日にする  
 収穫を楽しみにして鋏をさつ  
 結び合う手と手楽しい輪をひろげ  
 声かけて楽しさ拾う試歩の道  
 運動会親子が汗の健康美  
 夕映えに流した汗が明日を呼ぶ  
 農作業ひと汗流す酒の味  
 玉の汗珠ひろいでも夢がある

静生 静子 聴 泰良 正子 秀子 悦子 余吏子

運命線の汗がいまだに乾かない  
 わかあゆ川柳会 松本はるみ 報  
 アマゾンの緑が減つてゆくさむさ  
 緑の香詰めて都会の子に送り  
 もつれては解けもつれてはの人生よ  
 目にする緑のパワーにゆるむ煩  
 四方から緑が攻める所に住み  
 今日もまたドラマの続きが待っている  
 嫌な夢眠れぬままに夜が白み  
 もつれてももつれても二人の子守唄  
 たつた二度の夫婦げんかもドラマめき  
 損得の話になるともつれだし

はびきの市民川柳会 安芸田泰子 報

俊路 一壺 美喜 昇 敦子 泰子

奥の手を持っているのでおとなしい  
 トランプを切る程溜まる診察券  
 森羅万象調子おかしい世紀末  
 聞き上手のん気に暮す窓が好き  
 負け迷つて逃して悔む意地つ張り  
 逃げ迷つて思い出残る艦載機  
 カーナビをパートナーにして都市迷路  
 トラ四位去年最下位よしとする  
 いづもやで今年もつなぎ食べている  
 妬むなよと草葉のかけであかんべえ  
 ほどほどに妬んで絆を太くする  
 嫉妬する女は爪を磨いている  
 妬むには高嶺の花と知っている  
 リストラで生きる権利が重くなり

はるみ かつ子 聖子 恵美子 好栄 ちよえ 鈴江 博利 清泉 白汀

専平 満寿蔵

介護法生きる権利を脅かす  
ぬくぬくと幼稚園児が育つていく  
愛も添え手作り帽子あたたかい  
ぬくぬくと追従の辞に乗ってくる  
八月忌ぼくにはぬくぬくの御飯  
ぬくぬくとくらし明日を見失う  
ぬくぬくと育ち突然散ったバラ  
ぬくぬくと余生を過す為の汗  
抜け道を考えているふところ手  
薬一本死んでも離さない覚悟  
朝帰り覚悟を決めてチャイム押す  
覚悟決め少し気持ちに出た余裕  
リストラムも覚悟の靴を今日も履く

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

針ほどの哀が無傷にしてくれる  
助さんが稷峠を越えてきた  
じゅんじゅんに自己紹介の番がくる  
助けたと毎日言われ離婚する  
じゅんじゅんに山まで消える開発地  
辛くとも口には出さぬ意地がある  
たつぷりの塩をきかせて無傷です  
外海へ出るためらう雑魚でいる  
麦笛を追いつ追われつあげひばり  
大安の吉日選び海開き  
遊びごころ上手な口で騙される  
助の人に助っ人ほしい老いのケア  
桃色の花じゅんじゅんに食べている  
ビルが建ちじゅんじゅんにへる兎小屋

絢子 保江 吐来 ゲン吉 洞庵 みつこ 志洋 重人 昭子 俊男 庸佑 猿杓 和歌子 石花菜 信子 一夫 單車 春恵 昭恵 あけみ 明美 かつみ きみ子 寛子 螢子 一枝

スタートの笛が鳴っても立っている  
自尊心傷つけまいと笛吹かぬ  
はたる川柳同好会  
田辺正三郎報  
国旗国歌法成立可決日記帳  
ひとりの口養う朝の台所  
養っていたのは腹の虫だった  
養った子に先々を案じられ  
戦中戦後生きて忍耐養われ  
お隣の犬に挨拶旅の朝  
お悔みの挨拶苦手もごもご  
お悔みは深い一札だけにする  
あいさつにシャンペンの泡消えてくる  
挨拶は苦手駄洒落は得意です  
栄転へしやちほこばった腰を曲げ  
無礼講挨拶抜きに気は抜けぬ  
挨拶が長くテレカが尽きかける  
あいさつは妻がみかねてしてしまふ  
おりがたう挨拶やめて座り込む  
おはようが仲々いぬ茶髪族  
断りをフアックスでする気の弱さ  
フアックスで地図描いてきて誘われる  
借用書フアックスで送る馬鹿息子

栄乃 多哥由 柳童 桂子 喜美子 まみ子 雪子 直次 吉太郎 保子 螢柳 正安 ただし 久子 正三郎 実 和歌子 肋骨 祥風 千里子 美津子 佳子 国彰 華水 比斗志

あなたから私にかかる虹の橋  
吊り橋を揺らす子供の声ひびく  
すれちがいでドラマを生んだ数寄屋橋  
裏切りの心の橋は渡れない  
発見のカメラが責める不摂生  
見つかってから大声で泣く迷子  
小さい嘘発見したが目をつむる  
あの口につけたい嘘の発見器  
発見が文化を変えた火打石  
良いことが見つかりそうなる旅に出る  
結婚後見つけた癖に目をつぶる  
散歩中新発見の憩いの場  
半世紀過ぎて我が癖新発見  
励まされ片減りの靴今日も履く  
励ましの言葉が重い時もある  
励ましたつもり言葉気にかかり  
褒め言葉祖父母励ますよい菜  
おはよの声と笑顔に励まされ  
新入りの句に励まされペンをとる

清史報 中後 原みさを報

川柳塔おとり  
肩書きをやつともらった名刺刷る  
年金を拜んでやつと旅に出る  
やつと心通う歳月嫁姑  
二度三度検査でやつと病名がついた  
退職でやつと故郷の土をふみ  
正座からやつと胡坐に座が和み  
明日から二学期やつと風おち  
躓いてやつと気付いた生かじり

修也 美佐子 生米子 利ぼん 慶一 太一 てる坊 清史 平和 公治 雄造 雅視 五雄 優子 さだ代 恵子 悦子 サト美 由多香 風花 佳子 伝住 小生 舎人 紀子 登美

業という炎の輪をやつとくぐり抜け  
 日が西によくやくる気湧いてくる  
 人生にやつと一つの区切りつけ  
 七年目やつと医師から大鼓判  
 どたん場でやつと落した目の鱗  
 むこ殿をやつとつかんだ末娘  
 愛称で呼ばれやつと社になじむ  
 複雑な渡航手続きやつとパス  
 派手な傘さして楽しい雨にする  
 派手な音して茶碗二つ割れ  
 閉店の派手なチラシに欲を買い  
 打つ走る派手な歓声甲子園  
 派手好きで上手に化粧のついで  
 横文字の花が幕前を賑やかす  
 墓場まで一緒に旅のケーキ切る  
 墓石に権威ベタベタ塗りたくる  
 炎天下明治生まれは野良仕事  
 この暑さ悪玉菌が羽根のばす  
 原爆忌あの日も暑い朝だった

川柳塔なら

坊農

柳弘報

艶子 義弘 庸二 富貴子 黙光 道子 清子 敬之介 宏章 千秋 彰雄 雅道 崇 せつ子 孝子 邦昭 仁子 和子 みさを

相合傘は濡れてる方が惚れている  
 愛用の自転車盗られ愚痴の数  
 愛用の仮面ときどき裏返る  
 清水の山も崩れる暴れ梅雨  
 あの峰に僕の青春置いてある  
 雲間から星の王子が来る子感  
 愛用の品も孫には弱い祖父  
 流れ星の向こうに君の家がある  
 愛用のグラスにひとりちろきく  
 愛用のパイプ名案しほり出す  
 吐く息も言葉もいやな倦怠期  
 愛用のステッキ事故を物語る  
 毎日食べ今日もおいしい白いめし  
 ふる里の名も無い山に癒される  
 飽食が青い地球を食い荒らす  
 満天の星へ一途な愛を抱き  
 流れ星迷いが一つぶつ切れた  
 うれしくて一番星をまつている  
 愛用の秘薬を飲んでるウフフ  
 星空へ嘘が言えなくなってる  
 ヤマ場だけちらりと見せる予告編  
 山脈の春泰吉の視野の中

川柳大阪

坊農

柳弘報

天狗 春蘭 茂雄 あやめ 真理子 孝子 雅巢 桜竜 とし子 悟郎 良一 高栄 絹子 眞生夫 富子 秋雄 洋子 ますみ 朝子 一風 萬的 道子 すがお 多香 楽子 芳香

世間には軽い決意が浮いている  
 マイホーム妻の決意にひきずられ  
 親を捨てて国を捨てても添う覚悟  
 客扱い流石女将のそつがない  
 子育てに離婚話を妻がする  
 子育てが終わった今も慌ててる  
 客寄せに安い玉子がカモノにされ  
 娘の客に父が一番気を遣い  
 慌てない母の背中を見て育ち  
 決意する男はじつと空を見る  
 鍵が無い置いたつもり鍵が無い  
 土壇場の決意へ紅の一字  
 これほどの不正某国なら死刑  
 有事法隣の友を敵とする  
 ナンバー2静かな決意持っている  
 大阪の尺度に合わず慌てぶり  
 決意した少年の目が美しい  
 隣客のお国訛りと握手する  
 回るスシ客がないから止まつてる  
 髭ぼうぼう万年床に破れ靴  
 核ゼロの決意一つもない総理  
 客引きの目は懐を見抜いている  
 美少女も万年床でだらしがない  
 珍容へ封を切られたナポレオン  
 リストラの話に妻が取り乱す

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

信醉 河南子 叭笑 雅巢 美花 鉄心 川童 柳昌 青道 かよこ 朝子 本蔭棒 洛醉 一風 比呂志 一步 希久志 まつお 金太 ダン吉 柳宏子 笑風 重人 柳弘 弘治 愛

おろおろと道に迷った老夫婦  
妻の留守おろおろばかり茶も沸かぬ  
癌告知おろおろ電車乗り過ぐす  
てっぺんのひまわり太陽ひとり占め  
太陽にお早う今日も生きています  
落陽のベンチノルマが手に余る  
無心には晒せぬ今どきの太陽  
不登校の少年が描く黒い太陽  
ひまわりよこつちにむいて私は太陽  
お日様と呼んだら優しくなる太陽  
太陽さんさんとふる神経内科  
ふるさとで変らぬものは鎮守さま  
ふるさとに太郎花子はもう居ない  
風船がずら私もふるさとへなびく  
初蟬の声きく朝や今生きています  
決闘の決闘ママにきめてもらう  
ひまわりは日照権をもっている  
だんだんと美に遠くなる未完の絵  
飯の世の舞台は跳ねて幕を引く  
葬送の人格白く残りたり  
虫歯など一本もない総入れ歯  
動脈となった田舎のたんぼ道  
対話して心弾ます人という  
日も陰り奴豆腐を買いに出る  
灯を消して月に小窓をあけておく

ヒサコ 十四郎 和子 静 夢之助 歌子 年代 武庫坊 千恵 美子 薫 紫香 光穂 芳子 正子 沙置子 恵子 富美子 キク子 比ろ志 一笛 日出男 日渉 昭三 義芳

散歩道 木立で交わす朝の声  
問題をかかえエンピツなめている  
無精氾々どうあろうとも憎めない  
問題になるので立つて話する  
問題は君の笑顔の中にある  
傍目八目 問題点がよく見える  
酒飲めば笑い上戸もつるさいぞ  
愛情も過ぎれば本当小うるさい  
言葉選る左遷の友を送る会  
見送つてからがさびしい夕茜  
面影の人に合掌 野辺送り  
一瞬にわたしの心見抜く猫  
八月のポストは鈍い返事する  
終バスは今出たばかり夏の月  
耳栓の透き間を漏れてきた噂  
鋭よりもするどいペンに倒される  
蟬しぐれ尽きる命のほとばしる  
SLが見たくてすすらん見えています

知香子 悟郎 ただし 慶子 しげお 重人 正坊 一笛 庸佑 露児 紫香 肋骨 和歌子 女 女 きく子 飄云児 寿美子 正三郎 杜的

正論を曲げれば自分消えている  
苦勞してしあわせ掴む七曲り  
曲がった事が嫌いな父の貧乏性  
曲がったあかんと良心が叫ぶ  
自分ではまともと思つ膽曲り  
直角に曲つて腹をさぐられる  
また摩擦起こす血の気の多い人  
自我少し殺せば摩擦起るまい  
真心のこもることばの礼でよい  
心から尽せば真心が返る  
真心がすつしり重い募金箱  
真心こそ荷物にならぬよい土産  
こだわりは抹消せずにはラッピング  
抹消をしたくない私の妥協せ  
困るのは誰抹消出来ぬ妻がいる  
債権が債務に変わる二字抹消  
家庭菜園胡瓜は曲るものとする  
ススメスムードに押されまっしぐら  
押し押せムードに押されまっしぐら  
すき間風夫婦の摩擦に散る火花  
真心にふれたか回る風車  
リハビリーへ邁進させた嫁の愛

千博 正一 慶人 市子 重人 柳伸 庸佑 叙子 たもつ 雅文 直子 章久 ひさ乃 凡子 東雲 半蔵門 文秋 悟郎 勝美 久子 蛙

明日こそは素直になろう杉木立  
借景に杉の木立が立派すぎ

裸婦像の腰のまがりがある魅力  
へそ曲りきつと淋しい人だらう  
街角を上手に曲るチンドン屋  
いくつかの角を曲つた顔のしわ

水面下やこの背伸びも目覚ましい  
節目節目を逃れる神たのみ  
背伸びして戦後支えた背骨です  
倒すのも倒さないのも腕次第  
背伸びして牽制し合う選手村

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報 吉太郎 周信 吉太郎 度 川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

老いの坂節目節目を大切に  
 弟はいつも末席にいてつかれ  
 少しだけ背伸びした分荷が重い  
 節高の荒れた母の手仏の手  
 背伸びだと知らせる勇氣今もない  
 若いから一生けんめい背伸びする  
 均等法女性どこまで背伸びする  
 背のびする夢船が雲に消え  
 雷の合図無視したぬれ鼠  
 夕映えの海に向かって背伸びする  
 節々に竹は想いを溜めている  
 背伸びして渡る浅瀬に試される  
 節目節目に花は繚乱してみせる  
 弟の分もお祈りしておこう  
 弟は母と花見か向う岸  
 振り向けば若さが背伸びさせていた  
 忿怒仏たちの歩幅が速くなる

川柳高知

川竹

松風報

品子 やえ 麗 寿々子 菖 ゆき 春枝 ふみ すみえ 瑞枝 玲子 てい子 日枝子 由美子 文葉 恵子 荒介 和江 典雄 美々 六峰 功雄 孝雄 啓二郎 幸節 圭風

姿見を拭いて小皺がまた増える  
 古傷が拭いきれないOB会  
 失恋というさびしさは拭えない  
 青田吹く風が運んで来たトンボ  
 森林浴妻も緑と同化する  
 十階の視野一杯にある緑  
 クレパスの緑の色が減る五月  
 旬の味緑が旨い朝の市

岩美川柳会

石谷美恵子報

快風 圭二 佳風 てるみ 三郎 京子 松風 子龍 単車 大漁 季芳 螢 圭一郎 静生 一夫 蟹郎 忠良 和歌子 きみ子 公乃 一京 一瑤 芳江 裕子 たぬ

口だけのサービスころろ寒くさせ  
 川柳クラブわたの花 吉村 一風報  
 好き嫌いはげしい人の孤独みる  
 留学の下にちいさく願望と  
 能舞台心の汚れ洗われ  
 木綿着て十五の春を思い出す  
 あの橋が有るからここに違くない  
 橋わたしあつて二人の今がある  
 吊り橋のまんなかへんでさめる恋  
 妻かばう一喝覚めた大寝言  
 慣らされてかけかえなしの夫婦橋  
 モノレール欲しいと思う歩道橋  
 橋一つかり暮らしが変わる島  
 四国から橋を渡って来た魚  
 さわやかな朝顔のよな友がいて  
 廃線の鉄橋すずめ散歩する  
 とときめきか波が乱れる心電図  
 何が気になるぬか波が牙をむく  
 プールの日よるこんで行くランドセル  
 ブスモスの肩のしこりをほぐされる  
 歩道橋わたる元気で短気な人  
 亡父がよくばやいた橋を通過中  
 好きにしていいたいと言うからやりにくい  
 七夕や天の川にも銀の橋  
 人間の最後の欲は安楽死  
 姉さんはひまわり私はコスモス  
 波花に炎える沖繩オオサンゴ  
 歩くだけプールへ通うダイエット

美恵子 幸枝 隆盛 寿代 信子 友司 朝子 一道 ますみ トシエ まさと いつふみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 剛治 宏 道子 君江 和歌子 春子 一風

歩道橋いぬも歩いて渡るなり

川柳塔打吹

米田 幸子報

鬼遊

煮物掛け電話に夢中真つ黒け  
肩一つ濡れて幸せ小さい傘  
幸せか少し気になる恋仇

雨だれが眠れぬ夜の子守歌  
よれよれのなじんだ財布捨てきれず  
よれよれにならぬウィット持ち続け  
よれよれの日記に亡母が生き返り

黒衣着てエレキギターを弾く和尙  
カラス君たまには赤のドレスでも  
黒持てと仇に言われ血がのぼる  
甘い恋親が仇となる両家

關魂をめらめら燃やす恋仇  
雨降りはやゆつくり充電しています  
よれよれが億万長者だったとは  
雨が降る一升瓶が空になる

恋仇風の便りは侘び住い  
よれよれの男が正論ぼつり言っ  
いがい飯海の話もてんこ盛り  
ニッポニアニッポン朱鷺が誕生す

よれよれの縄でも二本なら締まる  
よれよれに酔うと女は気が強い  
よれよれの薊の棘に気がつかぬ  
雨の日は逢える気がする図書館へ

貿易の黒字は所詮蟻の汗  
葬列の黒一色も多種多様  
現職の誇りよれよれ着させない

玲々 雄々 陸子 喬水 きみ子 芳光 和歌子 一夫 たくみ たけ代

松盛 玲子 雄々 陸子 喬水 芳光 和歌子 一夫

鬼遊

セツ子

克枝 龍枝 貴恵 玲泉 博丈

孝恵 順子 一枝 定明 勝見

季芳 和枝 よしえ かつみ

よれよれの奥が赤い気炎の Coppas 酒  
嫁かぬ気が赤い気炎の Coppas 酒  
たとう紙をあければ母のしつけ糸  
抽象画フンフンとペレし帽

物忘れするけど紅はちゃんど引く  
母娘よく話題が尽きぬ長電話  
もう泣かぬ女にさせた日本海  
力まずに笑顔で行こう女坂

遠い日の記憶の糸をたぐる老母  
童話集挿絵が夢を溢れさせず  
夏過ぎて海辺の貝のひとり言  
太陽とたわむれている海の青

花梢 美代子 春蘭 和歌子

久芽代 石花菜 節子 幸子

仲良しの姉妹なのに恋仇  
黒い闇影も鴉もほっとする  
触れ合って見れば茶髪も人の子だ  
よれよれになっても後にまだ引かぬ

富柳会

池

森子報

ハードルを低く置きかえ共倒れ  
届かない螢が一そう美しい  
辛辣な言葉の裏にあった愛  
雑草の這いつくばって生きたる知恵

あたたかい港へ帰るプーマラン  
バージンロード次のドラマへ娘を渡す  
神様にまだ隠してる胸の奥  
ヒソヒソ話耳が大きくなってくる

残高を横目に旅はまだつづく  
パンカラが時の流れに添ってきた  
明暗を分けた低目の変化球  
はやる気を押さえて奥の奥を読む

時少し無駄づかいする旅の駅  
言葉だけ走り私を困らせる  
秋の恋一葉の舟に流される  
低い声でも愛情は伝わった

残り火が未だ美しい彩をなす  
おおきにとも言わず自販機よく稼ぎ  
指させば炎となりし彼岸花  
日の丸の奥からうめき声がする

逢いたいと言う人待つ風の駅  
もう一杯たのしい酒にする予定  
極細の線が描けない梅雨さなかな

夕子 潤子 和子 三和子 冬虹 正美 一慧 文子 一夫 治恵 義清 たくし 初太郎 ア登子 昭水 紅紫朗 勇

和歌子 宏

信子

勇太

夕花 信子 ひろこ

欣之 森子

満秋報

徳三 雅子 街湖 道子 のぶ子

純子 鈴美 省子 あかり 八重子 笑子 句多留 和可 亜希子 良子 絹子 かつ子 サト子 ふみ 為佐子

脇役の塩が主役を光らせる  
引き裂けぬものが瞳の奥にある  
やさしさが欲しい葉ざくら二三枚  
うんざりとするほど愚痴が森の奥  
ぶちまけて話せる低い鼻ばかり  
恋深くふかく彷徨う日の火照り  
低音が響いて悪を寄せつけず

横浜あおば川柳会 菱田 満秋報

似顔絵に似てる犯人僕じゃない  
描いた絵がたまって困る妻の趣味  
純行に磯の香りが乗ってくる  
大海のこわさ知らない養殖魚  
湯上がり母の匂いはまだ女  
口紅をつけて残り火確かめる  
言訳を女の勤が逃がさない

子の描いたママはいつでも怒ってる  
嫁かぬ気が赤い気炎の Coppas 酒  
たとう紙をあければ母のしつけ糸  
抽象画フンフンとペレし帽

物忘れするけど紅はちゃんど引く  
母娘よく話題が尽きぬ長電話  
もう泣かぬ女にさせた日本海  
力まずに笑顔で行こう女坂

遠い日の記憶の糸をたぐる老母  
童話集挿絵が夢を溢れさせず  
夏過ぎて海辺の貝のひとり言  
太陽とたわむれている海の青

花梢 美代子 春蘭 和歌子

久芽代 石花菜 節子 幸子

名画には罪がないのに差押え釣糸を垂れて自然と対話する子供には解説出来ぬピカソの絵嫁が糸引いてるらしい子の主張自画像が俺を見返す冷たい目ふるさとの民話を語る糸車東の間のドラマ幕引く土用波再婚がたぐりあつてた赤い糸

翠洋会

見玉

親だから口車にもものつてやる着飾れば女詮素火花散るパーゲンセール女の性が群れているゆかた着た女好きです夏まつり子沢山とうに女は捨ててます年なんか忘れて選ぶ派手な服スポーツカーに乗って娘をとりにくるおむすびの上手な女に拍手する装うと同じ妻かと目を見張り母さんが女の顔でするダンス孫と同じ十歳だった敗戦忌たかが女と甘く見ていたのが誤算朝顔に今日の換気をしてもらい霊柩車どんな顔して乗るだらう太古より女の戦争はしてしないよく笑う女うしろにいる花月ウエディング女冥利の晴れ姿踊り果て名残惜しそう婦人会玉碎の浜で茶髪のラブシーン

十三子 早智 政勝 敏 あらた 広和 潮華 満秋 蛙報 蛙 周信 正雄 恭昌 照子 真砂 希久子 千梢 舞夢 日の出 伽羅 澄子 千枝子 喜美子 会美 宣司 志華子 淑子 靖巳

排気ガスのがれるために釣りに行くうやうやしく戴く遺骨石と紙子を産んだ女荒波いとわなない電化してもひと戦争の主婦の朝手切金おんが用意するという動かない一人ぐらしの換気扇

川柳ねやがわ

江口

サッチーと蛙シャワーに動じない難民は雨のシャワーで我慢する古里へ星のシャワーを浴びにゆく考えが甘いんだよと言えなくて甘党の店にも指名手配など甘いこと百も承知で許す気に災害で工事の甘さ露呈するつまずいて知った甘くはない世間甘い水一口飲んでから落目末っ子の特権母へ甘えてばかりいるこの歳になつてもめまい甘いキス子に残す地図から消した甘い道大物の勘狂させたのは女ワイシャツへビクリ動いた妻の鼻はつたりのつもりの勘が射る勘どころ知つてる妻に逆らえぬ最後まで勘さつとシナリオ変えておく包み隠さず話す妻は出たまんま辛うじて老舗を守る包み紙真心の包みは重い小さくても

東雲 千歩 絹子 さと美 義 鬼遊 度報 勇太郎 日出国 度 あやめ とし子 光子 一笑 庸佑 かすみ ルイ子 朝子 洋 波留吉 仁清 順三 冬 礫 一風 仁 博泉 一途

テープ切る体を包むバスタオルむずかしい話は酒で包み込み美しく包むあなたと歩いた日さりげなくお世辞に嘘を包み込む霧深し空港の空旋回中この辺で止めりや薬になるお酒手抜きだと言われたくない冷奴ひたひたと歩きつづける闇の音人形と並んで話すワンルーム

川柳藤井寺(前月分)

高田美代子報

初つばめ今日はいいい日になりそうだ心ない蛇がつばめの巢を狙い五月雨に若きつばめと北新地特急のつばめ寝台なつかしや巢から口出すつばめも早い勝ち海峡を越えて一直線にきたつばめ末亡人若いつばめに外車買いい傾いた家だがつばめ来てくれる来年もお邪魔しますとつばめ去る焼き鳥屋の軒にこりないつばめの巢電線につばめ音譜のよう止まり胃の裏に時々恨みへばり付かんばれが時々肩にのしりかかる日記帳ときどき恋があるページ車椅子時々足が愚痴をいう晴れのち雨時々あらし呼ぶ女時々は古いレコード聴く枯葉時々は叱られに行く父の墓

高栄 たもつ 茜 小路 三郎 文秋 惠子 亜成 弘一 扶美代 史郎 恒雄 栄一 宗一 夕花 利武 昭子 かつみ みよ子 志洋 終一 六點 敦子 よしえ 瑠美子 重人

時々が毎度に妻の口答え

時々は小言も言うてみたい仲

枯れていく命ときどき火をつける

鬼の顔時々妻に見せて置く

心変りしたのか青いバラを抱く

四つ辻で心変りをさせた風

心変りの男に研いでいるナイフ

また何時かなんて約束秋の月

心変りさよならを言うのはおんな

あじさい寺に心変りを置いてくる

あの日から言葉飾らなくなった

握手しようよわたしもユタだから

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

廃屋に人待ち顔のカラス瓜

したたかに生きる女の殻を脱ぐ

濁流のうず巻く泡が人を呑み

流産の告知が胸を突き抜ける

孫の吹くシャボン玉には虹がある

片肌を脱いで乙女のバチさばき

妻の歩幅の違う疲労感

特売のカツの衣が大きすぎ

ライバルに気付かぬように脱皮する

母の忌へぶらぶらむせぶイヤリング

シャンブーの泡に溺れた縫いぐるみ

これっぽちの段差に一度立ち止まり

ぶらぶらと残暑を浴びている散歩

毯二つ抱いて少女は蝶になる

葬儀屋が帰りがっかり陽が落ちる

病葉になって着地を考える

川柳藤井寺

高田美代子報

夏美人どこで決めたらいいのやら

労働着女はみんな美しい

網笠が美人に見せる阿波踊り

ひと彩を足せば美人に描ける画布

つかの間の喜び月下美人にある命

光らない美人が僕の側にいる

美人とは定義並べてビヤホール

画布を抜け出ておいでと美人を誘う

美人の娘なかなか結婚してくれぬ

八頭身平成の世ははくほどに

美人家系私一人が乱してる

ああ不覚美人の側に座ってる

餅肌の美女といまだにお友達

美しく生まれた罪が恐ろしい

美人もろて息子は苦勞しています

美しい人てよかった花粉症

天国へ戸籍移した美房さん

いきいきと移植の臓器鼓動する

手さぐりて移す小さな思いやり

移してはならぬ花野の冬景色

何時からか椅子が廊下に移される

花から花とがめはしない蝶の性

大事な願ひ笹の一番上に吊る

神棚で福笹あくびする不況

八月の折りを乗せる笹の舟

願ひ事多くて笹がつく吐息

五楽庵

宗一

良子

志洋

絹歌

春蘭

扶美代

みよ子

和子

恒雄

喜代子

婦美枝

終一

正一

花梢

昭子

かつみ

修六

葉

美子

森子

アキ

和樹

桂子

史郎

悦子

大八

笹飾り欲がいっぱいぶら下が

願ひ事まだありますか笹しなる

恋風に触れた笹からさわぎ出す

笹船の甘さにコロリ騙される

ローズ川柳会

山崎 君子報

大会で裏方それがバネになり

ぷつと吹く西瓜の種のなつかしい

西瓜きらい不思議がられてふしぎがり

大会旗汗と涙によく似合う

大会で記録のばして行く選手

大ぶりの西瓜供えて集う盆

西瓜切る一瞬夏がほどばしる

絵日記に秋が空からしのび寄る

西瓜呆れる中は日の丸國の旗

丸く住むにはほどほどという潤滑油

四半分の西瓜のあまる老いふたり

甲斐あつて音楽祭の華となる

人工の浜に歓声西瓜割り

発表会客はお義理の人ばかり

秋口の西瓜に家族の舌つづみ

栄一

昌子

瑠美子

六点

てる

ミサヲ

キク子

みつ子

藍

哲子

トミエ

貴代子

まさお

澄子

いわゑ

年代

君子

義子

笑女

川柳塔東大阪カルチャー教室開講

とき 10月28日(木)午後2時-4時

以後月一回・第4木曜日の予定

会場 布施駅前市民プラザ(通称ヒアレ)

講師 河内天笑 会費 500円

◎お申込みは講師または川柳塔本社へ

第49回 富田林市民文化祭  
川柳大会

と き 10月31日(日) 12時30分開場  
1時30分出句締切

ところ 富田林市中央公民館2階ホール  
(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ約200m)

おはなし 土田 欣之氏(ふあうすと)

宿題 (各題2句・席題なし)

「紙」 高田美代子選(川柳藤井寺)  
「息」 松本初太郎選(番傘北斗会)  
「石」 坂本 晴美選(吹田川柳会)  
「異」 田頭 良子選(うめだ番傘)  
「点」 河内 天笑選(堺川柳会)  
「拾う」 池 森子選(富柳会)

会費 1500円(軽食・作品集・参加賞呈)  
賞 秀句呈

懇親会 4000円(当日受付)

連絡先 池 森子(0721-25-0603)

主催 富田林市・富田林市教育委員会  
(財)富田林市文化振興事業団  
富田林文化連盟

後援 富柳会

第22回

寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(祭)

正午開場・1時出句締切

ところ 寝屋川市立総合センター4階

(京阪寝屋川市駅下車、バス西口①乗場  
より守口市駅行、③乗場より守口市駅行  
太間公園行、古川橋行)

兼題 (各題2句・席題なし)

「満腹」 江口 度選  
「個性」 河内 月子選  
「賭ける」 濱田 良知選  
「辞書」 高杉 鬼遊選  
「続く」 上田 佳風選  
「自然」 橋高 薫風選

会費 1000円(出席者)

投句 10月29日までに必着  
(郵便切手400円分同封のこと)

投句先 〒572-0063

寝屋川市春日町9-9 高田博泉内  
川柳ねやがわ宛

第46回 文化芸術・芸能祭  
八尾市川柳大会

と き 11月7日(日) 正午

ところ 八尾文化会館4F第1会議室  
(ブリズムホール)(近鉄八尾駅下車)

宿題 (各題2句・午後1時締切)

「ぴったり」 板野 美子 選  
「手ぶら」 池 森子 選  
「亀」 大村 美千子 選  
「レンズ」 吉村 一風 選  
「取引」 中田 たつお 選  
「箒」 前川 千津子 選  
「評判」 橋高 薫風 選

懇親宴 3500円(希望者のみ当日受付)

主催 八尾市・八尾市教育委員会  
八尾市文化芸術・芸能祭

実行委員会

後援 八尾市民川柳会

川柳クラブ「わたの花」

西宮北口川柳会25周年  
句報「きたぐち」300号

記念川柳大会

と き 11月23日(祝) 11時半開場・1時締切

ところ 西宮市民会館1階大会議室

(西宮市役所南隣・大会議室入口は会館南側)  
阪神電鉄西宮駅北出口から徒歩5分

おはなし 川柳塔社相談役 西田 柳宏子 氏  
課題 (各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「宮」事前投句 黒川 紫香 選  
「やさしい」 門谷 たず子 選  
「てのひら」 川島 颯云児 選  
「大切」 高杉 鬼遊 選  
「約束」 八尾 和加子 選  
「サービス」 福島 直球 選  
「ふり返る」 森中 恵美子 選  
「名」 橋高 薫風 選

会費 2000円(軽食・記念品・発表誌呈)

締切 事前投句10月30日(ハガキ使用のこと)  
懇親宴 大会終了後3階中会議室・5000円

投句先 662-0841 西宮市両度町2-19-515  
山本義子(☎0798-65-0940)

岸和田市文化祭参加  
岸和田川柳会創立五十周年記念  
第49回 岸和田市民川柳大会

と き 10月16日(土)  
正午開場・1時30分出句締切  
ところ 岸和田市立春木市民センター3階  
(南海電車春木駅下車100m)

おはなし 阿 萬 萬 的 氏  
兼題と選者(各題2句・出席者に限る)  
「指輪」 松原 寿子 選  
「慣れる」 吐田 公一 選  
「足跡」 芳地 狸村 選  
「思い出」 西出 楓 楽 選  
「靴」 梶川 雄次郎 選  
「味方」 橘 高 薫 風 選

会費 1500円(記念品・大会誌呈・軽食つき)  
賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文化  
協会賞・操子賞・きしせん賞  
連絡先 芳地狸村(0724-27-5029)  
主催 岸和田市・岸和田市教育委員会  
岸和田市文化祭実行委員会  
参加団体 岸和田川柳会

第33回 東大阪文化祭参加  
第27回 市民川柳大会

と き 10月17日(日)  
正午開場・出句締切1時  
ところ 東大阪市立社会教育センター3階  
(近鉄布施駅北へ5分)

ビデオ放映「まちかど探訪」「暗峠・奈良街道」  
宿題と選者(各題2句・出席者に限る)  
「毒」 江口 度 選  
「宇宙」 青木 勇三 選  
「白」 奥田 みつ子 選  
「化ける」 久保田半蔵門選  
「眠る」 森本 夷一郎 選  
「読む」 高杉 鬼遊 選  
「ふたたび」 森中 惠美子 選

各題・秀吟・佳吟賞・記念品・発表誌呈  
会費 1000円  
懇親宴 3000円(当日申し込み)  
事務局 片岡湖風(0729-65-1341)  
主催 東大阪市文化連盟  
東大阪市川柳同好会・わかば川柳会  
後援 東大阪市・東大阪市教育委員会

文化祭吹田市民川柳大会

と き 10月24日(日)午前11時開場  
ところ 吹田市文化会館メイシアター3階  
梅田より北千里行で約15分  
(阪急吹田駅西口前)

お話 河内 天笑 氏  
宿題 連想吟 竹 森 雀 舍 選  
髪 浅 雛 美智子 選  
賑やか 上 野 多恵子 選  
ふざける 長 江 時 子 選  
眩しい 奥 田 みつ子 選  
地 獄 森 中 惠美子 選

各題2句 出句締切1時(多忙者9時受付)  
会費 1000円 秀吟賞・参加賞呈  
懇親会・4000円(10月15日までに事務局へ)  
見学について どなたでも結構です。作品  
集が入用の方のみ「住所・氏名」提出下さい。  
事務局 早崎和子(06-6381-2431)

吹田市教育委員会  
主催 文化団体協議会  
吹田川柳会

第50回 市民文化祭参加  
西宮市川柳大会

と き 10月24日(日)正午開場・1時半締切  
ところ 西宮市民会館4階中会議室  
(市役所南隣・阪神電鉄西宮駅5分)

宿題と選者(各題2句・席題なし)  
「真似」 井床 芦 蘭 選  
「今夜」 西口 いわゑ 選  
「ふくらむ」 村山 勇太郎 選  
「隣」 赤井 花城 選  
「がらくた」 石井 冬魚 選  
「検査」 福島 直球 選

会費 1000円(作品集郵送)  
投句 10月15日までに投句料(80円切手  
8枚)同封の上、便箋1枚に6題各  
2句、計12句連記して下記へ。  
〒662-0023 西宮市城山12-8  
水無瀬富久惠宛(0798-73-4666)  
懇親会 会費4000円(当日受付)

共催 西宮川柳同好会 西宮北口川柳会  
学文川柳 明和川柳研究会 ほか

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳会 梨花	16日(土)午後1時から がらくた・来る・姿・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
川柳 ねやがわ	17日(日)正午から 合図・作品・国会・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
東大阪市 川柳 同好会	17日(日)正午開場 東大阪市民川柳大会	東大阪市立社会教育センター3F 本号P133参照 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市長田3-3-21 片岡湖風
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 互選「控え」・憧れ・スベア	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 鉄道・マイナス・眠る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市烏江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木)正午から 責任・コーヒー・借りる まだまだ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 箒・取引き・レンズ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 ふくべ	23日(土)午後1時から 雁・結ぶ・キッチン・「更ける」	福部村中央公民館2F研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16-3 村上信子
城北 川柳会	24日(日)午後1時から せめる・定年・熱愛・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳 ふうもん 吟社	24日(日)午後1時から 夢のあと・ジグザグ・指	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市民会 川柳会	24日(日)午後1時から スタッフ・にやにや・錆・「励む」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳塔 みぞくち	25日(月)午後7時半から 嫁・名前	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	27日(水)午後6時から 名器・女神・名誉・滅法	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都 塔の会	28日(木)午後1時から 去ぬ・場・すかたん	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太 (0724-43-4889) へご連絡ください。

## 10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 月・果物・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 選ぶ・メモリー・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	2日(土)午後4時から 逆転・泊まる・まだまだ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 わかやま	3日(日)午後1時から 火・吐息・眠る・「外れる」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 唐津支部	3日(日)午後1時半から 間・絆・とりあえず・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔 なら	7日(木)午後2時から 冒険・法・若い	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北徒歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔 打吹	9日(土)午後1時から ちよくちよく・表・裏口	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 踊る・名前・読む	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 神・走る・同じ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
八尾市民 川柳会	11日(月・振替休)午後6時から 旗・張る・菊・チャンス	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から 片隅・涙・習う	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	12日(火)午後1時半から 気軽・スリル・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘北口から 市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	第26回 堺まつり誌上川柳大会	月例会句会はありません。本号P113参照 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
岸和田 川柳会	16日(土)正午開場 岸和田市民川柳大会	岸和田市立春木市民センター 本号P133参照 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村

# 編集後記

煙抄欄に投句する場合もあるが、各地柳壇に出した句は避けること。

★平成十一年度の六賞が決定した。今年度から路郎賞・川柳塔賞の二賞の選考方法が改定され、一句のみでなく自選八句対象の作家賞という形になったことに注目したい。受賞者のみなさんおめでとうございます。

★生涯に714本のホームランを打ったベーブ・ルースの言葉に「ホームインするには、一塁、二塁、三塁とベースを踏んでいかねばならない」とある。ホームランと分かってても各ベースは回らねばならぬ。何事にも近道はない。着実な歩み努力が必要である。

★本誌の川柳塔・水煙抄欄に澎湖抄・茴香の花・各地柳壇と同一句を投句しないでいただきたい。勉強会など小句会の句を川柳塔・水

## 初心への自戒

◇わが身より痛い新車のかすり傷  
◇来てくれるだけで嬉しい見舞客  
◇これは、川柳を始めた頃の作品  
◇であるが、爾来約十五年を経た現在を觀ると、技法に長けて素直さが薄れているのに気付く。  
◇故大矢十郎師(塔社同人)が紀南の地に点した川柳の灯を消してはならぬと、心服の柳友と協力して「はまゆう川柳会」を発足させたが、やがて満四年を迎えようと

している。紆余曲折を辿りながらその度に、会の連帯や句会の在り方などについて、当初の新しい風を還流させるべく意を払いながらマンネリ化を戒めている。  
◇今年の二月一日付けで、塔社同人のご承認を頂き、新世紀へ向け古希の下り坂を鞭打つ私の胸に「初心への自戒」の意味は深く重い。  
◇馴れという大敵が棲む胸の内

(中後 清史)

## ひとつこと

○戸外での運動が気持よい季節になった。  
健康診断で骨密度を測ってもらったらかなり低く、危機感を持ったのがきっかけで、四、五年前から時々ウォーキングをしている。

○「歩いたら治ると本に書いてある(正坊)」ウォーキングを続けると、生活習慣病のほとんどは治つてしまつほど体によい事が、医学的に証明されているそう

だ。それなのに、他のお稽古ごとと違って、タダと言

うのがうれしい。意外なところ

に、道端に植えた花を眺めたり、時々の作業に移る頭の切り替え時間や、周囲の状況に応じた行動への時間が短縮されるなどの余録もある。

歩きやすい靴をはき、背筋をピンと伸ばしあごを引ると言うことは句も上手になるのでは。もつとがんばって歩かなくっちゃ。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（12月号）

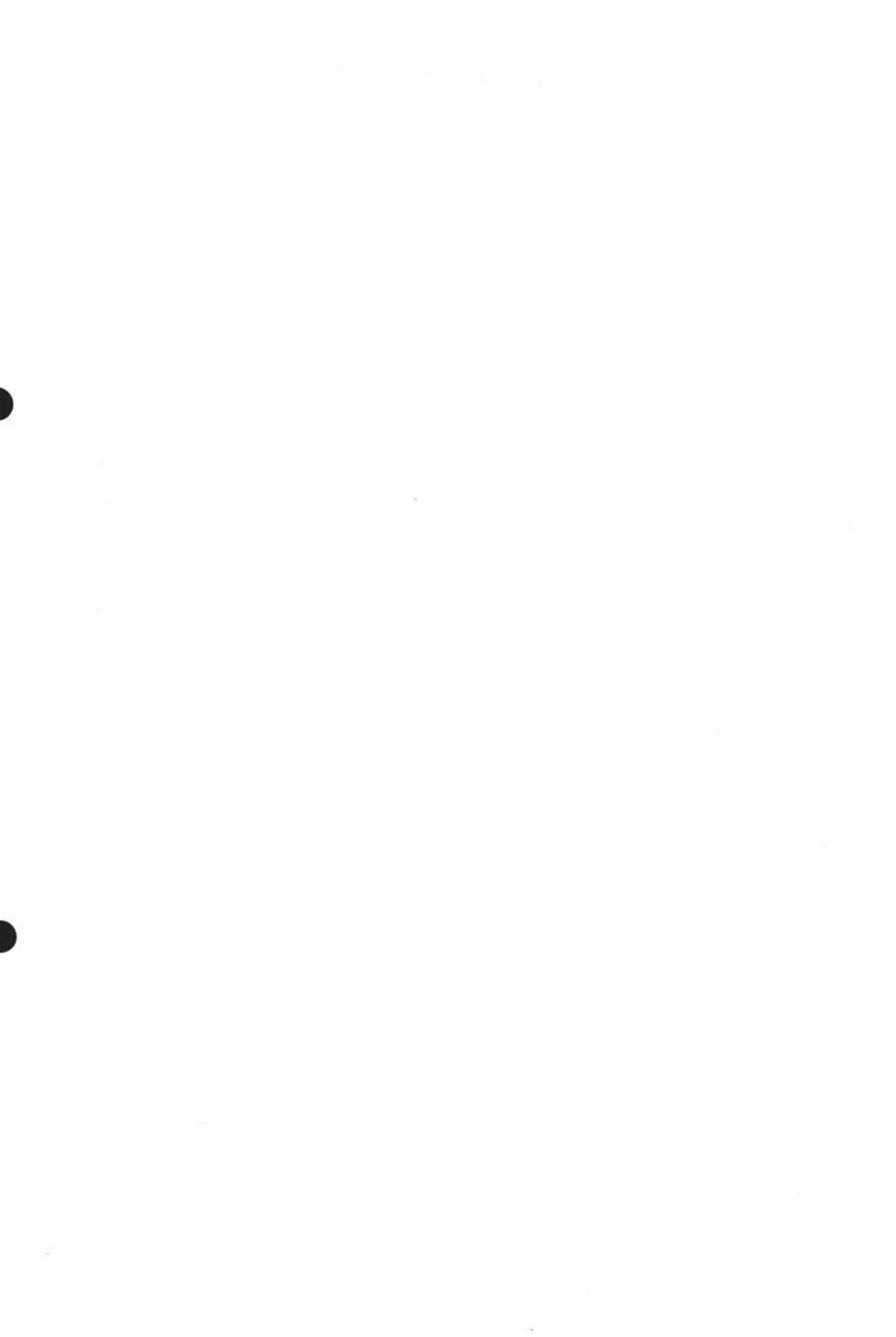
地名

雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

初歩教室 「終り」(3句)	課題吟 (3句)	茴香の花 (3句)	渺湖抄 (3句)	水煙抄 (8句)	川柳塔 (8句)
吐田公一担当	「とりあえず」 「絆」 「間」	籠西弥生選	八木千代選	河内天笑選	橋高薰風選
	加島由一選	杉本孝子選	宮西弥生選		

12月号発表 (10月15日締切)

1月号

課題吟 「晴」「餅」  
「いっばい」  
初歩教室 「未 来」

## 平成11年度 大阪文化祭

### 第51回 川柳大会

と き 11月6日(土) 午前11時開場  
と ころ 大阪市立北区民センター  
(地下鉄堺筋線「扇町」駅、またはJR環状線「天満」駅から5分)

宿題 (各題2句・1時締切・欠席投句拝辞)

「角(つの)」	高橋定男選
「波」	波部白洋選
「時事雑詠」	柏原幻四郎選
「な ぜ」	谷口光穂選
「手 品」	宮口笛生選
「う どん」	住田英比古選

席 題 当日2題発表します  
会 費 1000円 (作品集後日郵送)  
賞 各題秀句に各主催者名「川柳賞」  
主 催 大阪府・大阪府教育委員会  
大阪市・大阪市教育委員会

### 本社11月句会 6日(土) 予定

兼題 「謎」「イヤリング」「突然」  
「たくらむ」「迷う」

## 夜市川柳募集

第5回「齒」 小林由多香選  
ハガキに3句 10月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺 川 柳 会

### 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
  - (2) 渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百円(同)

平成十一年十月一日発行

編集兼 橋 高 薫

発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ー ト

大阪市阿倍野区三好町二(一)一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話(06)691-1691-4番

振替〇〇九八〇一五十三三六八番



【イメージ・キーワード】  
“Value for Human”  
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号  
TEL・FAX (06)6372-1178